●国際連合大学 2012-2013 年国際教育交流事業●

中国教職員招へいプログラム

実施報告書

第 1 班：2013 年 11 月 13 日(水) ― 11 月 24 日(日)

第 2 班：2013 年 12 月　1 日(日) ― 12 月 10 日(火)

国　　際　　連　　合　　大　　学　（UNU）

公益財団法人　ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

はじめに

国際連合大学（United Nations University）は、持続可能な人類の安全保障、気候変動、開発、平和構築など、国連とその加盟国が直面している、喫緊の地球規模の諸問題の解決への取り組みに、研究、教育、能力開発、知識の普及を通じて寄与することを目的とする国連機関です。

国際連合大学は、2002 年に主にアジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的とし、日本政府からの拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を開始しました。本事業のもと、同年、日中国交正常化 30 周年を記念した「中国教職員招へいプログラム」が開始され、同大学からの委託を受けてユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施を担当し、これまで 10 回にわたり、1,200 名近い中国の教職員を日本に招へいしてきました。

2012 年には諸般の事情によりプログラムの実施が延期になっていましたが、今回 2 年ぶりに再開する運びとなりました。第 11 回目となる今回の国際連合大学国際教育交流事業・中国教職員招へいプログラムは、第 1 班を 2013 年 11 月 13 日（水）より 24 日（日）までの 12 日間、第 2 班を 2013 年 12 月 1 日（日）より 10 日（火）までの 10 日間にわたり、中国の小・中・高等学校の教職員等 99 名（第 1 班：50 名、第 2 班：49 名）を我が国に招へいしました。このプログラムは学校およびその他の教育・文化施設を訪問・見学することにより、日本の教育制度およびその現状についての理解を深め、ひいては、両国の相互理解と友好を促進することを目的としています。

実施にあたりましては、文部科学省、中国政府教育部、中華人民共和国駐日本大使館、中華人民共和国駐大阪総領事館、外務省、および訪問先の学校、その他教育・文化機関等、多数の方々の多大なるご支援とご協力をいただきました。ここにあらためて関係の皆様方に厚く御礼申し上げます。

2014 年 3 月
国際連合大学
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

目次

第Ⅰ章　　実施内容

1. 第1班プログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
2. 第2班プログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

第II章　　コメントと提案

1. 中国教職員・・ 31
2. 主な受入れ学校および機関・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

付録

1. 実施要項・・ 59
2. プログラム日程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
3. 参加者リスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
4. 関係機関リスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
5. 文部科学省講義資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
6. 過去のプログラム実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85

第I 章

実施内容

1. 第1班プログラム

2. 第2班プログラム

１.第１班プログラム

1-1.来日、オリエンテーション（第１日目）

日中情勢の影響により延期されていた、昨年実施予定であった「中国教職員招へいプログラム」の第1班50名が、2013年11月13日（水）に来日した。

同日、滞在先のホテルメトロポリタンエドモント3階「千鳥」にて、オリエンテーションが行われた。公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）人物交流部部長の佐々木万里子氏から参加者に歓迎のあいさつがあった後、それぞれのグループに随行するACCU担当スタッフが紹介された。最後にACCU職員よりプログラム日程説明や滞在ガイダンス等が行われ、参加者全員、ホテルで夕食をとった。

1-2.開会式（第２日目）

プログラム第2日目、11月14日（木）は朝から開会式が行われた。はじめに中国教職員団を歓迎して、本事業主催者である国際連合大学大学院サステイナビリティと平和研究科の事務局長の秋葉正嗣氏よりあいさつがあった。本事業は両国の間の友好と相互理解の促進を目的として実施されてきており、平和な社会の構築に向けて教育面から貢献するものとして、大変意義があり、昨年来延期されていた本プログラムが、今回こうして再開できて誠に嬉しく、また、本年6月に中国政府の招待で、北京市および甘粛省蘭州市の学校および教育文化施設を訪問し、訪問校の先生方も今回の訪問団と一緒に来日しており、再会できたことも大変嬉しいことであると述べた。

続いて文部科学省大臣官房国際課国際協力企画室長の永井雅規氏よりあいさつがあり、自身も4年前に日中の行政官吏として訪中し、現地の訪問期間や家庭を訪れたことによってかけがえのない経験や多くの知識を得ることができたと述べた。そして中国は日本にとって何千年も交流を続けてきた大切な隣国であるため、今回の招へいプログラムが訪問団員の皆様にとって貴重な経験になることを期待すると述べた。

次に中華人民共和国駐日本国大使館一等書記官の楊光氏よりあいさつがあり、日中関係の緊張状態が続いている今だからこそ、両国の交流の場が必要であると述べた。そして日中両国は隣国であるため、互いに歩み寄り、理解しあうことが重要であるとし、この非常にバラエティに富んだプログラムが組まれている 12 日間を健康で過ごすと共に、交流の中で友情を育んでほしいと述べた。

最後に訪問団を代表して総団長である北京市人民政府教育督導室督導一処処長の張士佐（ZHANG Shizuo）氏が、初等中等教育は教育の基本であり、中国では「基礎教育」と呼び、基礎には3つの意味、即ち、国民の資質向上の基礎、優れた人生の基礎、国民全体の教育の基礎、それぞれを築くものであると述べた。更に、人口大国から人材大国に移行している中国において、国民の満足できる教育の実施が我々の課題となっており、日本の教育は鑑となることが多くあり、今回の訪問を通して、日本の教育に対しての理解を深め、日中両国の友好も一層深まると考えている、とあいさつがあった。

1-3.講義Ⅰ（第２日目）

「日本の初等中等教育」
文部科学省　初等中等教育局
初等中等教育企画課企画係長　栗山和大

開会式に続き、同会場にて、文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課企画の栗山和大係長から「日本の初等中等教育」についての講義が行われた。

講義内容は以下の通りである。

Ⅰ．日本の基本的な初等中等教育制度
・学校数、在籍者数、本務教員数
・在籍者数、就園率・就学率の経年変化
・義務教育制度の概要
・教育行政制度の概要

・教育委員会制度の概要
・教育基本法の概要
・学校指導要領
・教員養成・免許制度の概要
Ⅱ．日本の現状認識と教育政策の方向性
・日本の現状に対する認識
・これから求められる力
・現状認識を踏まえた教育政策

講義の後に設けられた質疑応答の時間には、「スーパーサイエンスハイスクールの現状について」「小中学生の学習負担、授業コマ数、卒業要件について」「教員の配置、教員の異動などの人事システムについて」「都道府県による高等学校の評価や教員評価の方法について」等数多くの質問が挙がった。

1-3.講義Ⅱ（第２日目）

「日本における ESD の推進について」
文部科学省国際統括官付ユネスコ振興推進係長　江幡忍

講義Ⅰの後、休憩時間を挟み、文部科学省国際統括官付ユネスコ振興推進係長の江幡忍氏から、「日本における ESD の推進について」の講義が行われた。
講義内容は以下の通りである。

Ⅰ．持続可能な開発のための教育（ESD）について
1. 万人のための教育
2. ミレニアム開発目標
3. 学習：秘められた宝
4. 国連持続可能な開発のための教育の 10 年
5. ESD に関する我が国の取組
6. ESD に関する文部科学省の取組
Ⅱ．我が国のユネスコスクール
Ⅲ．ESD への取組
1. 日本/ユネスコパートナーシップ事業
2. 日韓教職員交流
3. ESD 日米教員交流
4. SEAMEO（東南アジア教育大臣機構）－Japan ESD Award
Ⅳ．ESD に関するユネスコ世界会議

講義の後に設けられた質疑応答の時間には、「学校における ESD 教育の具体的な実施方法、実施内容について」など質問が挙がった。

1-4.歓迎交流会（第２日目）

文部科学省による講義のあと、同ホテル 1 階の「クリスタルホール」において歓迎交流会が開催された。文部科学省国際統括官の加藤重治氏ほか、ACCU からは理事の髙坂節三氏、顧問の齋木尚子氏が出席した。
加藤氏からは、日中両国の相互理解と交流の更なる促進のために、今回の日本での滞在期間中に得られた体験を通じ、この日本の姿を参加者ご自身が指導する生徒や同僚の先生方など、多くの方に伝えて欲しいというあいさつがあった。続いて ACCU 理事の髙坂氏より、今回の訪問で、日本の教育、社会、文化のありのままの姿に参加者ご自身の眼、耳、肌で直接触れ、感じていただきたいとのあいさつが送られた。
各代表あいさつの後、中国教職員訪問団を代表し、総団長の張士佐氏から返礼のあいさつがあった。
記念品交換の場では、ACCU から訪問団へ記念品が贈られ、総団長の張氏からも記念品が贈呈された。続いて、中華人民共和国教育部と文部科学省も記念品の交換を行った。
ACCU 顧問の齋木氏の乾杯の音頭で、歓談がはじまった。会の日本側参加者の中には、本プログラムでの受入れ協力校の校長もおり、学校訪問に先立ちお互いを知る機会となった。

1-5.中華人民共和国駐日本在日本中国大使館教育処主催懇談会（第２日目）

夕方、中華人民共和国駐日本国大使館教育処に招待され、公使参事官の白剛（BAI Gang）氏と教育部門の大使館員との懇談会に出席した。約 2 時間程度の意見交換の時間の中で、まず白公使参事官より日本の文化や社会について、具体例をあげての説明があった。団員からは午前中の講義を受け

て、日本の学校の給食や栄養管理について、体育教育について、教員の業務内容や自己マネジメント方法などについて質問があった。それに対して、白公使参事官から、まず中国との相違点が示され、日本の学校教育が「人を育てる」教育であり、給食から学生の身体を育み、クラブ活動等から地域コミュニティや社会に繋がり、地域社会が学生を育むなど、学校教育が果たす役割について、説明があった。最後には学費についての質問があり、実際に日本で留学生活を送ったことのある大使館員の話は、日本への理解を深めるのに大きく役立つものだった。

1-6.学校、教育文化施設訪問

(1) 学校、教育文化施設訪問（第 3 日目）

－A グループ－
市川学園市川中学校・高等学校

プログラム第 3 日目の 11 月 15 日（金）午前中、高等学校の教員を中心とする A グループは、市川学園市川中学校・高等学校を訪問した。同校は、「国際社会で活躍できる品格あるリーダー」の育成を目指し、「学力・教養力」「人間力」「サイエンス力」「国際力」の４本柱とした教育活動を実践している。

訪問団一行を、同校理事長・学園長古賀正一氏をはじめとする教職員一同、そして生徒たちが道を作り、旗を振って出迎えた。

まずは多目的ホールにて、古賀理事長・学園長より「心からのもてなしでみなさんを迎えたいと思い準備をしてきた」というあいさつがあった。続いて同校校長小川暢久氏が、学校の方針や運営体制などについて説明し、幕張メッセで同校が実施している大規模な入試の様子などについても紹介された。

その後、中国の教職員により中学 1 年生を対象とする 2 つの模擬授業が行われた。1 つ目の授業は「ミャオ族の文化」で、ミャオ族の習慣や文化などについての授業が行なわれ、生徒たちからは「なぜミャオ族は銀細工を重視するのか？」といった質問が挙がった。2 つ目の授業は「中国の宇宙開発」で、月面着陸を目指す中国国家航天局の取り組みについて説明があり、更に昨年 6 月に行われた、女性飛行士による宇宙からの授業についての紹介もあった。

2 つの授業を終えた後は、学校の施設を見学する時間が設けられた。訪問団一行は 8 万冊の蔵書を誇る図書館や自習スペース、第三教育センターの他、講堂を兼ね備えた総合体育施設、100 人編成オーケストラが演奏することのできる國枝記念国際ホールなどを見学した。

次に、多目的ホールにて同校副校長及川秀二氏進行のもと、ミニシンポジウムが開催された。はじめに同校の生徒から訪問団に対する歓迎のあいさつと学園生活についての紹介が中国語でなされ、それに続いて発表や意見交換などが行われた。その中で訪問団からは道徳の授業内容や教材についての質問が挙がり、それに対して同校からは、教員団が授業内容を考えて実施していること、モラルハザードや救急救命、公共でのマナーの他、携帯電話や SNS 使用などについて授業を行っているという回答があった。また、学校側からは生徒のスマートフォンの使用について、中国の学校ではどのような対応をしているかという質問が挙がった。これに対し訪問団側からは、禁止はしていないが、決められた場所でしか使用してはいけないこと、授業前に決められた箱に入れるようにすることなど、一定のルールが設けられており、それを破った場合には懲罰を与える場合もあるという回答があった。また、中には校内でそもそもインターネットに繋がらないようにする措置が取られている学校もあるということが付け加えられた。

訪問団離校の間際には、中国語を話すことのできる生徒たちが大勢集まり、中国語で訪問団の先生たちに話しかける光景が見られた。最後に全員で記念撮影を行い、同校の生徒たちは一行のバスが見えなくなるまで手を振って見送っていた。

中国語で訪問団に話しかける生徒たち（市川学園）

<u>千葉県立現代産業科学館</u>

市川学園市川中学校・高等学校を後にしたA グループは、同日午後、千葉県立現代産業科学館を見学に訪れた。同館は、産業に応用された科学技術を体験的に学ぶことができる施設である。

科学館内の「創造の広場」では、同館の職員の説明を受けながら、さまざまな産業技術の元となっている自然科学の実験を体験し、迫力ある放電実験についても見学することができた。産業の歴史の展示がある 2 階は自由見学となり、一行は館内に展示されている「フォード 1 型」で記念写真を撮るなど、出発時間になるまで見学を楽しんでいた。

－B グループ－
<u>荒川区立原中学校</u>

プログラム第 3 日目の 11 月 15 日（金）、吉林省教育庁調査研究員の孫艶（SUN Yan）氏を団長とするBグループ 25 名は、荒川区立原中学校を訪問した。同校は、2014 年に創立 20 周年を迎えたばかりの学校で、中学校としては珍しいモダンな造りの建物である。

訪問団一行が到着すると、同校校長刑部之康氏が歓迎のあいさつと、学校についての紹介を行った。その後に質疑応答の時間が設けられ、そこでは道徳の授業の進め方や、中国国籍の生徒への指導法などについて質問が挙がった。

その後、2 つのグループに分かれて校舎を視察した後、中国教職員が、中学 3 年生の 2 クラスで中国の学校生活について授業を行った。学校生活の一日の流れや、学校の施設について紹介がなされ、生徒たちの興味・関心を強く惹きつけていた。同校の生徒が中国教職員に質問を次々に行い、授業が大変盛り上がる場面も見られた。授業を終えた後、訪問団一行は 10 クラスに分かれて給食を生徒と一緒に楽しんだ。

昼食休憩後は、2 グループに分かれて教員同士の交流が行われた。保護者との連携の方法、部活動、習熟度別授業など、さまざまなテーマが挙がり、終始和やかな雰囲気で交流が進んだ。

最後にもう一度校長のあいさつがあり、訪問団からは記念品の贈呈が行われた。

学校紹介をする中国教職員（原中学校）

⑵箱根・河口湖視察（第４・５日目）

プログラム第 4 日目の 11 月 16 日（土）の朝、訪問団一行は東京のホテルを出発し、山梨県の昇仙峡・河口湖に向かい、忍野八海を経由して同日、河口湖畔に位置するホテルに宿泊した。

翌日、神奈川県・箱根の大涌谷と芦ノ湖に向かった。大涌谷、仙石原湿原、芦ノ湖を有する箱根は、日本ジオパークのひとつである。バスの中では、専門ガイドから中国語で大涌谷、仙石原湿原、芦ノ湖周辺の成り立ちや特徴などが説明され、それによって地球活動や環境についての理解を深めた。

(3)学校、教育文化施設訪問（第６日目）

－A グループ－

自由学園

プログラム第 6 日目の 11 月 18 日（月）、A グループ 25 人は、東京都東久留米市にある自由学園を訪問した。同学園は 1921 年、羽仁吉一・もとこ夫妻により設立されたキリスト教の学校である。自由学園の名称は新約聖書の「真理はあなたたちを自由にする」に由来し、同校では「知識の詰め込みでなく、自分自身の頭で考える力や、生徒自らが自治的に運営する学校生活を通じて、主体性と社会性を育てる」という建学の精神を根幹に「人間教育」に取り組んでいる。

訪問団一行が到着すると、同校学園長矢野恭弘氏と、男子部副部長更科幸一氏が出迎えた。まずは記念講堂に案内され、矢野学園長によって同校についての説明が行なわれた。その中で、同学園創立者が 1938 年 5 月に、北京市旧鼓楼大街小石橋胡同に「北京生活学校」を設立したことも紹介し、中国と同校の接点を示した。当時北京生活学校では、小学校を卒業した 15 歳から 18 歳までの中国人女子が学んでいた。それに続いて、生徒が中国語で同校男子部についての紹介を行った。これに対して訪問団の代表から感謝の意が述べられ、学校へ記念品が贈られた。

その後、男子部の生徒たちが自然豊かなキャンパスを案内した。訪問団一行は、校舎はもちろんのこと、生徒たち自らが耕す畑や、豚舎なども見学した。昼食は男子部食堂にて、生徒たちと一緒に食事を楽しんだ。

訪問当日は天気が大変良かったこともあり、休憩を挟み、同校の中庭にて訪問団一行と中等科 2 年生との交流授業が行なわれた。まずはじめに、訪問団から、中国の学校や地域についての紹介がなされ、生徒たちはとても興味深く聞いている様子であった。その後、一行は生徒と一対一でペアになり、お互いの自己紹介を行った。生徒たちには簡単な中国語会話の説明書が配布されており、それを頼りに一所懸命コミュニケーションを図ろうとしていた。一方、訪問団側も筆談を使ったり、ゆっくり話したりするなど工夫しており、生徒たちに中国語を少しでも理解してもらおうという姿勢が感じられた。このコミュニケーションを通し、授業が終わる頃には、お互いすっかり打ち解けた様子であった。

最後に締めくくりとして、矢野学園長をはじめとする教員と訪問団との意見交換の場が設けられた。公立学校と私立学校の違いや、学校教育における宗教、事故など緊急時の対応、入学希望者についてなど、幅広い質問や意見が飛び交っていた。

男子部中庭にて記念撮影（自由学園）

－B グループ－

日本科学未来館

プログラム第 6 日の 11 月 18 日（月）の午前中、B グループは日本科学未来館に向かった。施設に到着後、自由見学となり各々館内を見て回った。館内の施設の中でも、特に訪問団が高い関心を示したのは、日本を代表するヒューマノイドロボットをはじめ、さまざまな種類のロボットが揃っている「ロボットワールド」の展示コーナーであった。「ASIMO」等を実際に見学した他、展示や実演を通してロボットに触れながら、一行はロボットと人間の関係について理解を深めた様子であった。

その他にも宇宙の成り立ちや人類の歴史など、人類の未来につながるさまざまな展示や技術を見学し、実際に触れてみることにより、最先端を行く日本の技術力と創造力に対する知見を得ることができた。

江東区立第二南砂中学校

午後は、江東区立第二南砂中学校を訪問した。同校は開校から 30 年を迎え、2012 年 8 月にユネスコスクールに加盟した。海抜の低い

地域にあるため、防災教育に重点的に取り組んでいる中学校である。

訪問団一行が到着すると、同校校長本多浩一氏から歓迎のあいさつがあった。そしてランチルームにて訪問団は、栄養士から給食についての説明を受け、同校の給食を体験した。給食後は体育館に移動し、訪問団に対して全校生徒による歓迎セレモニーが開催された。生徒会長のあいさつに始まり、全校生徒による校歌の合唱があった。

ランチルームに戻った後、中国に縁のある同校の生徒 2 名と中国語で交流を行った。中国語での会話に、訪問団側も緊張せず和やかに意見交換ができた様子であった。

その後、訪問団に対して同校の ESD の取り組みとして、健康教育、防災教育についての説明がなされた。

説明が終わって、一行は同校の部活動を見学した。特に大会でも好成績をおさめている体操部を見学した。体育館を地域の体操クラブに開放し、学校の体操部と合同で練習を行っている様子も視察することができた。

最後に校長から訪問団に向けたあいさつがあり、記念品を交換し合った。同校からは、全員に深川地域で作られたふろしきがプレゼントされた。訪問団一行は同校の温かい見送りを受け、学校を後にした。

歓迎会の様子（第二南砂中学校）

(4) 学校、教育文化施設訪問（第 7 日目）

－A グループ－
江戸東京たてもの園

プログラム第 7 日目の 11 月 19 日(火)の午前、A グループは江戸東京たてもの園を訪問した。同園は、都立小金井公園の中に位置する野外博物館である。同館では、敷地内に現地保存が不可能な文化的価値の高い歴史的建造物を移築し、復元・保存・展示している。到着後、訪問団一行は園内の説明を受け、紅葉の美しい園内を散策しながら、日本の歴史的な建造物を堪能した。

東京都立東大和南高等学校

江戸東京たてもの園を後にした A グループは、昼食休憩を挟んで東京都立東大和南高等学校を訪問した。同校は、「克己・友愛・創造」を教育目標とし、学業と特別活動の両立を図りながら、のびのびとした教育を行っている。

訪問団が到着すると、まずはじめに同校副校長上野努氏から訪問スケジュールについての説明があった。続いて同校校長小倉良之氏の歓迎のあいさつがあり、それに対して訪問団の代表からは、今回の訪問が実り多いものであることを期待する、という言葉が返された。

そして、校長による学校概要説明が始まった。同校は近年、さまざまな進学対策を講じることによって大学進学実績を大幅に伸ばしている。入学検査においては、複数の部活動を対象として文化・スポーツ特別推薦制度を活用し、運動能力の高い生徒を集めている。また、「土曜授業の実施」、「講習・補修体制の充実」、「学習習慣の定着指導」、「きめ細かい進路指導」、「充実した行事・部活動」などが実践されている。これらに対し、訪問団員からは土曜授業のカリキュラム設定や、推薦入試の方法、進学率などについての質問が挙がった。

その後、2 グループに分かれての授業・校内見学が行なわれた。数学や化学の授業については中国でも共通の部分があるということで、一行も興味を惹かれていた様子であった。また図書館の見学も行なわれ、図書委員の生徒たちと直接話をする機会が設けられた。そこでは、訪問団が生徒たちに対して熱心に質問をしており、図書館運営に対する関心の高さが伺えた。

続いて、同校の教職員を交えた教員同士の意見交換会が開かれた。訪問団からは、主に「卒業に必要な単位について」、「教員の給与・社会的な地位について」、「図書委員など各委員会における生徒の役割について」、「進

路指導について」などの質問が挙がった。
そして最後に一行は、卓球部、サッカー部、ダンス部、吹奏楽部などの部活動を見学し、学業以外の場面、日本の高校生の放課後の様子について理解を深めることができた。

教職員との意見交換会（東大和南高等学校）

－B グループ－

横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校

プログラム第 8 日目の 11 月 19 日(火)朝、B グループの一行は東京のホテルを後にし、鎌倉へ出発した。JR 鎌倉駅前でバスを降車し、鎌倉小町通りと参道を散策しながら、鶴岡八幡宮を経由するルートを通って徒歩で横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校・中学校へと向かった。小学校の校舎は訪問時、耐震工事などにより校舎が工事中であったため、この日は隣接する中学校の会議室に迎えられた。

まずは同附属小学校副校長の桐生晃次氏より歓迎のあいさつが行なわれ、同小学校が大学附属校として学生の教育、教員研修などの役割を担っていることなどを中心に、学校の概要が紹介された。これに対し訪問団の代表者からは、日中の教職員の間に友情と発展の種をまくためにやってきたこと、同校から多くの優れた人材が輩出されることを願うというあいさつが返された。

授業見学では、体育館や校庭にて行われている体育の授業と、改築中の校舎で行われている音楽室での音楽の授業を見学し、その後、仮設校舎にて行われている基礎教科の授業を見学した。

仮設校舎で授業見学（鎌倉小学校）

横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校

小学校の見学を終えた訪問団一行は、会議室にて、同附属中学校副校長青木弘氏より改めて同校についての説明を受けた。そして授業見学では、訪問団員一人ひとりが各教室を自由に行き来し、関心のある授業を見て回った。中には生徒が使用している教科書に関心を示し、熱心に見入っている訪問団員もいた。また、同校は「2012 年度全日本合唱コンクール」で金賞を受賞した実績を持っており、次の大会を間近に控えた合唱のリハーサルや帰りの会での練習の様子も見学することができた。

更に、同校教職員との意見交換の場が設けられた。意見交換会の冒頭では、青木副校長が訪問団に対して「皆さん仕事は楽しいですか？それもと厳しいと感じますか？」と呼びかける場面も見られた。その言葉を皮切りに、双方の間で研究発表や試験の実施、全国学力テストなどについての率直な意見のやりとりが行われた。とりわけ同校が行う模擬授業については、具体的な実施の仕方や狙いなどについて、訪問団側から多くの質問が挙がった。

その後、中国からの帰国子女である生徒が交流に加わり、帰宅した後に塾に通ったり、自宅で深夜まで自習したりしている普段の生活などについて話をした。

青木校長より学校概要説明を受ける（鎌倉中学校）

(5) 学校、教育文化施設訪問（第 8 日目）

－A グループ－
筑波大学附属駒場中・高等学校

プログラム第 8 日目の 11 月 20 日（水）午前、A グループ一行は、東京都世田谷区にある筑波大学附属駒場中・高等学校を訪問した。同校は、1947 年に東京農業教育専門学校付属中学校として創立された国立中高一貫校の男子校であり、国立中学・高校としては日本でも有数の進学校である。しかし進学校でありながらユネスコスクールに加盟している他、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）として理数系に強い学校としても知られる。元気の良い自由闊達な雰囲気の中で、生徒の自主性を重んじた教育を実践している。

訪問団一行が到着すると、同校校長の星野貴行氏、副校長浜本悟志氏から続けてあいさつが述べられた。それに続き、同校教諭髙橋深美氏から、パワーポイントのスライドを使って筑波大学附属駒場中・高等学校の取組み、国立中高としての立場、教育の特長、進路、学校の特別行事などについての紹介が行なわれ、訪問団一行は同校についての理解を深めることができた。特に稲作を行う中高一貫校であるという説明を受けると、訪問団員からは「羨ましい」、「可能であれば取り入れたい」などというコメントが挙がった。

その後、一行は 2 グループに分かれて高等学校の授業の様子を見学した。特に、SSH の特徴である高校 2 年生の化学の授業を見学した際には、訪問団員の多くが盛んにカメラのシャッターを切っていた。また数学の授業では「小学生の算数の問題を考えよう」という内容が行なわれていた。体育の授業では、武道の一つである剣道が行なわれている様子を見学した。訪問団員は、授業の中でも体を鍛えることが重要だ、というコメントを述べていた。

訪問時、同校では文化祭を間近に控えており、その準備の真っ只中であった。訪問団一行は、放課後、準備に余念がない自由闊達な生徒たちを見て感心し、中国ではこういった授業は難しいという意見が述べられた。

一連の学校見学を終えた後、訪問団一行は同校教師たちとの意見交換に臨んだ。国内有数の進学校でありながら、生徒たちが萎縮しない雰囲気作りをしていくために必要なことは、生徒たちの自主性を大事にすること、勉強だけでない教育により、精神を鍛えて謙虚さを兼ね備えることなどが大切だという意見が挙げられた。

訪問の最後に、訪問団のグループ長からお礼の記念品が校長に手渡された。他の訪問団員もそれぞれの学校から持ってきた記念品を贈り、全員で記念撮影を行った後、一行は筑波大学附属駒場中・高等学校を後にした。

数学の授業見学（筑波大学附属駒場中・高等学校）

東京都立杉並総合高等学校

同日午後、A グループは東京都杉並区にある杉並総合高等学校を訪問した。同校は、2004 年に開校された国立中高一貫の全日制課程総合学科の共学校である。同校の教育課程は単位制となっており、数学・英語については習熟度によりきめ細かくクラス分けがされている。学業だけではなくクラブ活動も盛んで、広いグランドや弓道場など、運動設備も大変充実している。閑静な住宅街という立地の中、

明るく元気の良い生徒たちがのびのびと勉強・運動に励んでいる。

また、2012 年度にユネスコスクールとして承認を受けており、姉妹校であるオーストラリアの中等教育学校との国際交流も盛んである。

同校校長三橋信也氏は、東京都で 8 人目の民間出身の校長であり、中国上海で商社マンとして駐在していたという経歴の持ち主である。そのため三橋校長は、生徒たちに対してより社会性を求め、進路指導を行なっていると述べた。

訪問団が到着すると、まずは校長から歓迎のあいさつが述べられた。それに続いて、同校主幹教諭の田中幸徳氏から、総合学科高校の教育の特長、進路指導、国際交流行事、ユネスコスクールとしての取り組みなどが紹介された。訪問団員からは、「そもそも総合学科とは何か？」という質問が挙がった。学校側はそれに対し、生徒の将来を色々な可能性から進路決定させていくための学科であると回答した。訪問団側も、この説明によって理解が深められた様子であった。

その後、一行は 2 グループに分かれて高校の授業を見学した。同校の特徴である習熟度別クラスの数学・英語の授業をはじめ、女子生徒の体育の授業（器械体操）を見て回った。授業見学後に行なわれた教職員との交流では、訪問団員から生徒の進路指導について質問が出ており、同校では全校生徒の 95%が上級学校に進学すること、そのうち 4 年制大学には約半数が、短大・専門学校に 3 分の 1 が進学するという実際のデータが示された。また、一人ひとりの将来を考えたうえで、選択授業を生徒自身と教師が共有しているという学校側の取り組みについても説明がなされた。これらの取り組みに対して訪問団側からは、中国では生徒の自主性に任せた授業選択という体制がないということが述べられた。

最後に訪問団一行は、同校のクラブ活動を見学した。弓道場では、生徒たちから実際に弓の構えを教わる訪問団員の姿も見られた。また、グランドでは大声を上げてボールを追うサッカー部・野球部の生徒を見学し、更には和太鼓の演奏なども見て回り、訪問団員は一様に同校のクラブ活動の盛んな様子に大きな感銘を受けていた。

そして最後に、訪問団から学校側にお礼の記念品が贈られ、記念撮影を行った。

英語の授業参観（杉並総合高等学校）

－B グループ－
恵泉女学園中学・高等学校

プログラム第 8 日目の 11 月 20 日（水）、B グループ一行は、東京都世田谷区にある恵泉女学園中学・高等学校を訪問した。同校は 1929 年に創立された、併設型中高一貫校の女子校であり、キリスト教主義（プロテスタント）の学校である。通常の教育課程に加え、聖書、国際、園芸を学ぶことに重点を置いているのが特徴である。

訪問団が到着すると、同校学園長松下倶子氏から「感謝祭の日に中国教職員の皆さまを招待できるのは嬉しいことである」というあいさつが送られた。それに続いて、校長加藤英明氏、副校長本山早苗氏からそれぞれあいさつが述べられた。そして副校長鵜﨑創氏からは、日本における私立学校の割合やその成り立ち、宗教を学ぶ学校の割合などが詳しく説明された。ここで訪問団一行は、日本における恵泉女学園の位置付けをはじめ、学校の特色、生徒数、進路、学校の特別行事などの基本的な情報を理解することができた。

学校の概要が説明された後、一行は感謝祭特別礼拝の会場に招かれた。訪問当日、同校では収穫の恵みに感謝する感謝祭の特別礼拝が行われていたため、訪問団一行も礼拝に参加し、讃美歌や、生徒に向けられた話などを共に聞くことができた。

その後、一行は 2 グループに分かれて中学 1 年生から高校 1 年生の通常授業を見学した。その一つとなった英語の授業では、実際に訪問団員の一人が教団に立ち、自らの経験や英語の勉強方法などについて、生徒たちに向け

て英語でスピーチをする場面も見られた。

昼食休憩の後は、学生によるハンドベルやピアノの連弾演奏、オーケストラ演奏などを聞く場が設けられた。その見事な演奏に、一行は感銘を受けた様子で、大きな拍手を送っていた。

午後は午前中と同様に2グループに分かれ、現代社会の授業に参加するなど、続けて校内見学を行った。現代社会の授業では、社会科代表研修会委員長谷口稔氏が、自らの6回に渡る訪中の経験を高校3年生の生徒たちに紹介した。同じ授業の後半では、生徒たち・訪問団員がお互いに質問をし合う時間が設けられた。その中で生徒たちからは、「中国のクリスマスの様子は？」、「中国にも女子校、男子校はある？」、「英語は何歳から勉強する？」、「中国の方言は地方によってどれくらい違いがある？」など多くの質問が出た。訪問団員からも「中国に行ったことはある？」、「勉強のストレスはある？」、「卒業したらすぐ外国に留学したいと思う？」などの多くの質問が挙げられた。一行は、生徒たちからの生の回答を得ることができ満足気な様子であった。

最後には訪問団員と同校教職員の意見交換が行われ、訪問団側からは今回の学校訪問に対する御礼と、記念品の贈呈が行われた。その後、一行は同校の職員たちに見送られ、恵泉女学園中学・高等学校を後にした。

ハンドベルの演奏（恵泉女学園）

(6) 京都世界遺産見学と日本文化体験（第10日目）

訪問団の一行は、第9日目の11月21日（木）に東京から飛行機で大阪へと移動した。そしてプログラム第10日目となる11月22日（金）朝、大阪のホテルを出て京都を視察に出かけた。

京都では、まずはユネスコ世界遺産であり、古都京都の文化財の一部である金閣寺と清水寺を見学した。また、西陣くらしの美術館と冨田屋を訪れ、ここでは国の登録有形文化財および京都市景観重要建造物に指定されている町屋を視察した。町屋の家具や調度品を見学した後は、京都で古くから受け継がれてきたしきたりについての講話を聞いた。訪問団は、終始リラックスした様子で見学を楽しんだ。

1-7. 報告会（第11日目）

プログラム第11日目の11月23日（土）、大阪の会場にて報告会が行われた。式には、中国教職員50名の他、中華人民共和国駐大阪総領事館副領事の盛弘強氏、国際連合大学大学院サステイナビリティと平和研究科の事務局長の秋葉正嗣氏が来賓として出席した。また、ACCUからは理事の西村康氏が出席した。

報告会では、各グループ代表より20分ずつプログラムの感想、成果等についての発表が行われた。各グループの報告は以下の通りである。

－Aグループ－

はじめに、Aグループを代表し、Aグループ団長である貴陽市第十四中学校長の閻玲（YAN　Ling）氏が報告を行った。

お礼のあいさつに続き、訪問した市川学園中学校・高等学校、自由学園、東京都立東大和南高等学校、筑波大学附属駒場中・高等学校、東京都立杉並総合高等学校では、給食体験や生徒・教員との文化交流を通して、日本の人文教育が深く印象に残ったと述べた。

日本の教育については、習熟度によるクラス分け、バラエティあふれたさまざまなクラブ活動、学校教育と家庭教育が融合した生活に根付いた教育などから、人間性豊かな教育が行われていると感想を述べた。

また、Aグループは、北京市・吉林省・貴州省の教職員で構成されており、日本の学校との交流を通して、中国各地の初等中

等教育について大まかな状況を紹介できたこと、北京市十一学校の王篤年（WANG Dunian）氏が中国の宇宙飛行士について、貴陽市第十中学の李莉（LI Li）氏が中国の授業や少数民族のミャオ（苗）族の文化についての模擬授業を行い、中国の教員による授業風景を紹介できたことも報告された。

その他、千葉県立現代産業科学館、江戸東京たてもの園、箱根、富士山、河口湖への視察により、日本の自然や生態、環境についても理解が深まったと述べた。

今回のプログラムでは、教育・文化の相互交流が達成され、初等中等教育訪問団はこの交流に誇りを持つことができたと述べ、中日両国の友好、教育交流が永遠に続くことを希望する、と締めくくった。

－B グループ－

次に、B グループを代表し、北京師範大学貴陽附属中学校長の沈連柱（SHEN Lianzhu）氏より報告があった。

最初に、B グループの団長をはじめとする 25 名が、荒川区立原中学校、江東区立第二南砂中学校、横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校・中学校、恵泉女学園中学・高等学校を訪問し、教育交流を通じて、日本の各学校の特色ある理念に影響を受けたこと、また、このプログラムの運営に対する感謝の言葉が述べられた。

次に、訪問した学校について、感想が述べられた。内容は、以下の通りである。

1. 細かい管理：恵泉女学園中学・高等学校の廊下・エレベーターには応急担架や救急袋が用意されており、事故や天候急変への対応準備がなされていた。

2. 環境意識を高める：給食の配膳や片付け、掃除も生徒が行い、労働のありがたさを知り、環境保護を自覚的に進める教育を行っている。

3. 総合的な能力育成：横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校では、遠距離通学可能な体力をつけることを含む身体能力の向上、農業や募金といった体験型の教育を行うことよって、生徒の健全な成長を促進している。

4. 教職員は仕事熱心・正直：朝早くから夜遅くまで授業について考えている。

5. 人事制度・人事異動：公立学校の教員は、何年かで別の学校に異動する。定期的な人事異動により、均等な配置、均衡のとれた義務教育が実践されている。

最後に、今回のプログラムの総括として、

1. 教師が講義をして、学生が聞くという座学だけでなく、探求型の学習など新しい教学方法を試みることによって、学生が自主的に学習する能力を育てることが必要である。
2. 学校での学習効率の向上、経済的な家庭の負担や受験勉強等による学生の負担に対する施策を考える必要がある。

という意見が述べられた。

1-8. 閉会式

報告会に続き同じ会場にて、閉会式が行われた。

最初に、国際連合大学大学院サステイナビリティと平和研究科事務局長の秋葉正嗣氏よりあいさつがあり、今回の訪問を通じて、訪問団員の方に日本の学校教育制度およびその現状と課題について、多くのことを体験していただいたのは大変有意義であったと述べた。そして改めて、国の違いを超えて、子どもたちへの愛情、人々の間の尊敬の念が教育の基本であることを再認識していただいたのではないかと、訪問団へ問いかけた。更に、今回のプログラムで得られた日本と中国の教職員のネットワーク、交流の輪を今後も広げ、両国間の教育交流の一層の推進、そして両国間の友好と相互理解の促進に尽力してほしいと述べた。

続いてACCU理事の西村氏よりあいさつがあり、次世代の人材を育てる教員同士が互いに交流を深め、情報を交換し、啓発し

合うことは、日中両国の教育発展にとって極めて大きな意義があると述べた。また更に、訪問団の報告を聞き、日本の学校教育の現状や課題について、理解を深めてもらえたことがわかりうれしく思っていることを付け加えた。そして、今回得た経験や知見を、帰国した後、中国の教育現場で是非共有してほしいと訪問団に対して話し、これを機に学校間の交流や、教育交流活動の裾野が広がっていくことを心から期待していると述べた。

続いて中華人民共和国駐大阪総領事館副領事の盛弘強氏よりあいさつがあり、このプログラムによって10年間で1,300名の教職員が交流に参加していることは意義深いとし、参加者を通して関節的に、数万、数十万人いる中国の子どもたちに指導ができると述べた。また、日本の進んだ教育を学ぶと共に国際的な友情を大切にしたいと述べ、今後もこの交流が続いていき、なお一層盛んなものになることを祈っていると締めくくった。

最後に訪問団を代表して総団長の張士佐（ZHANG Shizuo）氏があいさつした。まずはじめに、さまざまな学校での交流を通して日本の教師たちの探究心に触れ、とても感銘を受けたと述べた。また更に、日本の教育現場を見学して、習熟度別授業の実施や個性の尊重やキャリア教育の体制ができており、一人ひとりにふさわしい教育が受け入れられているという感想を述べた。そして今回は限られた時間の中での交流であったが、これらは将来の基礎となり、今後更なる日中両国の発展のための活力となっていくだろうと述べた。

閉会のあいさつの後、日本側から各グループ団長に記念品の贈呈が行われ、閉会式は幕を閉じた。

２．第２班プログラム

1-1.来日、オリエンテーション（第１日目）

11 月に引き続き、日中情勢の影響により延期されていた昨年実施予定の「中国教職員招へいプログラム」の第 2 班 49 名が、2013 年 12 月 1 日（日）に来日した。

同日、滞在先のホテルメトロポリタンエドモント 3 階「春琴」にて、オリエンテーションが行われた。公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）人物交流部部長の佐々木万里子氏から参加者に歓迎のあいさつがあった後、それぞれのグループに随行するACCU担当スタッフが紹介された。最後にACCU職員よりプログラム日程説明や滞在ガイダンス等が行われ、参加者全員、ホテルで夕食をとった。

1-2.開会式（第２日目）

プログラム第２日目、12 月 2 日（月）は朝から開会式が行われた。はじめに中国教職員団を歓迎して、本事業主催者である国際連合大学大学院サステイナビリティと平和研究科の事務局長の秋葉正嗣氏よりあいさつがあった。本事業は各国の間の友好と相互理解の促進を目的として実施されてきており、昨年来延期されていた本プログラムが、今回こうして再開できて誠に嬉しいと述べた。また、本年 6 月に中国政府の招待で、北京市および甘粛省蘭州市の学校および教育文化施設を訪問し、大変貴重な経験が出来たことに触れ、今回の訪問団の先生方にとっても、今回の訪問が是非とも日本の学校や教育を知る貴重な経験になって欲しいと述べた。

続いて文部科学省大臣官房国際課国際協力企画室長の永井雅規氏よりあいさつがあり、自身も 4 年前に日中の行政官吏として訪中し、現地の訪問期間や家庭を訪れたことによってかけがえのない経験や多くの知識を得ることができたと述べた。そして中国は日本にとって何千年も交流を続けてきた大切な隣国であるため、今回の招へいプログラムが訪問団員の皆様にとって貴重な経験になることを期待すると述べた。

次に中華人民共和国駐日本国大使館一等書記官の楊光氏のあいさつがあり、自分も以前訪問団の一員として参加したことがあるため、このプログラムには大変愛着があると話した。更に日中関係の緊張状態が続いている今だからこそ、両国の交流の場が必要であるとし、今回の交流は、互いの国のことを学び合い、両国の誤解を解き、平和を目指すものでもあると述べた。更に、今回の交流を通じて多くの友人を作ると共に、友情を長く育んでほしいと締めくくった。

最後に訪問団を代表して総団長である江蘇省教育庁副調査研究員金剣（JIN Jian）氏が、百年の大計は教育にあり、初等中等教育はすべての根幹である。近年、中国の職業教育や高等教育は発展してきたが、先進国とはまだ隔たりがある。日本の教育には学びに値することが多くあり、今回の訪問を通して、日本の学校教育を理解し、真剣に視察を行い、日本の教員や学生と交流を深め、教員同士の友好と両国の友好を促進する思いである、とのあいさつがあった。

1-3.講義Ⅰ（第２日目）

「日本の初等中等教育」
文部科学省　初等中等教育局
初等中等教育企画課企画係長　栗山和大

開会式に続き、同会場にて、文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課企画の栗山和大係長から「日本の初等中等教育」についての講義が行われた。

講義内容は以下の通りである。

Ⅰ．日本の基本的な初等中等教育制度
- 学校数、在籍者数、本務教員数
- 在籍者数、就園率・就学率の経年変化
- 義務教育制度の概要
- 教育行政制度の概要
- 教育委員会制度の概要
- 教育基本法の概要
- 学校指導要領
- 教員養成・免許制度の概要

Ⅱ．日本の現状認識と教育政策の方向性
- 日本の現状に対する認識

・これから求められる力
・現状認識を踏まえた教育政策

講義の後に設けられた質疑応答の時間には、「特別支援学校の学生について」「学生の学習負担軽減について」、「教員の配置、教員の異動などの人事システムについて」など数多くの質問が挙がった。

1-3.講義Ⅱ（第２日目）

「日本における ESD の推進について」
文部科学省国際統括官付専門官　荒井忠行（日本ユネスコ国内委員会事務局）

講義Ⅰの後、休憩時間を挟み、文部科学省国際統括官付専門官の荒井忠行氏から、「日本における ESD の推進について」の講義が行われた。

講義内容は以下の通りである。

Ⅰ．持続可能な開発のための教育（ESD）について
1. 万人のための教育
2. ミレニアム開発目標
3. 学習：秘められた宝
4. 国連持続可能な開発のための教育の 10 年
5. ESD に関する我が国の取組
6. ESD に関する文部科学省の取組

Ⅱ．我が国のユネスコスクール

Ⅲ．ESD への取組
1. 日本/ユネスコパートナーシップ事業
2. 日韓教職員交流
3. ESD 日米教員交流
4. SEAMEO（東南アジア教育大臣機構）－Japan ESD Award

Ⅳ．ESD に関するユネスコ世界会議

講義の後に設けられた質疑応答の時間には、「ESD の第 2 期教育振興基本計画の具体策について」など質問が挙がった。

1-4.歓迎交流会（第２日目）

文部科学省による講義の後、同ホテル 2 階の「万里」において歓迎交流会が開催された。文部科学省大臣官房国際統括官の加藤重治氏ほか、ACCU からは評議員の見上一幸氏、谷口邦生氏、顧問の林梓氏が出席した。

加藤氏は、日中国交正常化 30 周年を記念して 2002 年に始まったこのプロジェクト発展の背景には、教育交流の意義を理解し重んじる日中両国の姿勢があるとし、それが礎になっていることを忘れてはならないと述べた。更にこの事業を通してより多くの方が相手の国のありのままの姿を正しく知ることが、日中関係を前進させることにつながると述べた。

各代表あいさつの後、中国教職員訪問団を代表し、総団長の金剣氏から返礼のあいさつがあった。

記念品交換の場では、ACCU から訪問団へ記念品が贈られ、総団長の金氏からも記念品が贈られた。続いて、中華人民共和国教育部と文部科学省も記念品の交換を行った。

ACCU 顧問の林梓氏と評議員の谷口邦生氏による乾杯の音頭で、歓談がはじまった。会の日本側参加者の中には、本プログラムでの受け入れ協力校の教職員もおり、学校訪問に先立ちお互いを知る機会となった。訪問団員たちの来日の緊張も徐々に溶けはじめたようで、和やかに懇談に興じていた。

1-5.学校、教育文化施設訪問

(1) 学校、教育文化施設訪問（第 3 日目）

－C グループ－
東京学芸大学附属国際中等教育学校

プログラム第 3 日の 12 月 3 日（火）午前、C グループ一行は、東京学芸大学附属中等教育学校を訪問した。同校は、国際社会の第一線で活躍する人材を育成するため、東京学芸大学が附属高等学校大泉校舎と附属大泉中学校を統合した中高一貫教育の学校である。その特徴の一つが、国際バカロレア機構によるワールドスクールの認定を受け、グローバルスタンダードのカリキュラムと日本の学習指導要領を融合させた教育を実施していることである。また、全生徒の 4 割が海外で教育を受けた経験を持って

いる。

訪問団員が到着すると、同校副校長の福泉悦也氏が歓迎のあいさつを行い、中国訪問団を代表して、C グループ団長の楊衡（YANG　Heng）氏の返礼があった。その後、福泉副校長から公立、私立、国立大学附属のそれぞれの特色について説明があり、それを踏まえて、附属中等教育学校について説明がされた。その後、教員は 2 グループに分かれ、中学校の授業を中心に、国語、ネイティブによる英語、数学、社会、化学、美術の授業を参観した。一行は、通訳の説明を聞きながら、生徒たちが使用している教科書に見入ったり、教室内の展示物や表等にも高い関心を示したりしていた。社会の授業では、ある事例について生徒たちが議論を展開している模様を見学した。化学ではパワーポイントを用いた研究発表が行われており、訪問団員は興味を惹かれた様子であった。

授業見学後、国際交流委員会の生徒を含む昼食会が行われた。中には中国語のできる生徒や中国からの留学生もおり、活発な意見交換ができた。参加生徒が午後の授業に戻った後、出口校長他数名の教員との質疑応答の時間が設けられた。この質疑応答では、教員の質の確保、保護者との連携、少人数学級、服装の規定等について中国側から質問があった。

最後に訪問団より記念品が手渡され、玄関にて出口校長を囲んで記念写真を撮り、学校を後にした。

出口校長、福泉副校長を囲んで（東京学芸大学附属中等教育学校）

ふれあい下水道館

同日午後は、小平市が運営する「ふれあい下水道館」を訪問した。同館は、下水道の役割を知り、水環境について考えてもらうための施設である。訪問団一行は、社会科見学で訪問する小学生向けの上下水道システムについてのビデオを鑑賞した後、展示物を見ながら地下 25m 地点まで下りていき、実際の下水道管の中に入り、下水の色や臭いなども体感した。

－D グループ－
荒川区立尾久宮前小学校

プログラム第 3 日の 12 月 3 日（火）午前、D グループは荒川区立尾久宮前小学校を訪問した。同校は全校児童 230 名の小規模校でありながら、2012 年 10 月にユネスコスクールとして認定され、「食育」と「環境教育」を通して ESD を推進している。

到着すると伊藤英夫校長の出迎えがあり、一行はすぐにランチルームへと案内され、伊藤校長から写真のスライドショーを交えた学校の説明を受けた。同校では江戸伝統野菜の三河島菜やシイタケの校内栽培、鮭の里親事業、ブナ植林体験、合宿体験など、各学年趣向を凝らした教育活動を行っている。そのため訪問団員らは、興味深く熱心にその説明に耳を傾けていた。訪問団代表からは感謝の言葉と、各学年で中国教職員 6 名が授業をするので、これを機に児童たちに中国への理解を深めてもらうと同時に、今回の訪問が実り多いものになることを期待する、と述べられた。

その後一行は体育館へ案内され、全校児童による「八木節」の演奏が披露された。心のこもったこれらのもてなしに、訪問団は拍手を送った。演奏が終わると、一行は 2 グループに分かれ、各学年の授業・校内見学を行った。授業に対してだけではなく、展示物や各特別教室などについても熱心に質問する様子が見られた。

各学年における交流授業では、訪問団員それぞれが切り紙や書道、歌、地域の特色などについて紹介し、児童たちの興味関心を惹いていた。最初は緊張していた様子の児童達も、授業が終わる頃にはすっかり打ち解けて中国

を身近に感じるようになった様子であった。
お昼には給食を食べ、一行は児童たちに見送られながら同校を後にした。

児童との交流授業（尾久宮前小学校）

荒川区立尾久八幡中学校

同日午後は、荒川区立尾久八幡中学校を訪問した。同校は教育目標として、「文武両道・礼節・品格」を貫き、夢や目標をもって「主体的に活動する」ことができる、知・徳・体の調和のとれた、自ら学び、思いやりのあるたくましい生徒を育成することを掲げている。

また、2013 年 4 月に新校舎が完成したばかりで、教室は教科別に分かれており、生徒は授業ごとに教室を移動することになっている。各教科の教室の向かい側には「メディアスペース」が設置されているなど、多様な学習活動を行える環境が充実している。また図書館、パソコン室、多目的室は一体となっており、これらを活用して「調べ学習」や「まとめ学習」ができるようになっている。更に新校舎では、太陽光発電、ソーラーウォール、屋上・壁面緑化、緑のカーテン等の環境技術を取り入れており、各階の中央階段横に設置されている ECO モニターでは、発電量や使用量を自由に見ることができるようになっている。

訪問団一行は、到着後 2 グループに分かれて、同校校長の栗原満氏と副校長の近江貞之氏の案内の下、授業見学および校内見学を行った。

見学が一通り完了すると、栗原校長より学校概要の説明があり、それに対して訪問団員からは「教科別クラスのメリットについて」、「習熟度別クラスの振り分けについて」等、さまざまな質問が挙がった。

最後に訪問団代表から感謝の意が述べられ、学校へと記念品が贈られた。

学校へ記念品贈呈（尾久八幡中学校）

－C・D グループ－
中華人民共和国駐日本在日本中国大使館教育処主催懇談会

同日夜は、両グループ共に中国大使館に招待され、江東区にある大使館の教育部門を担当する教育処を訪問し、公使参事官の白剛（BAI Gang）氏を囲んでの懇談会が催された。

両グループはそれぞれ、午後の訪問先から大使館に到着した。全員が集合すると、はじめに白剛公使参事官より、日本には大勢の中国からの留学生がいて友好関係にあること、そのうえで、今のような時期だからこそ、日本の姿をきちんと見てよいところを学んでほしいとのあいさつがあった。

その後は通訳を交えず、訪問団から大使館への日本の教育事情に関する質問等も挙がっていたが、次第に中国の教育の課題のうち、特に教育格差に関して、政府の対応を求める発言が相次いだ。今回の訪問団員は比較的裕福な地域からの参加者が多いが、そのような教育を享受できない地方が多くあることを多くの訪問団員が憂い、互いに真剣に議論を交わしていた。そのような中で、教育の平準化を成し遂げた日本の教育システムについては一層高い関心が寄せられている様子であった。

大使館教育部にて白剛公使参事官（正面着席者右から 2 人目）と懇談

生徒の作品見学（筑波大学附属桐が丘特別支援）

(2) 学校、教育文化施設訪問（第 4 日目）

－C グループ－
筑波大学附属桐が丘特別支援学校

プログラム第 4 日の 12 月 4 日（水）午前、C グループ一行は、筑波大学附属桐が丘特別支援学校を訪れた。1958 年に開校した同校は、国立大学附属学校としては国内で唯一の肢体不自由者を教育対象とする特別支援学校である。校内には、通学する児童生徒を対象とする本校校舎と、心身障害児総合医療療育センターに入所している児童生徒を対象とする施設併設学級校舎の 2 つのキャンパスがある。

訪問団一行が学校に到着すると、副校長の西垣昌欣氏からあいさつと学校概要の説明が行われた。その後訪問団員らは 2 グループに分かれ、同校の授業や施設の見学を行った。

見学に際しては、廊下やエレベーター、教室、トイレなど、肢体不自由児を対象とした施設の設計や工夫、その使い方等が紹介された。また、併設している病院と連携した緊急対応の様子等についても説明された。

意見交換の時間では、同校校長の川間健之介氏が訪問団員らからの質問に対し、日本の特別支援教育や桐ヶ丘特別支援学校の取り組みについて、詳しい説明を行なった。

現在、中国では特別支援教育に力を入れ始めているという。そのため訪問団員の中でも特別支援に関わってきた教職員や、聾人学校に勤務する教師たちは熱心にメモをとったり質問をしたりしていた。

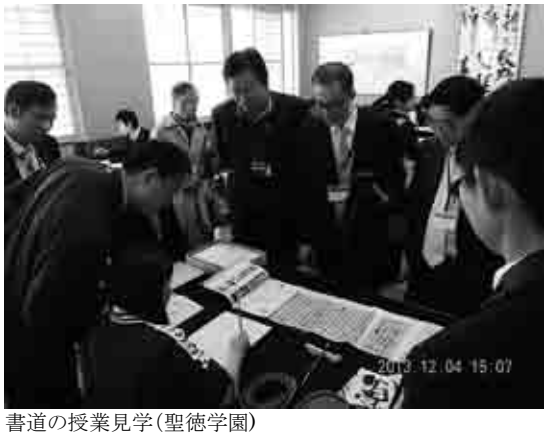
聖徳学園中学・高等学校

同日午後、一行は聖徳学園中学・高等学校を訪問した。同校は聖徳太子の「和」の精神を教えとした 86 年の歴史を持つ幼小中高の一貫校である。本プログラムでの中国教職員の受入れは、今年 10 月の中国教職員の訪問に続いて 4 度目となる。

訪問団が到着すると校長の伊藤正徳氏からあいさつがあり、その後訪問団員らは 3 グループに分かれ、6 時間目の英語、書道、美術、体育などの授業を見学した。見学グループの内一つは、学生が中国語で各教室を案内してくれた。訪問団員らは直接、日本の生徒を身近に感じながら、生の声で学校の様子を知ることができた。また、今年から中国では書道が必修科目になったため、一行は特に興味深く書道の授業を見学している様子であった。

学校の概要説明を受けた後、生徒たちから団員らに向けた合唱と和太鼓演奏のプレゼントがあり、団員らの気持ちを和ませた。意見交換会では、生徒と中国教職員が通訳を介さず、中国語のできる生徒を中心に、中国語や英語で直接交流を行っていた。このような時間を通して、互いの国の学校の様子や生活について質問をし合い、それぞれが理解を深めることができた。

学校を去る際、校門で伊藤校長をはじめとする教職員と生徒らがバスが見えなくなるまでずっと中国の旗を振り続け、見送ってくれた。


書道の授業見学(聖徳学園)

－D グループ－
星美学園小学校

プログラム第 4 日の 12 月 4 日(水)、D グループ一行は東京都北区にある星美学園小学校を訪問した。同校はカトリック・ミッションスクールとして、1946 年にヨハネ・ボスコによって創設された。創立者の教育理念(信仰・慈愛・理性)による「愛に根ざした教育」に基づき、神と人の前に清く正しく晴れやかに生きる誠実な児童を育成することを目指し、「清い心」「たゆまぬ努力」を校訓に掲げた教育を行っている。また、世界 89 カ国に姉妹校を持っている国際的な学校でもある。

訪問団員一行が到着すると、まず全校児童による歓迎会が開かれた。多目的ホールへ訪問団が入場すると、中国と日本の国旗を振りながら、元気な笑顔の子どもたちが笑顔で迎えてくれた。中国語で児童代表が挨拶し、全校児童より歌が披露された。その後訪問団員一人ひとりに児童から手作りのメダルが贈呈された。訪問団代表からも児童たちへお礼の言葉が贈られ、いくつかの質問をするなど、互いに楽しい交流の時間を過ごした。

その後、一行は 2 グループに分かれて、学校施設および授業見学を行った。見学した授業は、音楽、図工、英語、算数、宗教の 5 つである。休憩を挟み、再び多目的ホールに案内された一行は、小学校 3 年生による環境劇「地球の SOS を探知せよ～環境警察 2013～」を観劇した。訪問団員からは、ゴミ分別やエコキャップ活動など、児童たちが地球を大切にする気持ちが伝わってきた、感心した、などの感想が述べられた。

昼食は、小学校 6 年生の児童と一緒に食べた。通訳無しで、最初はお互いどのような質問をしたらよいか戸惑っている様子であったが、簡単な英語や筆談を交えながらコミュニケーションを図り、昼食時間が終わる頃には打ち解けて笑顔が見られるようになっていた。

更に清掃の様子を見学した後、最後に竹内幸夫教頭から学校概要説明がなされた。同校の学校教育の特色として、祈りと聖歌を大切にしていること、児童と教員が一体となって教育活動を行っていること、小学校 1 年生から 6 年生まで宿泊体験を行っていることなどの説明があった。

その後設けられた意見交換の場では、訪問団員から「専科の教員の研修について」、「公立と私立の違いについて」、「宗教教育の役割について」、「国際理解教育について」等について質問が挙がった。意見交換会終了後、教職員と児童たちの見送りを受け、一行は同校を後にした。

3年生児童が演じた環境劇の感想を述べる中国教職員(星美学園小学校)

(3) 学校、教育文化施設訪問（第 5 日目）

－C グループ－
興本扇学園　足立区立興本小学校・扇中学校

プログラム第 5 日の 12 月 5 日(木)午前、C グループ一行は東京都足立区にある興本扇学園を訪問した。同校は 2006 年に開校された足立区初の小中一貫校であり、2008 年には文部科学省の承認を受けている。義務教育

9 年間を一貫したカリキュラムに基づき、児童・生徒の人間力の育成を進めている。義務教育の 5 年間を 1 期(1～4 年)・2 期(5～7 年)・3 期(8・9 年)に分けており、1 期が一つの校舎、2 期および 3 期がもう一つの校舎に分かれて学んでいる。また 3 年生からは国際コミュニケーション科を設け、英語学習・国際理解・日本伝統文化学習を柱として、生きる力を養成している。

訪問団が到着すると、代表生徒から中国語で歓迎のあいさつが行なわれた。次に、校長の海老原昌巳氏よりあいさつがあり、続いて訪問団を代表して C グループ団長の楊衡氏からあいさつが述べられた。その後、興本扇学園の ESD の取り組みについて発表があり、ESD 教育の方法とその成果が説明されると、訪問団員から子どもたちの取り組みの様子が素晴らしいというコメントが挙がった。歓迎会の最後には宮原賢二副校長から謝辞が述べられた。

次に一行は、学校設備と授業の見学に向かい、屋上にあるプールを含めて学校の教室や保健室等を見学した。授業では通常の社会科、算数、国語などの授業に加えて、国際理解教育の一環である英語の授業を参観した。また、4 時間目の授業は訪問団員が 2 クラスにて授業を行った。1 つのクラスでは、中国の詩人たちが愛した「西湖」について伝え、西湖が表されている紙幣を生徒たちに見せていた。もう 1 つのクラスでは、中国家庭における年間のお祝い事について説明した。お正月や端午の節句など日本とよく似たお祝いと、中国独自のお祝い事に、生徒たちは興味津々の様子だった。

給食交流では中国教職員が一人ずつ各教室に分かれ、児童、担任の先生と一緒に昼食を取った。言葉でのコミュニケーションは難しいようだったが、児童たちが身振り手振りで一所懸命給食の説明をしている様子が見られた。また訪問団員も、「美味しい」の中国語「好吃」の発音と漢字等を児童に教えていた。

見学を終えると、総団長の金剣(JIN Jian)氏から、「語彙札」とお礼の記念品が海老原校長に手渡され、他の訪問団員もそれぞれの学校から持ってきた記念品を同様に手渡した。最後に全員で記念撮影を行なって、多くの児童・生徒と先生が見送る中、興本扇学園を後にした。

海老原校長あいさつ(興本扇学園)

－D グループ－
東京都学芸大学附属大泉小学校

プログラム第 5 日の 12 月 5 日(木)、D グループ一行は、東京学芸大学附属大泉小学校を訪問した。同校は、教育実習、教育の実践研究の実践の場として、大学での研究理論を実際の指導に取り入れている。特色としては、体験を通して学ぶ体験学習や、小学校 1～6 年生が同じグループで活動する縦割り集団活動等が挙げられる。また、日本で初めて帰国子女教育学級が設立された経緯があり、国際教育にも力を入れている。

訪問団一行が到着後、同校校長の柴田義晴氏が歓迎のあいさつをし、訪問団を代表して南京市力学小学教諭の厳伯春(YAN Bochun)氏からあいさつが返され、それぞれ記念品を交換した。その後、副校長の細井宏一氏より学校についての説明があり、更に学校紹介の DVD を鑑賞した。ここでは、学校の年間行事等が紹介された。質疑応答では、入学試験、国際理解教育等についての質問が挙がった。

その後、一行は 2 グループに分かれて授業と校内見学を行い、美術、家庭科などの授業のほか、研究発表会の様子を視察した。研究発表会では、児童たちが「速く走る方法」、「犬の一日の生活」等のテーマをもとに、他学年の児童や保護者を相手に堂々と自分の研究成果を発表する様子に、訪問団員らも感銘を受

けていた様子であった。その後、中国に住んでいた児童 3 人が訪問団と給食を共にし、最後に記念撮影をして一行は学校を後にした。

児童の発表に耳を傾ける中国教職員（東京学芸大学附属大泉小学校）

－C・D グループ－
国立科学博物館見学

同日午後、両グループはそれぞれ午前中に訪問した学校から国立科学博物館に向かった。

到着後は自由見学となり、一行は恐竜化石、日本列島の自然についての展示などを興味深く視察していた。また、当日はとても天気が良く紅葉も見事だったことから、上野公園の散策・写真撮影等も含めて日本の秋を楽しむことができた。

(4) 学校、教育文化施設訪問（第 6 日目）

－C グループ－
大田区立大森第六中学校

プログラム第 6 日の 12 月 6 日（金）午前、C グループ一行は東京都大田区にある大田区立大森第六中学校を訪問した。同校は 1947 年に開校された区立中学校であり、ESD 教育に大変力を入れている。2011 年度にユネスコスクールとして承認を受けると、2012 年度にはユネスコスクール最優秀賞を受賞している。授業だけで完結するのではなく、地域との交流により生徒たちに ESD 教育を実践させるというとてもユニークな活動を行っている。

訪問団が到着すると、同校校長の税所要章氏から歓迎のあいさつが述べられ、その次に C グループ団長の楊衡氏から挨拶が述べられた。その後、訪問団員は学校設備の見学に向かい、体育館を含めて学校の教室や保健室を見学した。そのまま学校教員との交流会が行われ、短い時間ではあったが、中国での教室の生徒数や、生徒間の問題などについて意見が交わされた。

更に体育館に移ると、訪問団員は全校生徒からの歓迎を受けた。中国人生徒による中国語スピーチや、日本の学校の紹介が行われた。生徒による漢詩の日本語朗読が発表されると、訪問団員の代表が同じ漢詩を中国語で抑揚をつけて朗読するという一幕もあった。また、環境問題についての英語スピーチを聞き、最後は全校生徒が合唱で「流浪の民」を歌った。

その後、訪問団員はそれぞれ 8 クラスに分かれて授業を行なった。訪問団員らは英語や身振り手振りを交えながら、中国の風習、食べ物、遊びなどを紹介した。あるクラスの中国語講座では、生徒たちが一生懸命簡単な挨拶や、名前の中国語読みを覚えようとしていた。この全クラス授業は、税所校長の強い希望で実現したものであり、これによってより一層充実した日中交流が出来た。

給食交流では、生徒会や各クラスの委員が訪問団員の座る各テーブルに 4 名ずつわかれて座り、同校の教職員らも交えながら一生懸命コミュニケーションを図っていた。

最後の挨拶では、訪問団側からお礼の記念品が校長に手渡され、他の訪問団員もそれぞれの学校から持ってきた記念品を手渡した。最後に記念撮影を行って、一行は多くの生徒たちと先生が見送る中、大森第六中学校を後にした。

税所校長あいさつ（大森第六中学校）

は、特に ESD について訪問団員から多くの質問が挙がった。質疑応答の後、訪問団員から訪問に対する御礼が述べられ、学校側へ記念品が贈呈された。

児童たち手製のウェルカムボード（八名川小学校）

－D グループ－
江東区立八名川小学校

プログラム第 6 日の 12 月 6 日（金）、D グループ一行は江東区立八名川小学校を訪問した。同校はユネスコスクールの一つで、ESD カレンダーを作成して各教科に ESD を落とし込み、児童たちが ESD を身近に感じながら、率先して実行できる自立性を養うための取り組みをしている。地域や世界各国との交流も盛んで、訪問日当日も近くの保育園の先生と園児たちをはじめ、町内会長、インドネシア共和国から訪れたインドネシア国内ユネスコ委員会の教職員が来校していた。

まず、校長の手島利夫氏から八名川小学校の学校紹介と ESD の取り組みが紹介された。その後、訪問団員らは 2 つのグループにわかれ、授業の様子と全校児童の作品が並べられた展覧会を見て回った。児童から歌のプレゼントを受けた後は、小学校 3 年生の 2 つのクラスで中国文化についての紹介を行った。教室では中国の切り紙細工「剪紙」を共に作ったり、中国版ロミオとジュリエット「梁山伯と祝英台」の話を訪問団員が紹介したりしていた。また、授業では児童から中国の学校の様子や中国の食べ物などについて多くの質問が出た。訪問団員からの返答に、児童たちは中国と日本の文化の相違に驚いたり、うなずいたりしながら興味深く聞いていた様子であった。

その後行われた教職員同士の意見交換で

－C・D グループ－
日本科学未来館見学

同日午後、C･D グループは、それぞれ午前中に訪問した学校から日本科学未来館に向かった。14 時頃に到着し、館内は自由見学となった。

さまざまな展示の中でも、特に日本を代表するヒューマノイドロボットをはじめ、さまざまな種類のロボットが揃っているロボットワールドにはほとんどの訪問団員が興味を示していた。「ASIMO」や「パロ」等を見たり、展示や実演を通してロボットに触れたりしながら、一行はロボットと人間の関係について学習した。

ここで人類の未来につながるさまざまな技術を見学した一行は、日本の技術力と創造力について認識を新たにしていた様子であった。

（4）箱根・河口湖視察（第 8・9 日目）

プログラム第 8 日の 12 月 8 日（日）朝、訪問団一行は、東京のホテルを出発し、山梨県の富士山資料館・河口湖に向かった。はじめに訪問した富士山資料館では、富士山の成り立ちや宗教的な意味、富士山にちなんだ民俗学等を学習し、次に訪問した富士山樹空の森では、有史以来の富士山の爆発の様子や、今の富士山の形状になるまでにどういったことがあったかということを学ぶことができた。この日は

河口湖畔に位置するホテルに宿泊した。
翌日は箱根の大涌谷と芦ノ湖に向かった。大涌谷では風が強く寒かったが、温泉の源泉の熱さを確認することができ、専門ガイドからは中国語でその成り立ちや特徴などが説明され、理解を深めた。

1-6. 報告会（第 7 日目）

プログラム第 7 日目の 12 月 7 日（土）、東京の会場にて報告会が行われた。式には、中国教職員 49 名の他、中華人民共和国駐日本国大使館一等書記官の楊光氏、文部科学省大臣官房国際課国際協力企画室室長補佐の山口茂氏、江東区立八名川小学校校長の手島利夫氏が来賓として出席した。
報告会では、各グループ代表より 20 分ずつプログラムの感想、成果等についての発表が行われた。各グループの報告は以下の通りである。

－C グループ－

はじめに、C グループを代表し、C グループ団長である浙江省教育庁主任課員の楊衡（YANG Heng）氏が報告を行った。
まず、お礼の言葉が述べられ、今回のプログラムは非常に内容が良かったと述べた。
次に、プログラムの内容について、以下の 3 点の感想を述べた。

1. 文部科学省の方々による講義によって、日本の初等中等教育の全体像を把握することができた。ESD については、新鮮な教育理念であると感じた。教育についても ESD を強化していく必要がある。

2. 訪問先には、公立と私立、普通の学校、特別支援学校があった。小学校、中学校、高等学校と各段階の教育現場も見学した。授業参観、小平市の下水道館および国立科学博物館、日本科学未来館の見学を通して、日本の学校の教育情報や課外教育について知ることができた。

3. 印象深かったことは以下の通り。
① 日本の学生は秩序があり、礼儀正しい
② 施設はそれほど立派ではなかったが、それが持つ意味や管理方法、ソフト面で学ぶべき点がたくさんある
③ 日本の小中学校では、学生の主体性、個性を尊重し、学生に自信を持たせる教育を行っていた
④ 日本の小中学校のカリキュラムは実際の生活に即し、生徒の力をうまく引き出していて、教育内容も広範である。また、その教育内容には、家庭教育、社会教育、自己教育も含まれていた。

以上の 4 点が有効的に結び付いており、これらは、私たちが学ぶべき点だと思う。

楊氏は次に、中国明代の哲学者、王陽明が提唱した「知行合一」を引用し、見聞きしたことをしっかり国に持ち帰り、自分自身の仕事と結び付け、少しずつ実践し、自国の初等中等教育の向上に力を尽くしたいと述べた。
最後に、日本側の友好的で暖かい対応に感謝し、この友情の気持ちを持ち帰り、家族や友人に伝え、中日両国の友好のために努力を続けていきたいと締めくくった。

－D グループ－

次に、D グループを代表し、北京市月壇中学教学副校長の王涛（WANG Tao）氏より報告があった。内容は以下の通りである。

開会式では、栗山先生から日本の初等中等教育について講義があり、新井先生からも日本の ESD について講義をいただいた。
講義の内容を念頭におき、4つの小学校と1つの中学校、国立1校、公立 2 校、私立1校を訪問した。学校訪問では、広く、全面的に日本の初等中等教育について知ることができた。

荒川区立尾久宮前小学校
食育、環境教育を通じた ESD、人と人、人と自然、人と社会について学んでいた。中国教職員訪問団が、中国の伝統文化についての授業を 6 コマ担当した。時間は短かったが、一生懸命準備し、表情豊かにジェスチャーを交えながら、中国文化について授業を行った。児童たちは大喜びだった。

1 年生:トチャ(土家)の民謡
2 年生:中国の名所、うるしの絵
3 年生:揚州の名所、切り紙細工、小籠包の食べ方
4 年生:杭州名所
5 年生:漢字の起源、簡体字の紹介
6 年生:書道、隷書について

東京学芸大学附属大泉小学校
体験教育、労作教育を視察した。

荒川区立尾久八幡中学校
文武両道などが興味深かった。

江東区立八名川小学校
2 コマの授業を行った。

星美学園小学校
とても印象に残る体験をした学校だった。盛大な歓迎会にはじまり、英語、数学の授業参観、富士山への林間学校を表現した劇の上演、給食交流、一斉清掃の見学を行った。学校を去る時には全校児童が見送ってくれた。7 時間の交流中、終始明るい歌声が聞こえてきた。天真爛漫な児童たちには、先生方がいつも寄り添っていた。信仰、自愛、理性によって、皆清く正しく育つのだと感じた。

今回のプログラムに参加して、以下の 3 点を学んだ。

1. 学校運営に関しては、貫き続けることが非常に重要であると感じた。訪れた 5 つの学校がすべて特色を持っており、学校の方向性を定めてからは貫き続ける態度が見られた。

2. 多様性は生存に有利という言葉がある。5 つの学校は日本の初等中等教育のひとつの縮図のようであった。違いがあるからこそ、子どもたちは自分に最も合った教育を受けることができ、幸せに健やかに育つことができる。

3. 人生の高みは初等中等教育の厚みにかかっている。日本の国民の資質の高さを感じた。日本人の資質とは、誠実であり、規律や決まりを守ること、喜んで人を助けること、仕事に熱心であること、責任感が強いこと等である。これらは初等中等教育のおかげであると感じた。小さいときから忍耐心やチャレンジ精神を育んでいるのは、日本の教育が成功している一面であるといえる。

王氏は最後に、中国の教育は、まだまだ日本に及ばないところがあると思うが、今回学んだことをこれから長期にわたって自分の学校で応用、実践することは可能であるとし、現実に即した改善をし、維持していくことが今後の課題であると述べた。

1-7. 閉会式

報告会に続き同じ会場にて、閉会式が行われた。
最初に、文部科学省大臣官房国際課国際協力企画室室長補佐の山口茂氏からあいさつがあった。報告会を聞き、訪問団員と日本の教職員・生徒とが活発に交流ができ、具体的な課題などについて理解を深められたことを感じ、本事業を支援するものとして、本事業が成果を生み出していることに感謝したいと述べた。また、このプログラムは日本の教職員や児童生徒にとっても、大切な隣人である中国への理解を深める機会であり、皆様がそれぞれ感じたことは、直接文化に接した人のみが獲得し得る財産であると述べた。
続いて ACCU から人物交流部部長の佐々木万里子氏があいさつをした。報告会では、訪問団員の皆様から日本のいい面ばかりを発表いただいたが、今後はお互いの悪い面も話し合えるような関係になることを願うと述べ、次に日本の教職員が訪中する際には、更に深く話し合う機会を得たいと話した。また今回の訪問で得られたことを、帰国後、教育現場で生かしてほしいと述べた。
次に、中華人民共和国駐日本国大使館一等書記官の楊光氏よりあいさつがあり、各グループの報告を聞き、皆様が多くの収穫を得たことを感じ、心の底から今回のプログラムが成功したことを感じたと述べた。また、今回の訪問で体験した日本の精神的な部分、資質の高さ、そして日本の先生との友情などについて、中国に帰国した後同僚の教職員に伝えていただきたいと述べた。
最後に訪問団を代表して総団長の金剣

（JIN Jian）氏があいさつを行なった。今回の訪問を通して、まずは日本の教育が世界に目を向けている点が印象的だったことを挙げ、中国でも教育を発展させる任務は重要であると述べた。また、短い期間ではあったが両国の教育に携わる者同士が理解を深め、友情を育むことができたため、今後もこの交流プログラムが長期的に続くことを祈ると締めくくった。

閉会のあいさつの後、日本側から各グループ団長に記念品の贈呈が行われ、閉会式は幕を閉じた。

第Ⅱ章

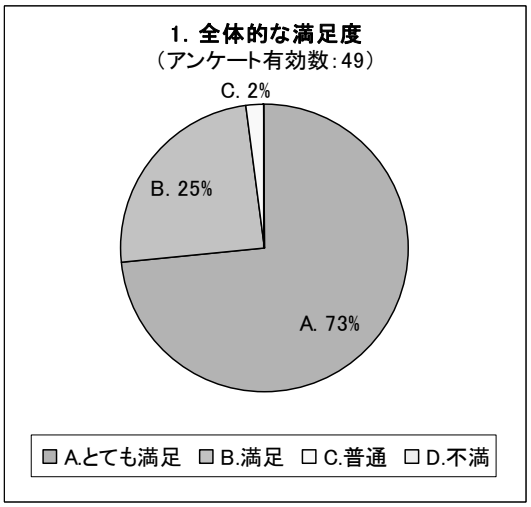
コメントと提案

1. 中国教職員
2. 主な受入れ学校および機関

◆1. 中国教職員

〔第１班（A,B グループ）総合評価票（11 月）〕

質問１.全体的な満足度



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-1　総団長：張士佐（とても満足）
ＡＣＣＵは全てのプロセスにおいて、奉仕、団結、友愛を持ち合わせ、団体として仕事に対して熱心に取り組む精神、姿勢を見せてくれた。彼女たちの努力によって、中日両国の基礎教育への協力と交流に幅広いプラットフォームが築かれた。これは、両国民の教育交流と協力に素晴らしい明日を創造してくれた。

A-21　グループ長：閻玲（とても満足）
仕事に対する姿勢が真面目で、対応がきめ細かく、準備が行き届いている。特に学校見学、授業参観において教師と生徒が連動していた。いろいろな生活を体験できた。

A-9　副グループ長：谷立福（とても満足）
プログラム全体が合理的に組まれており、内容が豊富である。また、準備も細部まで行き届いている。

A-25　中国教育部：王鉄輝（満足）
対応がきめ細かく、行き届いている。スタッフの態度がとても良い。訪問先の学校は適正で、学校の種類が豊富である。

B-5　グループ長：孫艶（満足）
学校を５校訪問できたから。

B-16　副グループ長：沈連柱（とても満足）
学校見学や教員生徒の連携から、真の日本の基礎教育を知ることができた。箱根等視察は、日本の生活と文化を示し表している。講義で日本の全体像を知ることができた。

B-25　中国教育部：権学紅（とても満足）
プログラム内容は細かくて規則的である。学校見学も豊富で多様である。

質問２.参加目的は何か

【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-1　総団長：張士佐
①日本の基礎教育分野における改革と模索していることを知ること。
②両国の基礎教育分野における幅広い相互訪問、相互協力、交流を見出すため。

A-21　グループ長：閻玲
日本の人文教育、教育理念、教育方法、教育効果を知ること。

A-9　副グループ長：谷立福
中日両国の文化と基礎教育の差異を更に理解するため。交流をとおして、将来の中日両国民の友好を促進するため。

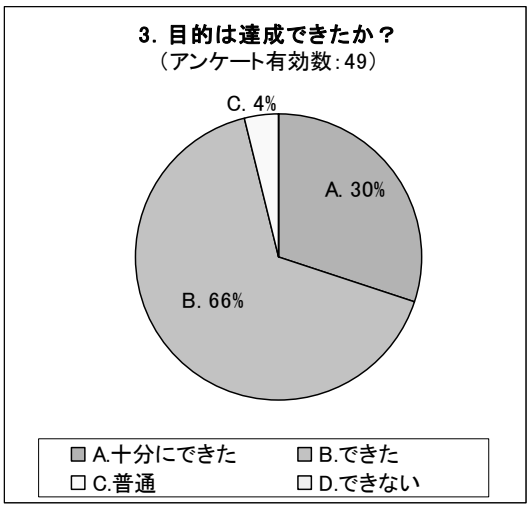
A-25　中国教育部：王鉄輝
引率。訪問内容を調整し、実行すること。

B-5　グループ長：孫艶
日本の教育状況を知るため。

B-16　副グループ長：沈連柱
教育交流のため、日本文化を知るため、中日両国民の友好のために訪日した。所期の目的も一応達成出来て満足である。

B-25　中国教育部：権学紅
日本の基礎教育の概要を知るため。

質問３.目的は達成できたか



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-1　総団長：張士佐（できた）

A-21　グループ長：閻玲（十分にできた）
学校教育、授業参観、中日文化教育交流活動を通して、以下の点を知ることが出来ました。日本の教育文化、特にレベル別教育における教育に対する厳密な姿勢。豊富で多彩なクラブ活動、学生の身体鍛錬、学校教育と家庭教育の融和、人をもって基本とする教育管理、学校が形作る学園、教育の場としての学校、楽しい学園など。

A-9　副グループ長：谷立福（できた）
中日双方の教員はとても友好的であり、お互いを尊重し合っている。今後機会があれば、相手国を訪問し、友好訪問と学術交流ができることを期待する。

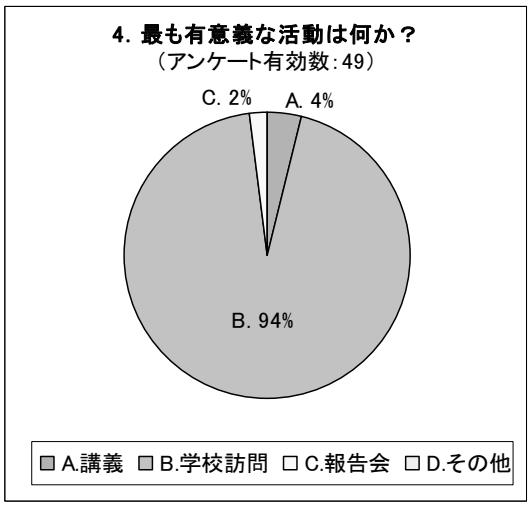
A-25　中国教育部：王鉄輝（できた）
今回の訪問の重要なポイントである、学校訪問は順調に終えることができた。教員たち全員が、得るものがあったと感じている。

B-5　グループ長：孫艶（できた）
学校訪問をとおして、状況をある程度知ることができた。

B-16　副グループ長：沈連柱（十分にできた）
日本人の教育、文化は私に深い印象を残した。私が学んだ理念は職場に応用し、同僚や友人たちにも影響を与えたいと思います。

B-25　中国教育部：権学紅（できた）
日本の基礎教育の概要を知ることができた。しかし、これは日本の一部の学校の基礎教育状況を知ることが出来たのであって、日本の全体的な基礎教育の状況を代表するものであるかどうかは不明である。

質問４.最も有意義な活動は何か



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-1　総団長：張士佐（学校訪問、報告会）
両者共に有益で収穫があった。両者は相互に関係し、補完し合っているため、どちらかを疎かにすることは出来ないものである。
講義における報告内容は充実していた。データがあり、分析も行われ、日本の教育全体における数的根拠もはっきりしており、科学的であった。今後の発展の道筋を全面的に述べており、日本の基礎教育の基本路線と将来の発展目標が一目で分かるものだった。

A-21　グループ長：閻玲（学校訪問）
学校見学、授業参観、教員と生徒の連動、教育に関する質疑応答。

A-9　副グループ長：谷立福（学校訪問）
授業参観、見学、教員や生徒との交流活動などをとおして、相互理解と友情が増した。中日両国民の友好関係を維持し、発展を促進させるための役割を果した。

A-25　中国教育部：王鉄輝（できた）
お互いの交流をとおして、教員の視野が広がり、両国教職員の相互理解が進み、国際化が

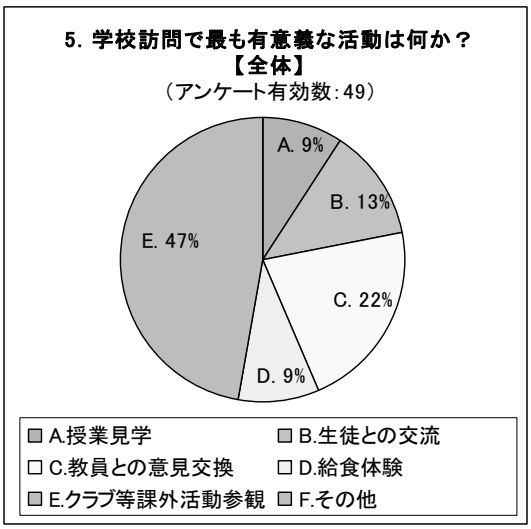
促進された。

B-5　グループ長：孫艶（学校訪問）
教育現場の状況を視察できた。

B-16　副グループ長：沈連柱（学校訪問）
日本の基礎教育が生徒の健康、体育、芸術教育を重んじているということが印象深かった。学校に行けば、真の状況を見ることができるし、友人が出来て友情も芽生える。

B-25　中国教育部：権学紅（学校訪問）
異なるタイプの学校を訪問することで、日本の基礎教育に対して初歩的な理解をすることができた。

質問５.学校訪問で最も有意義な活動は何か



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-1　総団長：張士佐（給食体験）
このような制度は、完全に「生活、即ち教育」であるということを深く内包しているものである。保護者が学校の発展や教育にかかわり、生徒たちが友情を築くための活力と懐かしさを添えるものであった。学生は体験と実践を通して、特に高校教育の組織過程は学生を全面的に、健康的に、持続的に発展させるための活力と推進力を添えるものであった。

A-21　グループ長：閻玲（授業見学）
講義を聞き、直接授業に触れることができた。体育の授業、クラブ活動、剣道、ダンス、サッカーなどを見学し有益だった。

A-9　副グループ長：谷立福（給食体験）
身近に学生と親身に交流をはかったことにより、お互いの距離が縮まり、両国の長期的な友好の基礎を築くことができた。

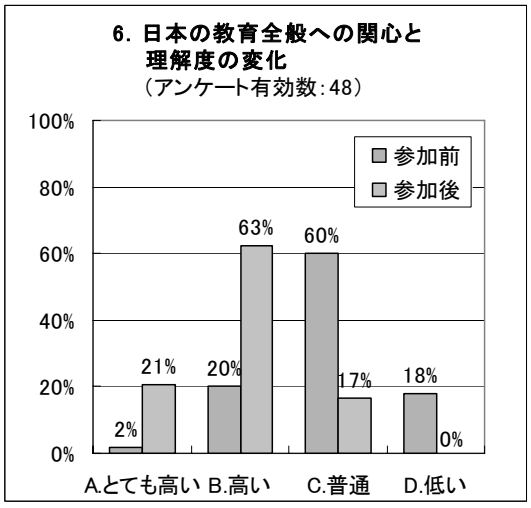
A-25　中国教育部：王鉄輝（クラブ活動等の課外活動参観）
日本の学校の特徴であり、強みでもある。

B-5　グループ長：孫艶（クラブ活動等の課外活動見学）
活動内容が幅広く豊富である。中国の学校は課外活動が少ない。

B-16　副グループ長：沈連柱（給食体験）
生徒と一緒に食事をすると、彼らが給食配膳に対しての真の態度を観察することができる。そして学校の具体的なやり方を知ることが出来る。これは中国で校長を務める私にとって大変な手助けとなる。

B-25　中国教育部：権学紅（教員との意見交換）
教師の全力で仕事に打ち込む精神と奉仕精神を知ることができた。

質問６.日本の教育全般への関心と理解度の変化



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-1　総団長：張士佐（高い）

A-21　グループ長：閻玲（高い）

日本で直に人文教育を体験して、理解が増した。訪日前と比べて理解度は体験したことにより、更に深められた。

A-9　副グループ長：谷立福（普通→高い）
訪日前に日本の基礎教育についてあまり理解しておらず、訪日後、日本が中国と同様、基礎教育を重視していることに気づいた。学校は学生の状況に合わせて教育を行い、良いところを伸ばすなど、多くの点で学びに値するところがある。

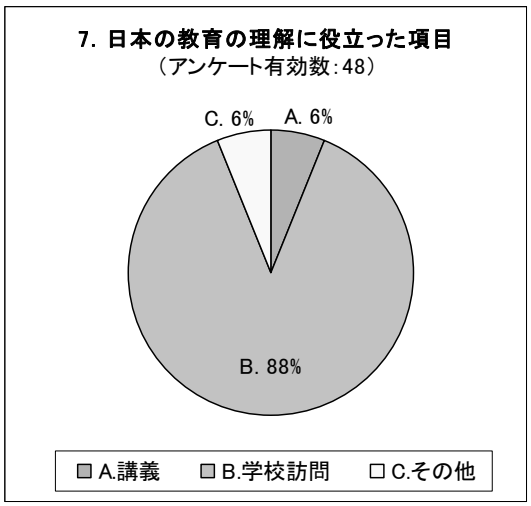
A-25　中国教育部：王鉄輝（高い→高い）

B-5　グループ長：孫艶（普通→高い）
百聞は一見にしかず。

B-16　副グループ長：沈連柱（普通→高い）
参加前は、資料などから一般的な日本の教育について、例えば生徒の学習負担が重い、教員は大変であるなどを知るだけでした。
参加後、日本の基礎教育全般を理解し、小中学校の教学活動に対してより詳しくなった。特に中国と異なる点、良くできている点について更に知ることが出来た。

B-25　中国教育部：権学紅（低い→高い）
参加前は日本の基礎教育に対してあまり理解がなかった。参加後は日本の基礎教育に対して初歩的な理解が得られた。

質問７.日本の教育の理解に役立った項目



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-1　総団長：張士佐（学校訪問）
学校を訪問し、視察を深く行うべきである。

A-21　グループ長：閻玲（学校訪問）
学校見学、授業参観を通して、学校教育を理解することによって、日本の教育への重視度が高いということを知ることが出来た。

A-9　副グループ長：谷立福
授業参観、教員や生徒との交流などをとおして、日本の教育を理解するために役立った。

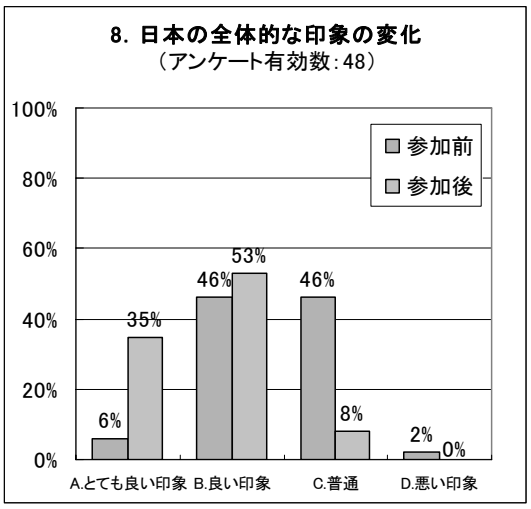
A-25　中国教育部：王鉄輝（講義）
全体的に理解し、日本の教育状況を把握することが出来た。

B-5　グループ長：孫艶（学校訪問）
学校の教員や生徒との交流をとおして、日本の文化や教育を理解した。

B-16　副グループ長：沈連柱（学校訪問）
校長先生や先生が校内を歩いたり、見たりして、学生と先生が連携して、学校活動にかかわることは、全面から学校を知り、教師と生徒を知ることになる。これは報告を聞くよりも日本の教育を理解するのに役立つ。

B-25　中国教育部：権学紅（学校訪問）
真の日本の基礎教育を深く知ることが出来た。

質問８.日本の全体的な印象の変化



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-1　総団長：張士佐（良い印象）
伝統的な美徳と文化が交互に輝きを放ち、科学技術発展と文明は時代と共に進んでいる。

A-21　グループ長：閻玲（良い印象）
学校訪問と交流をとおして、中日文化交流教育の予備知識を身につけることが出来た。しかし時間の関係で、日本の人文、民族、風俗に対する理解が深められず、学校見学や授業見学から良い印象を受けるにとどまってしまった。

A-9　副グループ長:谷立福（普通→良い印象）
日本は全体的に清潔で、環境緑化もされている。ほとんどの人たちはルールを守り、礼儀を重んじている。

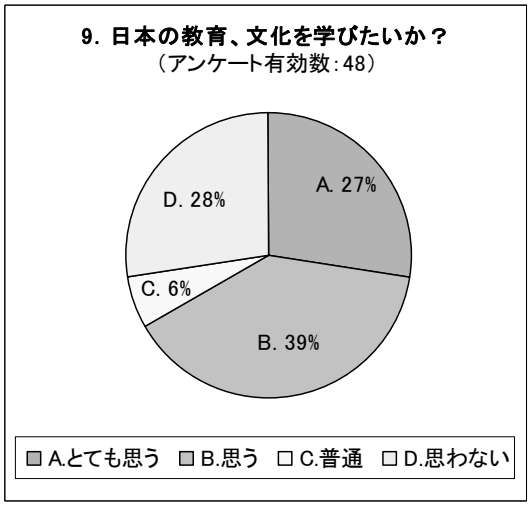
A-25　中国教育部：王鉄輝（良い印象→良い印象）

B-5　グループ長：孫艶（普通→良い印象）

B-16　副グループ長：沈連柱（普通→良い印象）
今回のプログラムに参加する前、日本人との付き合いについて少し心配をしていた。しかし、参加後は本当の日本社会を知ることが出来た。中日両国間の友好は長く続くもので、日本と中国の連携は途切れないものである。

B-25　中国教育部：権学紅（普通→とても良い印象）
日本人は秩序がありや礼儀正しいということが深く印象に残った。

質問９.日本の教育、文化を更に学びたいか



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-1　総団長：張士佐（思う）
可能であれば、個人的にまた日本を訪れ、その他の分野についての理解を深めたいと思う。

A-21　グループ長：閻玲（思う）
機会があれば、日本の人文教育、学校教育交流に対する理解を更に深められると思う。

A-9　副グループ長：谷立福（思う）
全ての国において、他国の良い点は学ぶに値するところがある。中日両国は隣国であり、更に学び合い、交流をする必要があると思う。

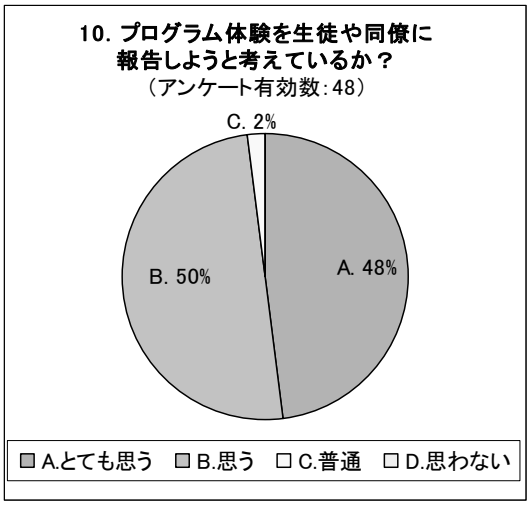
A-25　中国教育部：王鉄輝（思う）

B-5　グループ長：孫艶（思う）
日本の教育と文化の理解をより一層深める。

B-16　副グループ長：沈連柱（とても思う）
学校の教員と生徒たちに日本の教育と文化を直に体験させたいと思う。これはとても有意義なことであると思う。

B-25　中国教育部：権学紅（思う）

質問 10.プログラム体験を生徒や同僚に報告しようと考えているか



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-1　総団長：張士佐（思う）
誠実と信用は、人が必ず守らなければならない最低限の道徳（モラル）であり、謙虚さとは人一人ひとりが発展するための土台である。革新は成功するために必ず通るべき道である。

A-21　グループ長：閻玲（とても思う）
今回の教育交流で見聞きしたこと、教学方法、仕事に対する厳格さ、きめ細やかさ、入念さ、文化交流、環境など、また生活で様々なことを体験し、見聞きしたことを同僚や学生に伝えたい。紹介することによって日本文化を更に理解することが出来る。

A-9　副グループ長：谷立福（思う）
教育に携わる者として、私が体験したこと全てを同僚や生徒に伝えたいと思う。良い点は学び、至らない点は参考とする。

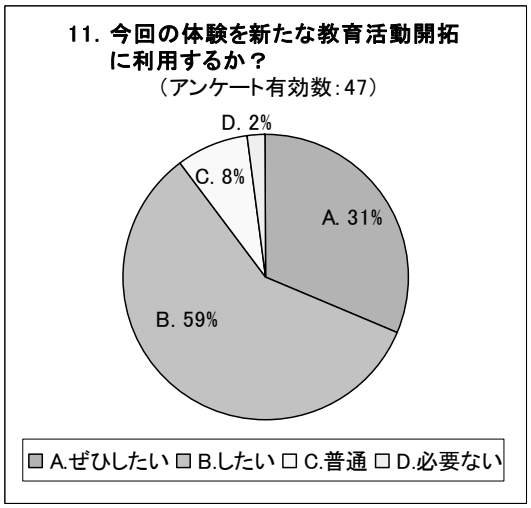
A-25　中国教育部：王鉄輝（思う）

B-5　グループ長：孫艶（思う）
日本で見聞きしたことは友人たちと分かち合える。

B-16　副グループ長：沈連柱（とても思う）
パワーポイントを使って、自分が見聞きした事を先生たちに伝えたいと思う。全校集会（全教員生徒が集まる）の際に、私が知っている日本の文化や教育について話し、多くの人と分かち合いたい。

B-25　中国教育部：権学紅（思う）
学習と体験内容が多様で、全面的に日本の教育と文化を学ぶことが出来た。

質問 11.今回の体験を新たな教育活動開拓に利用するか



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-1　総団長：張士佐（したい）
日々の生活と仕事の中で、それぞれの民族の美徳を継承し、アジアの文化を大いに広めよう。

A-21　グループ長：閻玲（ぜひしたい）
授業参観で学んだ学力別指導、クラブ活動、体験式教育などについて探求したいと思います。

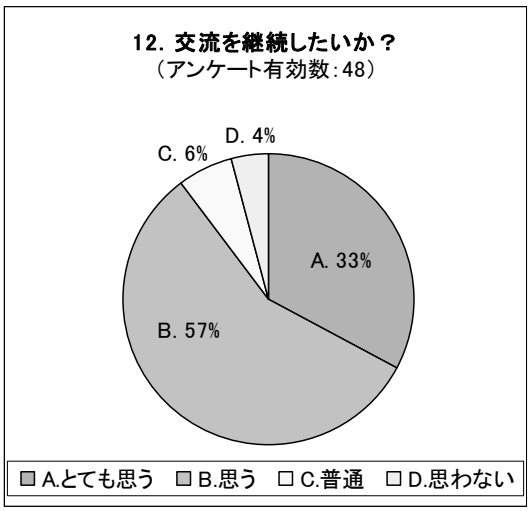
A-9　副グループ長：谷立福（したい）
具体的な計画はまだない。

A-25　中国教育部：王鉄輝（したい）

B-16　副グループ長：沈連柱（ぜひしたい）
例えば、体育や芸術教育は日本の教育を参考にしたい。学生が自分に対して責任を持ち、可能なことは自分でやる、他人に迷惑をかけないなどの意識を。

B-25　中国教育部：権学紅（したい）
日本の教育内容にもいくつか学ぶ点がある。例えば、クラブ活動などの学生の身体資質を育成するなど。

質問 12.交流を継続したいか



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-1　総団長：張士佐（思う）
年齢のことを考えると、サポート的な業務しかできない。

A-21　グループ長：閻玲（思う）
今回の学校訪問で学校での教育交流、授業見学を行いました。これは日本文化や中日教育文化交流に対する理解をより一層深める機会となるでしょう。

A-9　副グループ長：谷立福（思う）
具体的な方法と計画はまだ考えていない。

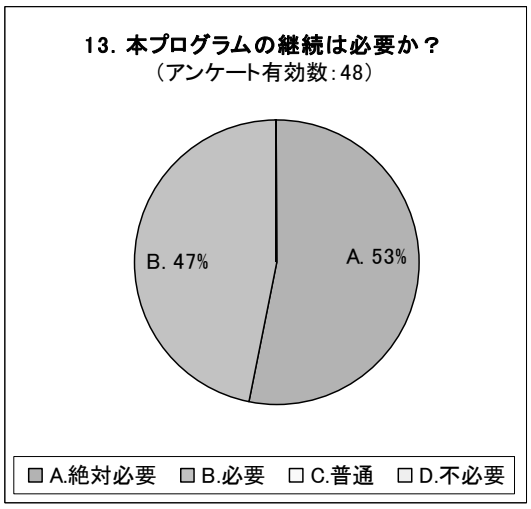
A-25　中国教育部：王鉄輝（思う）
メールなどの様々な手段を通じて連絡方法を構築する。

B-5　グループ長：孫艶（思う）

B-16　副グループ長：沈連柱（思う）
相応しい学校があれば、休暇を利用して相互訪問が可能かと思う。

B-25　中国教育部：権学紅（思う）
今後の日本の教育について、さらに交流と理解を深めたい。

質問 13.本プログラムの継続は必要か



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-1　総団長：張士佐（必要）
必要である。学校教育と文化交流は社会全体の進歩と発展のための血脈であり、文化と教育は民族のためであり、ひいては全世界のためである。

A-21　グループ長：閻玲（絶対必要／必要）
中日文化教育交流を進めるには、中日友好人文交流を進めることが必要だと思う。

A-9　副グループ長：谷立福（必要）
もっと多くの人に中日文化と基礎教育の差異を知ってもらうべきである。
互いを参考にしながら、共に学び合い、互いの長所を学び短所を補い合い、共に高めあう。

A-25　中国教育部：王鉄輝（必要）
両国の基礎教育分野の交流は教員間の相互理解を促進するだけでなく、双方の民間交流を推進させることが出来る。両国関係の発展のため、民族の基礎固めをする。

B-5　グループ長：孫艶（必要）
相互理解を進めるため。

B-16　副グループ長：沈連柱（絶対必要）
より多くの人に本当の日本を知ってもらいたい。

B-25　中国教育部：権学紅（必要）
本プログラムは中日の教育交流を深めた。

質問 14.その他気づいた点

【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-9　副グループ長：谷立福
日本の各学校におけるクラブ活動がうまく機能していること。

A-25　中国教育部：王鉄輝
学校によっては、学校紹介が日本語のみであった。学校の国際化を促進させるのであれば、英語や中国語による資料を提供すべきである。

B-16　副グループ長：沈連柱
①日本の空気はきれい
②衛生的で清潔
③治安が比較的良い
④礼儀正しい

B-25　中国教育部：権学紅
日本の学校施設が比較的完備されている。特に学生の安全面における設備。

A-２　強麗紅
教員同士の交流の時間、学生との座談会を設けてほしい

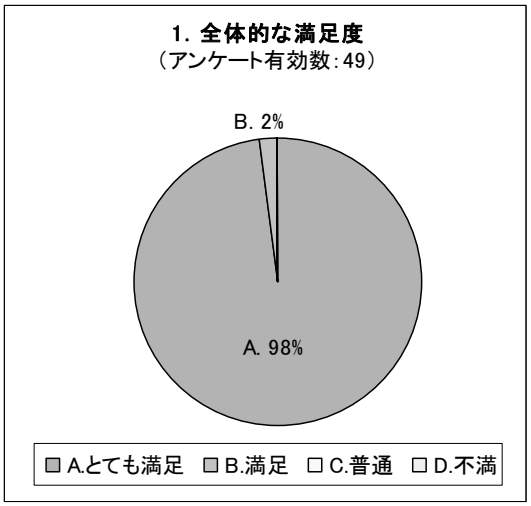
A-1　9　劉皖平
教員同士の交流の時間を充実させてほしい

B-１　劉文軍
時間が許されるのであれば、訪問校を１校に絞って深くかかわりたい。学校との距離を縮め、その学校の教員や生徒の家庭に赴いて、一緒に生活を体験してみたい。

B-12　田秋
日本の企業文化を知りたい。トヨタ、ホンダなど。教育を経済発展のバックグラウンドとして捉えて、教育の発展について見るべきである。今後機会があれば、企業を視察したい。

〔第２班（C,D グループ）総合評価票（12 月）〕

質問１.全体的な満足度



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

C-1　総団長：金剣（とても満足）

C-3　グループ長：楊衡（とても満足）

C-4　副グループ長：宋師亮（満足）
見学内容が盛り沢山だが、日程はタイトだった。

C-2　中国教育部：鄭晗（とても満足）
ACCU スタッフの準備が入念で、プログラムの組み方が妥当であったこと。

D-1　グループ長：劉国慶（とても満足）
手配が行き届いており。理解が深い。サービスに熱意がこもっている

D-2　副グループ長：呉天妹（とても満足）
情報量が豊富。日本の教育、文化、生活を理解するためには多く、学びに値する。

質問２.参加目的は何か

【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

C-1　総団長：金剣
理解と友好を深め、業務内容を改善するため。

C-3　グループ長：楊衡
日本の教育状況を学び、知るため。

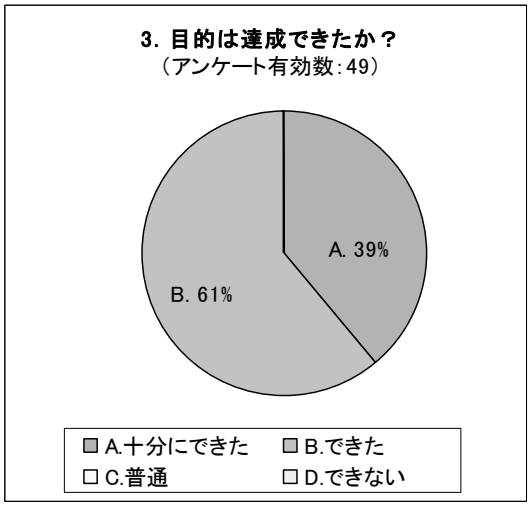
C-4　副グループ長：宋師亮
日本の教育事業の発展状況を知り、有益な経験を学ぶ。そして、日本側に中国の教育状況を紹介するため。

C-2　中国教育部：鄭晗
日本の基礎教育に対する理解を深めること。日本の教育業界に中国に対する理解を進めるため。

D-1　グループ長：劉国慶
日本の基礎教育の状況を知るため

D-2　副グループ長：呉天妹
初歩的に日本の基礎教育を知ることが出来た。

質問３.目的は達成できたか



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

C-1　総団長：金剣（十分にできた）

C-3　グループ長：楊衡（十分にできた）

C-4　副グループ長：宋師亮（出来た）
日本の教育事情を知ることができた。

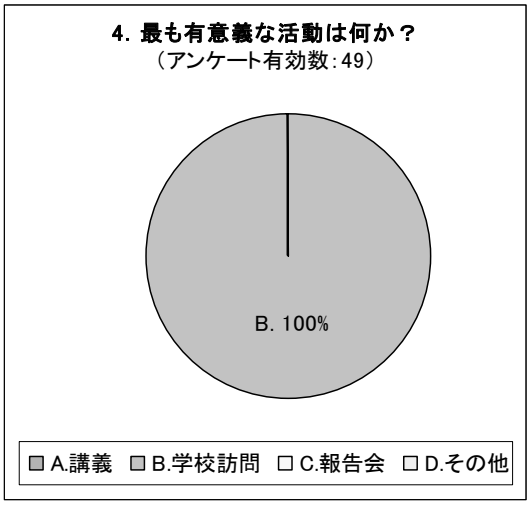
C-2　中国教育部：鄭晗（十分にできた）
日本の基礎教育について、全体的に知ることが出来た。

D-1　グループ長：劉国慶（できた）

D-2　副グループ長：呉天妹（十分にできた）

典型的な学校訪問であり、全体的に学校の徳育、知育、体育の状況を知ることが出来た。

質問４.最も有意義な活動は何か



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

C-1　総団長：金剣（学校訪問）

C-3　グループ長：楊衡（学校訪問）
直接日本の小中学校の状況を見て、知ることが出来た。

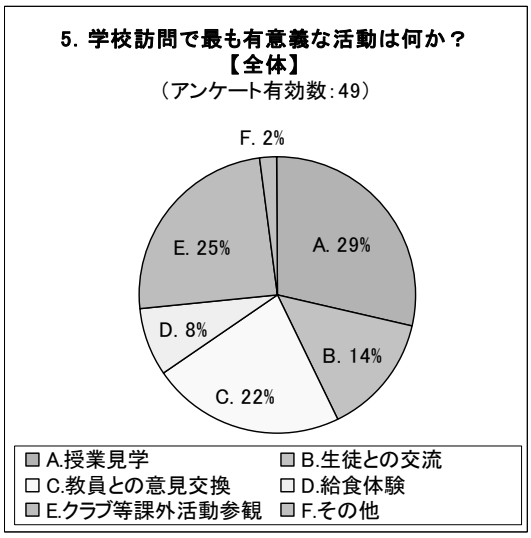
C-4　副グループ長：宋師亮（学校訪問）
直接的で感覚的に知識を得ることが出来た。

C-2　中国教育部：鄭晗（学校訪問）
距離がなく日本の教育制度に接することが出来たことは、感銘深い。

D-1　グループ長：劉国慶（学校訪問）
日本の教育状況を深く知ることが出来た。

D-2　副グループ長：呉天妹（学校訪問）
直に体験し、互いに影響し合った。効果は明らかである。

質問５.学校訪問で最も有意義な活動は何か



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

C-1　総団長：金剣（教員との意見交換）

C-3　グループ長：楊衡（授業見学）
教員と生徒の状況を知ることが出来た。

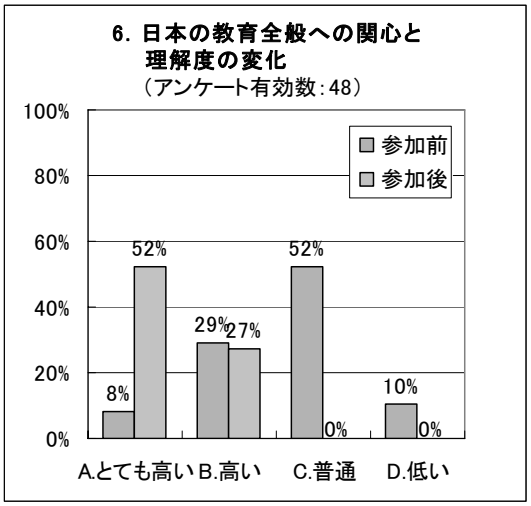
C-4　副グループ長：宋師亮（教員との意見交換）
関心のあった問題について関係者から直接知ることが出来た。

C-2　中国教育部：鄭晗（教員との意見交換）
教員同士で十分な交流を行い、日本の基礎教育の全体的な状況について更に認識を深めることができた。

D-1　グループ長：劉国慶（授業見学）
授業見学をとおして、感覚的に知識を深めた。

D-2　副グループ長：呉天妹（授業見学）
効果的なコミュニケーションが図れた。

質問６.日本の教育全般への関心と理解度の変化



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

C-1　総団長：金剣（高い→高い）
昔、日本の教育について研究をしたことがある。今後は最新の資料から日本の教育政策を知りたい。

C-3　グループ長：楊衡（普通→とても高い）
実際の状況をより知ること出来た。

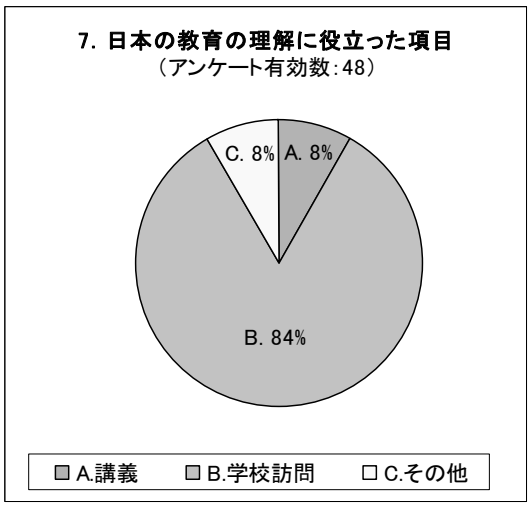
C-4　副グループ長：宋師亮（普通→高い）
参加前は、僅かな関係資料から断片的に知るものだった。参加後は、直接深く知ることが出来た。

C-2　中国教育部：鄭晗（高い→とても高い）
仕事柄、日本の教育状況についてはずっと関心を持っていた。今回の視察を経て、より深くより全体的に知ることが出来た。

D-1　グループ長：劉国慶（低い→高い）
参加前は、日本の基礎教育への理解が少なく、あまり関心がなかった。参加後は、印象が深まり、初歩的な認識をもち、関心も高まった。

D-2　副グループ長：呉天妹（高い→とても高い）
より興味が湧いた。帰国後は日本の教育の歴史について書かれた資料を読んでみたい。

質問７.日本の教育の理解に役立った項目



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

C-1　総団長：金剣（講義）
体系立っており、全体を理解するために役立つ。

C-3　グループ長：楊衡（学校訪問）
日本の学校の実情を知るのに役立った。

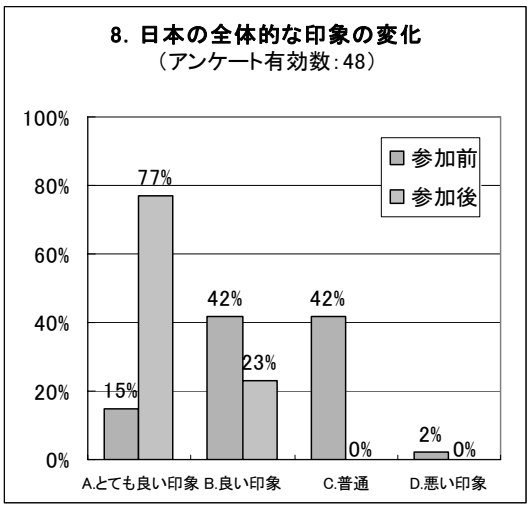
C-4　副グループ長：宋師亮（学校訪問）
直接的且つ全体的に知ることが出来た。

C-2　中国教育部：鄭晗（学校訪問）
これまで間接的に知り得た日本の教育状況に対する認識と照らし合わせると、より直接的に知ることが出来た。

D-1　グループ長：劉国慶（学校訪問）
学校は日本の教育の真実を現している。

D-2　副グループ長：呉天妹（その他）
より深いレベルで、内容を特化し、選ばれた代表が教育を専門とした交流を行えるプログラムを期待している。

質問８.日本の全体的な印象の変化



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

C-1　総団長：金剣（とても良い印象→とても良い印象）

C-3　グループ長：楊衡（普通→とても良い印象）
日本人は熱心で友好的。資質も高い。

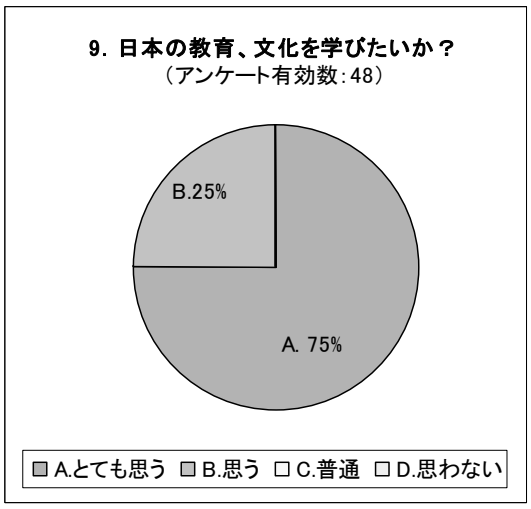
C-4　副グループ長：宋師亮（普通→良い印象）
参加前は、僅かな関係資料から断片的に知るものだった。参加後は、日本と近い距離で触れ合い、国民の資質の高さに深い印象を受けた。

C-2　中国教育部：鄭晗（良い印象→良い印象）

D-1　グループ長：劉国慶（普通→良い印象）
参加前は、あまり触れることがなかった。参加後の印象はとても良い。

D-2　副グループ長：呉天妹（良い印象→とても良い印象）
礼儀があり、仕事熱心。

質問９.日本の教育、文化を更に学びたいか



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

C-1　総団長：金剣（とても思う）

C-3　グループ長：楊衡（とても思う）

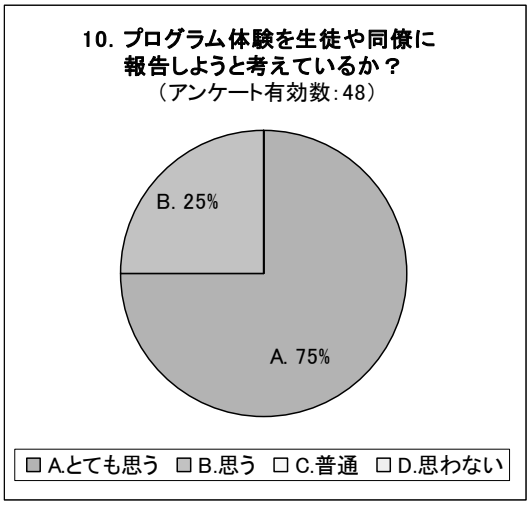
C-4　副グループ長：宋師亮（思う）

C-2　中国教育部：鄭晗（とても思う）
日本は多くのことを経験し、先を進んだ理念を持ち合わせている。中日文化は似通っており、日本の先を進んだ理念は中国に導入するのに相応しい。

D-1　グループ長：劉国慶（思う）

D-2　副グループ長：呉天妹（とても思う）

質問 10.プログラム体験を生徒や同僚に報告しようと考えているか



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

C-1　総団長：金剣（とても思う）
C-3　グループ長：楊衡（とても思う）
国力と理念を高めるため。

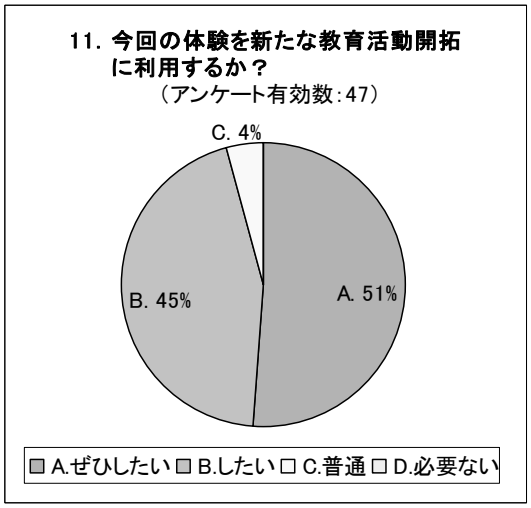
C-4　副グループ長：宋師亮（思う）
理解を進め、互いの長所を学び、己の足りないところを補うため。

C-2　中国教育部：鄭晗（とても思う）
中国は日本に対しての理解がまだ不足している。

D-1　グループ長：劉国慶（思う）

D-2　副グループ長：呉天妹（とても思う）
訪日前と認識が異なる。生徒や同僚たちと分かち合いたい。

質問 11.今回の体験を新たな教育活動開拓に利用するか



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

C-1　総団長：金剣（ぜひしたい）

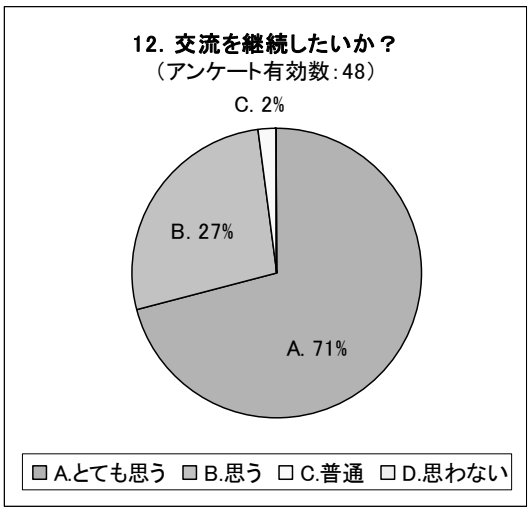
C-3　グループ長：楊衡（ぜひしたい）

C-4　副グループ長：宋師亮（したい）
日本の小中学校の課外活動は学びに値する。

D-1　グループ長：劉国慶（したい））

D-2　副グループ長：呉天妹（したい）
今後の政策策定の過程において、日本の教育の有益な方法を参考にしたい。

質問 12.交流を継続したいか



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

C-1　総団長：金剣（とても思う）

C-3　グループ長：楊衡（とても思う）
今回と同じような交流形式で。

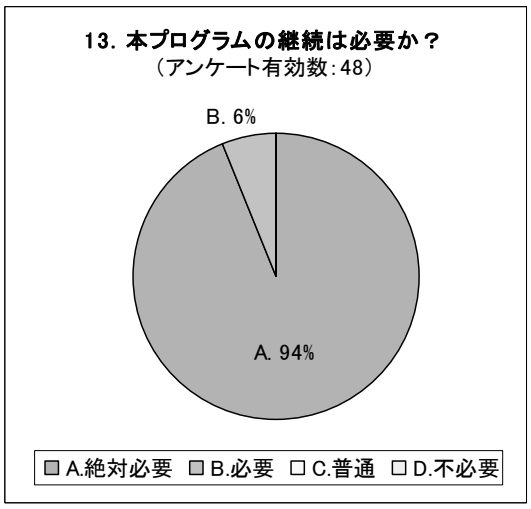
C-4　副グループ長：宋師亮（思う）
学校間交流を進めたい。

C-2　中国教育部：鄭晗（とても思う）
今回訪問した学校の教職員の皆さんを、中国訪問に招待したい。

D-1　グループ長：劉国慶（思う）

D-2　副グループ長：呉天妹（とても思う）
訪日の機会を掴んで視察を行い、学びたい。

質問 13.本プログラムの継続は必要か



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

C-1　総団長：金剣（絶対必要）

C-3　グループ長：楊衡（絶対必要）
理解と友好を進めるのに有益である。

C-4　副グループ長：宋師亮（絶対必要）
両国の教育事業の発展を促進するのに役立つ。理解を進め、両国が平和的に発展するのを促進させる。

C-2　中国教育部：鄭晗（絶対必要）
中日両国の教育業界の相互理解に大きな促進効果があり、中日友好の未来への力を強化し、育むのに役立つであろう。

D-1　グループ長：劉国慶（必要）
交流の継続は、中日友好の長く続くためとなる。

D-2　副グループ長：呉天妹（絶対必要）
現場同士の交流は、表面的な実施を変えるのに有益である。

質問 14.その他気づいた点

【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

C-3　グループ長：楊衡
日本人の資質は素晴らしい。日本社会は秩序があり、日本人は友好的である。環境はとても整っており、日本の教育は中国が学ぶに値

する。

C-4　副グループ長：宋師亮
国民の資質が高く、学生は秩序を守り、逞しい。日本の生徒の英語レベルは普通。生徒と給食交流を行う際に、中国語や英語の基礎がある学生を中に入れてもらえると、双方の交流を進めるのに役立つと思う。

C-2　中国教育部：鄭晗
情報交換会の時間をもう少し延ばしてもよいと思う。

D-2　副グループ長：呉天妹（とても満足）
ホテルで出会った日本の学生や住民の方々は友好的で礼儀正しい。

C-16　高光輝
日本への理解を高めるために、日本文化講座などの講座を設けて欲しい。

C-17　張躍武
日本の教員に学生を連れて中国に一ヶ月以上滞在してもらい、中国の学生に日本の学生の物事の接し方やマナーを見せたい。

C-18　彭肖黎
日本の中学校の先生方に、是非とも我が浙江大学附属中学校を訪問していただきたい。

C-23　岑启学
日程が少しタイトだった。特に昼食後に休憩時間がなかった。出来れば一日１校に時間を割いて欲しい。

D-13　襲順斌
視察の機会を増やすためにも、ACCU にはこのプログラムの訪日回数と人数の増加をお願いしたい。

D-15　楊薇
あるプログラムを特化して、仔細により深く紹介してもよいかもしれない。

◆2. 主な訪問受入れ学校および機関

Ａグループ

●市川中学校・高等学校
副校長　　及川　秀二

プログラムの全体的な印象

- 今回も有意義な経験をさせていただきました。特に中国の先生方による授業は、興味深い内容で生徒達にも強い印象を残しました。ただし、内容によっては生徒があまり興味を示さないものもあるようですので、事前に打合せをさせていただければと思います。
  また、シンポジウムでの中国の教育事情のお話しも興味深く聞かせていただきました。

プログラム成果

- 生徒達が海外に目を向ける大きなきっかけとなりました。今回の交流は同じアジア圏の中国の先生方でしたので、より身近に感じたと思います。また中国語が堪能な生徒の活躍の場を設ける事ができたことも大きな収穫でした。（本校では「学園 Ambassador」として、海外からの来訪者に対しその国にゆかりがある生徒の活躍の場を設けています）

苦労した点

- 他の校内行事と重なってしまい人員配置に多少苦慮しましたが、ACCU ご担当者との事前連絡が密に取れましたので大過なく運営する事ができました。ただし、次の機会には「授業参観の時間を増やす」「生徒との会食」「中国語を話せる生徒との交流の時間を増やす」等の工夫をしたいと思います。

加えるとよいと思われる活動

- 折角の機会なので、学校視察以外にシンポジウムなどの研究交流の機会を設けては如何でしょうか。社会状況や教育環境が近しいアジア各国の状況を理解することは自国にとっても学ぶべき事柄は多いと思います。

プログラムの改善に向けた助言

- 大きな問題点はありません。
  他の行事との兼ね合いがありますので、視察要請はもう少し早い時期にいただけると助かります。

●自由学園
男子部副部長　　更科　幸一

プログラムの全体的な印象

- 中国の先生方はとても意欲的で、学ぼうとする姿勢でした。お互いの学校交流をしたいと思いましたが、うまく調整できずにいたのが残念です。
  今後、そのような機会があれば行いたいと思います。

プログラム成果

- 先生と生徒との交流授業により生徒の中国への意識が変化したこと。
  以前は報道に左右されており「中国なんて自分勝手」というような意識の人が多かった。
  今回の交流を通じて、一人ひとりの方たちはとてもよい人たちだと口々に感想を述べていた。

苦労した点

- ACCU の方と丁寧に打ち合わせが出来たので、大変運営しやすかったです。

加えるとよいと思われる活動

- 関係する学校などから先生を募り、あるテーマについて教育を深める議論を行う。
  例　「学習指導要領とのジレンマ」や「生徒指導の方法」「教員のあり方」など

●都立東大和南高等学校
校長　　小倉　良之

プログラムの全体的な印象

- 教職員との質疑応答でお国柄、文化の違いが分かり、大変興味深かった。授業参観や放課後のクラブ見学でも非常に熱心な質問攻めに会ったことが印象的である。また、特別なプログラムを準備することができず、申し訳ないと思っていたところ、思いがけず授業参観が好評だったと聞いて安心した。

プログラム成果

- 政治レベル以外の交流があることはそれだけで日中友好の成果があると考えている。

加えるとよいと思われる活動

- 中国教員による生徒向けの特別授業。鑑真や阿倍仲麻呂、空海（遣唐使）などが学校教科としての中国史においてどの程度の扱いなのか分からないが、「対岸」から見たこれらの人物が語られるならば、高校生にとって（我々教職員にとっても）感動的な出来事ではないだろうか。

プログラムの改善に向けた助言

- 政治レベルがどうあろうと、継続することが何よりも大事。

●筑波大学附属駒場中・高等学校
中学校副校長　　大野　新

プログラムの全体的な印象

- 短い時間だったが、予定したプログラムを順調に消化することができた。
- 中国からの参観者が熱心に授業を観察していた点に感心した。

プログラム成果

- 中国各地から集ってこられた先生方に、日本の教育の一端を紹介することができた。
- 本校の授業の実態が、中国の先生方にも伝わり理解を得られたと思われる。

加えるとよいと思われる活動

（本校での交流に限定して）
- かつて実施したこともある、本校生徒との交流。
- 教科別の教員交流、授業者との交流

プログラムの改善に向けた助言

- 何年にもわたって実施しているプログラムなので、とくに問題はなかった。
- 質疑応答に対応できるこちらの教員が多ければ、グループ別での質疑応答もできたかもしれない。また、質疑応答の時間をもう少し長くとれればよかった。（通訳の人数にもよるが）

●東京都立杉並総合高等学校
主幹教諭　　田中　幸徳

プログラムの全体的な印象

- 時間がもう少しあれば良かったと思います。教職員同士の交流時間にとても熱心に質問がされていたこともあり、また本校の教育内容に質問がされていたことからも残念でした。

プログラム成果

- 中国の教育事情の一端を知ることができたが、時節がらというか今日の政治状況が微妙な状況である中で、市民レベルや教員レベル、学校レベルではできるだけの交流をして行きたいという思いがある。

苦労した点

- 本校の場所が住宅街にあり、バスが直接校内に入ってくることができません。そのため今回も徒歩 10 分位のところに停めていただき徒歩で来校していただきました。

- 停留場所も首都高速と重なっており分りにくいため当日混乱しました。

加えるとよいと思われる活動

- 可能であれば教科ごとの教員交流ができると良かったと思う。
- クラブの見学や弓道の弓を引いてみたりしていたが、時間が遅くなってしまい照明装置のない本校では暗い中での移動で、また時期的にも寒くなってきた時期でもあり、もう少し暖かい時期のほうが良いかとも思います。

プログラムの改善に向けた助言

- 来校された教員団の方もおっしゃっていましたが、教員間交流（今回は生徒間交流はできませんでしたが）の時間を多く取ることが良いかと思います。

Ｂグループ
●荒川区立原中学校
副校長　　勝田　敏行

プログラムの全体的な印象

- 歓迎レセプションに参加し、中国の教員と交流でき両国の教育について話すことができ、翌日の受け入れがスムーズに親近感を持って行うことができた。
- 授業を行っていただいた先生方に感謝です。パソコンの不具合が起き、ドキドキしましたが急きょインタビューにお答えいただき生徒も大変楽しい時間を持つことができました。良い経験になりました。
- 給食交流では生徒たちが名前の札を掲げて控室に呼びに行く方法をとりましたが、先生方が笑顔で生徒たちを迎え、教室に向かう姿がとても印象に残っています。
- 和を味わっていただこうと教員交流を和室で行いましたが、中国では床にじかに座る習慣がないらしく大変痛い思いをさせてしまい申し訳なかったと思っております。
- バスの到着まで一緒にバレーボールをしていただきました。けがが心配でしたが、無事に終えることができました。バレー部の生徒には良い思い出になりました。

プログラム成果

- 本校は生徒たちのグローバルな視点を育て、国際社会で活躍できる人材に成長させるために、国際交流を経営方針に掲げています。そのため、このような交流事業を積極的に取り入れています。生徒たちには異文化に触れ、わずかな時間の交流ではありますが外国の方に積極的に話しかけ、笑顔で接している姿に確実に国際感覚を身につけていると感じます。
- 最近の両国の報道等で様々な個人的な考えをお互いにもっている教員もいたとは思いますが、教員交流ではそうした議論もなく、両国の教育課題を共有したり、新たな発見をしたり、民間交流のあるべき姿で学びあうことができたと思います。

苦労した点

- 前々年度に韓国の先生方をお迎えしていたので同様の時程、方法で行ったので特に苦労したことはなかったが、先生方のお持ちになった USB がウィルスに感染しており、使用できず残念でした。

プログラムの改善に向けた助言

- すばらしい貴重な機会を作っていただきありがとうございました。いろいろ大変なこともあると思いますが、ぜひ続けてください。また、お声をかけていただければ幸いです。

●江東区立第二南砂中学校
副校長　　八木　秀明

プログラムの全体的な印象

- とても友好的にそして熱心に見学されていたことが印象的でした。
  学校の特色や清掃活動や部活動等について次のような質疑が熱心に行われました。
  ①どちらの活動も整然と行われていることに驚いた。
  ②トイレ清掃は生徒が行っていたが割り振っているのか。
  ③ほとんどの部活動も生徒が自主的に行っている。
  ④避難訓練に生徒は静かに従うのか。
  ⑤給食献立のカロリーは。好き嫌いは言わないのか。

プログラム成果

- 生徒・職員が交流事業により中国を身近なものとすることができた。
  ①お客様をお迎えする方法を学ぶことができた。
  ②改めて、本校の良さや課題（教職員の関わり）がみえた。

苦労した点

- 本校に、中国語を話せる生徒がいたので進行役にすることができた。
  しかし、進行に時間がかかってしまった。
- 本校の概要について説明したが、事前に中国北京の教育事情が理解できていないため日本と中国の違いについて説明側が理解不足であった。説明しきれない部分があった。
  特に説明が難しかったところは、①養護教諭の役割やスクールカウンセラーの対応、②給食事情や・避難訓練・防災教育などの状況、であった。

加えるとよいと思われる活動

- 日中の教職員同士のディスカッションの場
- 日本の伝統文化体験（ふろしきワークショップなど）

プログラムの改善に向けた助言

- 放課後活動の視察なので遅くなってしまいましたが、半日 4 時間程度が妥当と思います。

●横浜国大附属鎌倉小学校
副校長　　桐生　晃次

プログラムの全体的な印象

- 中国教職員の方々は、全体的に日本の教育への関心が高く、本校の教育方針や教育内容などについて積極的に質問をしてくれた。特に、印象に残った質問として、「附属鎌倉小学校の入学試験倍率が例年 3～4 倍と言うが、受験者は鎌倉小のどのような点に関心をもっていると思うか？」というものがあった。本校のよさや特色を改めて考えさせられる質問であった。

プログラム成果

- 本校は、校舎の改修工事中ではあったが、日本の小学生の授業を参観していただいたことで、現在の日本の教育事情の一端を垣間見ることができたのではないか。

苦労した点

- 中国教職員の方々にたくさんのお土産をいただいたにもかかわらず、それに見合うお土産をお返しすることができなくて大変申し訳なく思いました。

加えるとよいと思われる活動

- 小学校としては、(時間があれば）日本と中国の教員レベルでの協議会がもてればよかったと思いました。

●横浜国立大学教育人間科学部
附属鎌倉中学校
副校長　　青木　弘

プログラムの全体的な印象

- 国家間では緊張が高まっているので、多少の不安感をもって当日を迎えました。しかし、本校の教育・研究に対する質問が核心を突くもので、よりよい教育を目指すという共通の方向性を実感しました。どの先生も親しみがあり、同じ教職に就く者として、言葉の隔たりを超えて、とても和やかな時間を過ごすことができました。

プログラム成果

- 本校の中国からの帰国生徒が、中国語で質疑応答する時間ができ、生徒本人も保護者も大変喜んでいました。また、中国の先生方の教育に対する熱い想いと、ほとんどの先生方が、中国語のほかに英語も流暢に話されることに刺激を受けました。この刺激を、本校の教職員にも伝えました。

苦労した点

- 日程がある程度決まっているため、学校行事等との調整で苦労しました。本来でしたら、より多くの生徒や教員との交流の時間や、本校の研究の特色を生かした授業参観の時間を設定すべきところでしたが、期末テスト前日ということもあり、貴重な機会を充実させることができなかったのではと反省しております。

加えるとよいと思われる活動

- 学校を取り巻く地域の様子も知っていただけると、より具体的に学校のことを知っていただけるのかなと思います。時間的に厳しいとは思いますが、少しの時間でも、学校周辺を御案内する時間があってもよいのではないでしょうか。

プログラムの改善に向けた助言

- ACCU 担当者の学校への御配慮や、通訳の方々の意を汲み取った言葉のお陰で、私自身は、たいへん有意義な交流の時間になりました。生徒・保護者・教職員にも伝えようと思います。
- 中国の先生方からいただいたお土産を「国際理解教室」に展示しました。

●恵泉女学園中学・高等学校
副校長　　本山　早苗

プログラムの全体的な印象

- 一日の滞在ということで、充実したプログラムになるか心配しておりましたが、満足してお帰りいただけたようで、安堵いたしました。事前に他の訪問校を伺っていたので、本校は私学の特徴を中心にご説明できたので、良かったと思います。私学の経営について興味をもたれているようでした。
- 中国は地域によって言葉も随分違うことや、早朝から夜遅くまでの学校での活動の中で、昼寝の制度があることなど、興味深いことも伺えました。

プログラム成果

- 訪日された先生方と生徒達との授業での交流を通して、友好的なやり取りが生れており、好ましいと思いました。教育を通して日中の友好的な関係が推し進められるよう、希望しています。

苦労した点

- 前回韓国からの訪問団をお受け入れした経験と、私が訪韓させていただいた経験から、今回のお受け入れについて、参考になることが多く、準備もスムーズにできました。
- 生徒の顔写真など、写真撮影の際、ネットに掲載しないようご協力をお願いしました。

C グループ

●東京学芸大学附属国際中等教育学校
教諭　　手塚　史子

プログラムの全体的な印象

- 授業参観の際に、授業の空き席（最前列や生徒の前）席にご着席になった方が多数いらっしゃったことが印象的だった。このような参観スタイルは私や生徒としても初めての経験だったので、積極的な学習の姿勢など文化背景が垣間見えてよい経験となった。
  ただ、大人の方が前列に思わず座ったために黒板が見えなくなってしまった生徒もおり、授業参観では、できれば後方の席にご着席いただけたらと思います。

プログラム成果

- 本校には、中国籍の生徒、中国に滞在していたことのある生徒、また中学からの留学生もおり、彼らにとって「中国語」という言語を用いて交流がもてたことは大変ありがたい機会であった。また、普段は英語圏の訪問者と交流をもつことの多い生徒だが、今回は「英語が得意な生徒」以外に活躍の場があたえられたことが生徒にとって新鮮な機会となったようだ。

苦労した点

- 訪問時期が、期末テストの前日だったため、目的にあった授業を公開するのが難しかった。本校は定期試験が年に 3 回しかないため、直前はレポートやプレゼン課題、演習に授業をさくことも多いです。6 月末、11 月末、2 月末を避けた時期にお受入れができれば幸いである。

●筑波大学附属桐が丘特別支援学校
副校長　　西垣　昌欣

プログラムの全体的な印象

- 当校に対する質問というより、我が国の特別支援教育の状況に対する質問が多かったと思います。幸い当校校長は、同分野の専門家としてオールマイティーな方なので、対応してもらえて助かりました。

プログラム成果

- 当校を多くの中国教職員の方々にご紹介することができた点です。

プログラムの改善に向けた助言

- 特にありません。通訳の方が丁寧に対応して下さっているようだったので、何も困りませんでした。

●聖徳学園中学・高等学校
高校教師　　小林　昭文

プログラムの全体的な印象

- 今回は、これまで行っていた式典、授業見学とは形式を変え、本校の生徒や教員ができるだけ直接、中国の先生方に触れ合う機会を多く持つようにしました。
  - 中国語のできる生徒が中国語で学校案内英語の授業で、訪問団に直接現在の中国の英語学習状況を教えて頂いた
  - 本校生徒と中国教職員が、通訳を介さず直接フリーディスカッションを行った

  やってみたところ、積極的な交流が双方の距離を縮め、浸透度合いの強いものになったと感じました。特に、生徒とのフリーディスカッションは、子どもたちの側に立って貰ってお話し頂けたことがよかったと思います。生徒とお話し頂いている際の中国の先生の表情が生き生きとされていたのが印象的

でした。

プログラム成果

- 中国の先生方と、本校の生徒と教職員が交流し、中国の文化を直接に見聞きしたりできたことが良かったです。また、これまでの教職員訪問団受入の経験が今回生かせたように思います。特に今年は、秋・冬と 2 回の受入れがあったので、秋での気付きが冬の受入れの際に生かせました。

苦労した点

- 受入れを運営する側では、回数を重ねる毎に経験を重ね、年々やり易くなっています。
  校内でも、このような交流をする際のチームを作って行動できるようになりました。
- 中国への派遣プログラムで参加した教員の経験も生かし、今回は通訳を介さずに生徒と中国の先生とのフリーディスカッションを行いました。やる前は、本校での実施は難しいのではないかと思いましたが、実際にやってみたら、その心配も不要でした。
- 中国語や英語や身振り手振りを使ったフリーディスカッションは、日本にいながらにして海外の文化に触れる良い機会となりました。生徒にとっても学習交流の場となり、良かったです。

加えるとよいと思われる活動

- 中国の先生方に授業をお願いできたらと思います。

プログラムの改善に向けた助言

- 事前打合せでACCUとコミュニケーションしながら準備ができてよかったと思いました。
- 今後も子どもたちの元気にやっている姿を見て頂きたいと思います。大掛かりな式典などはできませんが、できることを模索して、やれるやり方で手づくり感のある受入れでお迎えをしていきたいと思います。

●興本扇学園　足立区立扇中学校
**　　足立区立興本小学校**
副校長　　宮原　賢二

プログラムの全体的な印象

- 中国の教職員は大変熱心に質問していた。予算のことや、少子化問題と教員の人数の関係、受験対策や成績なども聞かれた。

プログラム成果

- 中国の教職員と児童･生徒や教職員が交流できた。中国について児童･生徒が興味や関心をもった。

苦労した点

- 言葉の壁があるので、中国の教職員とのコミュニケーションは通訳なしでは意思の疎通が困難だった。
- 名簿や授業の内容、資料等をいただくのが遅くなり、準備が難しかった。

加えるとよいと思われる活動

- 中国の遊びや生活の紹介などの文化交流を児童･生徒のために入れていただきたい。貴重な機会なので児童･生徒が異文化体験をできるとありがたい。

プログラムの改善に向けた助言

- 日中教員の交流は、午前中ではほとんどの教員は授業があって難しい。一部の教員に限られる。
- 訪問が午後であれば、午後の会議枠を交流のために使うことが出来る。
- 質問事項は事前にいただけると答えの準備ができるのでありがたい。

●大田区立大森第六中学校
主幹教諭　　柴崎　裕子

プログラムの全体的な印象

- 政局的に心配な面もあったのですが、団長さんの言葉を初め、とても友好的な交流をすることができ、まずは安心したというのが、率直な感想です。生徒も有意義な時間だったと感じたようです。領土問題について生徒がクラスで触れたときも、両国の立場でそれぞれ歩み寄っていくことが大切であるとの返答に感心しました。
- 以下、生徒からの意見です。
  ・答えづらい質問をしっかり答えてくれてありがたかった。日本と中国はもっと絆を深めていけると思った。(三年)
  ・もう少し、授業をしてほしかった。中国のことについて、中国の人の意見を直に聞くことができ、中国のニュースに関心を持つようになった。(三年)
  ・中国と日本で漢字は同じだけど、意味が違うのが不思議だった。(二年)
  ・歓迎するということがどういうことかはわからなかったが、武術はおもしろかったです。(一年)

プログラム成果

- 生徒が異文化に触れ、実際に話をしてみないと分からない面が、今回直に話をすることでとても身近に感じ、言葉は通じなくても好印象だったようです。宗教・歴史・文化･言語の違いに触れることは、教科書では学べないことを学ぶことができました。

苦労した点

- ギリギリまで、授業内容が分からなかったこと、交流会をどのようにどのくらいの規模で行えばよいのかなど、初めてのことで、多くの戸惑いがありました。最後は一か八かの所があり、バタバタしました。

加えるとよいと思われる活動

- 授業の時間が足りなくなり、もっと多くの話を聞くことができればよかったと思います。

プログラムの改善に向けた助言

- お疲れ様でした。大変なご苦労があったと思います。できる限り、今後も協力させていただきます。

Ｄグループ
●荒川区立尾久宮前小学校
校長　　伊藤　英夫

プログラムの全体的な印象

- とてもいい交流会ができた。訪問された先生方は、日本の学校について興味津々で一生懸命聞いて見ていた。学ぼうとする姿勢が素敵だった。
- 子供たちに授業をしてくれたことがよかった。中国の紹介・音楽・切り絵・習字と、どれも子供たちにとっては貴重な経験になった。
- 給食を召し上がっていただき、日本の文化をご理解いただけたかと思う。「おいしい」と言っていただき嬉しくなった。

プログラム成果

- 時期が時期だけに不安がないわけはなかった。しかし教職員の交流は政治を越えて、同じ子供を育てる仕事をしている者同士といった感覚が伝わってきた。交流を通して「子供をどう育てるのか」といった視点で思考していることは、互いに共通していた。
- 小学校の後、中学校も参観していただいた。日本の小中学校をご覧いただけてよかった。
- 下町の尾久地区を歩いていただいた。都電を見たり八幡神社を見たりして楽しんでいただけた。途中「リンゴが安い」と大喜びで商店街で買い物をする

数名の先生方に親近感がわいた。

苦労した点

- 特段苦労したことはない。むしろ楽しい時間をいただけて感謝している。
- あえて難しかった点をあげるなら、授業をしていただく予定の 6 名の先生方から事前に情報がほしかった。「どんな授業をするのか」「授業をするにあたって用意しておいてほしい物等」を予め教えてもらえると慌てなかった。

加えるとよいと思われる活動

- 事前事後の交流があるともっと多面的・継続的に交流ができる。特に子供同士の交流ができたら素晴らしいと思う。

プログラムの改善に向けた助言

- 訳が上手であった。できたらもう少し通訳の数が多ければ子供たちとの交流が充実していたと思う。本校からは５名の通訳の方を依頼し、全校児童が同時に中国の先生方からお話が聞けた。通訳の数で交流の質も異なると思う。

●荒川区立尾久八幡中学校
副校長　　近江　貞之

プログラムの全体的な印象

- ここ数年間、中国とは政治的には難しい現状にある中、たいへん友好的に施設見学・意見交換ができてよかった。この日本の友好的で丁寧な対応、教育の現状等を、教員の立場で正しく中国の皆さんに伝えてほしい。
- 日本の姿勢を伝えることのできる立場でいる方ばかりと思うので、ぜひとも学校の中で正しい情報を伝えてほしい。時間はかかるかとは思うが、中国の小中学生が日本の現状、中国に対する姿勢を知ることで、両国の関係が今後改善されると思う。
  今回、日本にお見えになった皆さんに望みたい。

プログラム成果

- 本校においては、意見交換を行ったが、質疑応答で終始してしまい、意見交換を行うまでには至らなかった。日本の現状を伝えられたことが成果である。

苦労した点

- ACCU の担当者が、丁寧に連絡や打ち合わせをしてくださったので、特に苦労したこと・困ったことはなかった。

加えるとよいと思われる活動

- 視察中心でよいので、日本の現状を少しでも多くの方にお知らせし、教員の立場で広く伝えてほしいと、強く要望して頂きたい。

プログラムの改善に向けた助言

- 人材の交流、日本の正しい理解等は今後の日本にとっては、これからも欠かせない重要な施策である。今後とも継続してほしい。

●私立星美学園小学校
校長　　森内　直子
主幹教諭　　馬場　美枝子
教諭　　飛鳥　直子

プログラムの全体的な印象

- 懇談会の時に、学校の感想を聞く際、喜んでくださっていたり、感動されていたりする様子が伺えたので良かった。
- 一日いていただいたので、子ども達と触れ合う時間をたくさん持つことができ、お互いに充実した日を過ごせたと思う。

プログラム成果

- 在校児童に、中国人や在住経験がある児童が数名いたため、歓迎会や質疑応答で、中国語や現地情報を交えての交

流ができたので、充実したものとなった。
- 6 年生が昼食を一緒に摂っていただいたので、事前に少し中国語の勉強ができたり、積極的にコミュニケーションを取ろうとしたり、子ども達にとっても大変良い機会となった。

苦労した点

- ACCU の担当の方が、事前に詳細まで打ち合わせをしてくださり、こちらの質問にも丁寧に答えてくださったので助かりました。

加えるとよいと思われる活動

- 本校では、歓迎会、授業参観（2 時間）、劇鑑賞（3 年生による環境問題に関する劇）、昼食会（6 年生と一緒に）、一斉清掃見学（縦割り一斉清掃）、歓談会（教員同士）、お見送りなど、一日の流れを考慮し行程を組んだので、充実していたと思われる。中国と日本の国旗を全校分用意して、歓迎会とお見送りの際に使用したことも喜ばれました。

プログラムの改善に向けた助言

- このような交流は、先生方だけでなく子ども達にも、国際交流、異文化理解等の面で、大変良い機会となると思われる。グローバル社会に対応できる人材育成にも役立つので、今後も継続されることを希望します。
- 問題点もあるかと思われますが、来日される先生方と一緒に子ども達も訪問されるといいと思います。

●東京学芸大学附属大泉小学校
副校長　　細井　宏一

プログラムの全体的な印象

- このような教員レベルでの人と人との交流は、とても重要と思いますので、今後も継続を期待いたします。
- 本校では、特別に何かを披露するとかいったようなお出迎えをするような形ではなく、普段の子どもたちの学びの様子・学校の様子を見ていただくようにいたしましたが、むしろ、その自然体のところがよかったといったコメントもいただいたので、素直に嬉しいようにも思っていますが、どうとらえたらいいのだろうと複雑な気持ちもいたしました。たくさんのお土産品もいただき、恐縮しております。

プログラム成果

- 中国の方と接点ができましたことは、成果です。
- 今、日本の中では、中国に対するよくないイメージも小さくはないと思いますが、いらっしゃった先生方の中で、私が接することができた方はみなさんとてもよいかたで、当たり前ですが、よい人と接するとその国のイメージもよくなります。
  そのような感覚は、本校の子どもたちも、何人かはもつことができたと思いますので、それは成果です。
- そして、中国の方も、日本に対してよい印象をもって祖国にかえり、それを中国の子どもたちに広めることが　できれば更に大きな成果であると考えます。

苦労した点

- 本校教員や子どもたちとじっくり話したり交流する時間を作ることができれば、よりよいと思うのですが、訪問される時間がどうしても授業のある時間ですので、そこまでできませんでした。
- 中国の先生方からたくさんのお土産をいただき、たいへん光栄に思います。本校からのプレゼント品が十分でなかったのではないかと、逆に気になりました。他校はどうしているのでしょうか。

加えるとよいと思われる活動

- 短時間では難しいと思いますが、同じ

学校に複数回訪問して、中国の方と、日本の教員とで共同で授業をするとか、中国の方に授業をしてもらうようなプログラムができたら、より面白いのではないかと思います。

- あるいは、日本の学校で教員が授業力向上のために取り組んでいる研究授業とその後の協議会に参加してもらい、日本の授業研究の在り方について体験的に学んでもらうようなプログラムもできたらよいと思います。これも短時間の訪問では難しいかもしれませんが…。

プログラムの改善に向けた助言

- 自分もACCUのお力添えで、中国の学校を訪問したときに思ったことですが、何のためにこのような交流をするのか、目的がどこにあるかです。
  自分もそのことを考えながらプログラムに参加していましたが、最終的には、2つと考えました。一つは中国の教育内容について学ぶということ、そしてもう一つが、こちらの方が重要なのではないかと思っていますが、中国のすばらしさを、教えている子どもたちに伝えていくことであるということです。
  中国の方はどのような意識でこのプログラムに参加しているのか、そのようなことを啓蒙するような機会があるのかについても、知りたい気もします。
- 学校内を参観するとき、通訳の方がマイクで話して、全員の方が聞けるようにしていたのは、とてもよいと思いました。
- 資料を中国語に翻訳していただいたのも、よいと思いました。

●江東区立八名川小学校
校長　　手島　利夫

プログラムの全体的な印象

- 「貴校を訪問できて、とても勉強になりました。私たちもESDに取り組んでいきます。」とおっしゃっていただいたことです。

プログラム成果

- 日中間の険悪な情勢の中、教員同士が心を開いて語り合うことができたこと、一番の成果だと思います。未来の両国関係を創るのは両国の子どもたちです。子どもたちに信頼の絆を感じてもらえたことや、子どもたちを指導するもの同士が感謝や信頼で結ばれたことが重要だと思います。

苦労した点

- 今回は展覧会と重なった中での受け入れだったので、全体での歓迎会ができなかった点が残念でした。しかし、展覧会に関連づけて、地域の連合町会長さんが積極的に歓迎の姿勢を示してくれたことが、「地域に根ざした教育を進める」展を感じてもらうのに有効だったように思う。

加えるとよいと思われる活動

- 児童の心に直接響くので、中国の先生による交流授業を一層進めたい。

プログラムの改善に向けた助言

- 昨今の政治・経済の情勢の中で、交流の予算も削減されているのではないでしょうか。そのような中で、ACCUの皆さんが心を込めた交流を準備してくださっていることに感謝しています。

付録

1. 実施要項
2. プログラム日程
3. 参加者リスト
4. 関係機関リスト
5. 文部科学省講義資料
6. 過去のプログラム実績

◆付録 1．実施要項

国際連合大学 2012-2013 年国際教育交流事業
中国教職員招へいプログラム

（第 1 班:2013 年 11 月 13 日－24 日:東京都、大阪府）
（第 2 班:2013 年 12 月 1 日－10 日:東京都）

実　施　要　項

1．背　景

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、国際連合大学の委託を受け、我が国と中国の教職員間の交流を深め、両国民の相互理解と友好の促進に資するため、国際教育交流事業として 2002 年より中国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施しております。

また、2003 年からは同プログラムと対をなすものとして、日本の初等中等教育教職員が中国を訪問するプログラムを実施しております。

今回の招へいプログラムも、文部科学省、中国教育部の協力のもと、第 1 班を 2013 年 11 月 13 日（水）から 11 月 24 日（日）までの 12 日間、第 2 班を 12 月 1 日（日）から 12 月 10 日（火）までの 10 日間にわたり、中国から初等中等教育教職員 100 名（第 1 班：50 名、第 2 班 50 名）を本邦に招へいします。

2．目　的

（1） 日本の教育制度および地域の学校教育の現状を紹介すること
（2） 学校等での意見交換を通じて、日中の教育の質を高めること
（3） 日中教職員間のネットワーク構築・強化に寄与すること
（4） 日本の文化全般に対する理解を深めること
（5） 日中両国の相互理解と友好を促進すること

3．日　程

本プログラムは、下記の日程で実施される予定です。

第 1 班

日付	日程	訪問先	活動
11 月 13 日（水）	第 1 日	東京	日本到着 オリエンテーション
11 月 14 日（木）	第 2 日	東京	開会式、文部科学省講義、歓迎交流会
11 月 15 日（金）	第 3 日	東京	学校訪問（授業見学、教員、児童生徒との交流）
11 月 16 日（土）－17 日（日）	第 4－5 日	箱根	世界遺産見学（富士山近辺） 教育文化施設視察
11 月 18 日（月）－20 日（水）	第 6－8 日	東京	学校訪問（授業見学、教員、児童生徒との交流） 教育文化施設視察
11 月 21 日（木）	第 9 日	東京から大阪へ移動	グループ別情報共有会
11 月 22 日（金）－23 日（土）	第 10－11 日	大阪、京都等	世界遺産見学（京都） 報告会・閉会式
11 月 24 日（日）	第 12 日		日本出発

* 第 3、6、7、8 日は、参加者は 2 グループに分かれ、学校および教育文化施設を訪問する。

* 第 1 班は 2 グループ各 25 名程度とし、以下のグループ分けとする。
  A グループ（おもに高等学校教職員）
  B グループ（おもに中学校教職員）
* 各グループの代表者は、本プログラムでの学校訪問およびその他活動について、第 11 日の報告会で報告する。

第 2 班

日付	日程	訪問先	活動
12 月 1 日（日）	第 1 日	東京	日本到着 オリエンテーション
12 月 2 日（月）	第 2 日	東京	開会式、文部科学省講義、歓迎交流会
12 月 3 日（火）－6 日（金）	第 3－6 日	東京	学校訪問（授業見学、教員、児童生徒との交流） グループ別情報共有会
12 月 7 日（土）	第 7 日	東京	報告会・閉会式
12 月 8 日（日）－9 日（月）	第 8－9 日	箱根	世界遺産見学（富士山近辺） 教育文化施設視察
12 月 10 日（火）	第 10 日	東京	日本出発

* 第 3－6 日は、参加者は 2 グループに分かれ、学校および教育文化施設を訪問する。
* 第 2 班は 2 グループ各 25 名程度とし、以下のグループ分けとする。
  C グループ（おもに中学校教職員）
  D グループ（おもに小学校教職員）
* 各グループの代表者は、本プログラムでの学校訪問およびその他活動について、第 7 日の報告会で報告する。

4．参加者数

第 1 班：約 50 名
第 2 班：約 50 名

5．参加資格

（1）中華人民共和国の国民であること。
（2）所属する学校等からの推薦を受けた、初等中等教育の教職員であること。（教育行政官及び教育専門家を含む）
（3）日本への関心が高く、日本の教職員との、主に教育分野における交流に高い関心を持つもの。
（4）中国語（普通話）での会話が可能であること。
（5）プログラムの全日程に参加が可能であること。

6．評価と報告

（1）各参加者は、帰国前日までに ACCU の用意する評価票に記入する。
（2）各グループの代表者は、報告会において発表を行う。

7．渡航費等

ACCU は下記の経費を負担する。
（1） 往復航空運賃
北京と、日本国内の指定された国際空港との間のエコノミークラス航空券。
（2） 宿泊と食事
プログラム期間中のシングルルーム（朝食含）、およびプログラム期間中の食事。食事が提供されない場合については食費の規定額。

（３） 日本国内の移動旅費
プログラム期間中の、自由行動時間以外の国内移動旅費。

※上記以外の経費については参加者が負担することとする。

８．海外旅行傷害保険

各参加者は、プログラム期間中に起こりうる傷害、疾病等の緊急時に備えて、各自の責任において、必ず海外旅行傷害保険に加入すること。

９．通訳

公式プログラム期間中は日本語と中国語（普通話）間の逐次通訳が行われる。

１０．申請・推薦手続

中国教育部は、参加者を選定し、プログラム開始約１月半前（10 月 3 日）までに参加者データシートを揃えて、ACCU へ推薦することとする。

１１．このプログラムに関する照会先

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)　人物交流部
〒162-8484　東京都新宿区袋町６番地　日本出版会館
Tel: 03-3269-4498, 4435　　Fax: 03-3269-4510
E-mail: accu-exchange_ml@accu.or.jp

◆付録 2. プログラム日程

(1)第1班プログラム

第 1 日(日本到着日)		**11 月 13 日(水)**
北京 東京	09:25 13:40 15:00 16:30 17:00-18:00 18:00-19:00	北京首都国際空港発(CA925 便) 成田国際空港着 移動(バス) ホテルメトロポリタンエドモント着(チェックイン) オリエンテーション(ホテル 3 階「千鳥」) 夕食(ホテル 3 階「春琴」)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル
第 2 日		**11 月 14 日(木)**
東京	09:00-09:40 09:45-12:15 12:30-14:00 17:30	開会式(ホテル 3 階「千鳥」) 講義 (ホテル 3 階「千鳥」) 歓迎交流会(ホテル 1 階「クリスタルホール」) 中華人民共和国在日本国大使館教育部訪問
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル
第 3 日		**11 月 15 日(金)**
<A グループ> 東京	08:00 09:00-12:00 12:30-13:30 13:45-15:15 16:00	ホテル発 市川学園市川中学・高等学校訪問 昼食 千葉県立現代産業科学館見学 ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:カジュアル
<B グループ> 東京	08:00 09:00-15:10 16:00	ホテル発 荒川区立原中学校訪問(給食交流) ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:カジュアル
第 4 日		**11 月 16 日(土)**
東京 富士河口湖	09:00 17:00	ホテル発(チェックアウト) 箱根、河口湖視察 ホテル着(チェックイン)、夕食
		宿泊先:ホテル湖龍、明日の服装:カジュアル
第 5 日		**11 月 17 日(日)**
富士河口湖 東京	08:30 17:30	ホテル発(チェックアウト) 箱根、河口湖視察 ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル
第 6 日		**11 月 18 日(月)**
<A グループ> 東京	09:20 10:50-15:00 16:15	ホテル発 自由学園訪問(給食交流) ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル
<B グループ> 東京	09:30 10:00-11:40 12:30-17:00 17:30	ホテル発 日本科学未来館見学 江東区立第二南砂中学校訪問(給食体験) ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル

第 7 日		**11 月 19 日(火)**
<A グループ> 東京	08:20 09:30-11:00 11:30-12:30 13:10-16:30 17:45	ホテル発 江戸東京たてもの園見学 昼食 東京都立東大和南高等学校訪問 ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル
<B グループ> 東京	08:00 09:45-10:15 10:30-12:20 13:30-17:00 18:30	ホテル発 鎌倉散策 横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校訪問 昼食 横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校訪問 ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル
第 8 日		**11 月 20 日(水)**
<A グループ> 東京	08:20 09:00-12:00 13:30-16:30 17:00	ホテル発 筑波大学附属駒場中学校・高等学校訪問 昼食 東京都立杉並総合高等学校訪問 ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:カジュアル
<B グループ> 東京	08:20 09:10-15:15 16:00	ホテル発 恵泉女学園中学・高等学校訪問 ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:カジュアル
第 9 日		**11 月 21 日(木)**
東京 大阪	09:30-10:30 11:00 12:30-13:30 15:30 16:40	情報共有会(ホテル 3 階「まつかぜ」「はなぶさ」) ホテル発(チェックアウト) 昼食 羽田空港発(JL125) 伊丹空港着 ホテル着(チェックイン)、夕食(各自)
		宿泊先:リーガロイヤルホテル大阪、明日の服装:カジュアル
第 10 日		**11 月 22 日(金)**
大阪	08:00 17:15	ホテル発 京都視察 ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:リーガロイヤルホテル大阪、明日の服装:ビジネス
第 11 日		**11 月 23 日(土)**
大阪	09:30-10:30 10:45-11:30	報告会(リーガロイヤル NCB「松の間」) 閉会式(リーガロイヤル NCB「松の間」) 昼食(各自) 夕食(各自)
		宿泊先:リーガロイヤルホテル大阪、明日の服装:カジュアル
第 12 日		**11 月 24 日(日)**
大阪	06:00 07:15 09:15 11:50	ホテル発(チェックアウト)、移動(バス) 関西国際空港着 関西国際空港発(CA162) 北京首都国際空港着

(2)第 2 班プログラム

第 1 日(日本到着日)		**12 月 1 日(日)**
北京	08:35	北京首都国際空港発(CA181 便)
東京	12:50	羽田空港着
	14:00	移動(バス)
	15:00	ホテルメトロポリタンエドモント着(チェックイン)
	15:30-16:30	オリエンテーション(ホテル 3 階「春琴」)
	17:00-18:30	夕食(ホテル 3 階「千鳥」)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル
第 2 日		**12 月 2 日(月)**
東京	09:00-09:40	開会式(ホテル 2 階「万里」)
	09:45-12:15	講義 (ホテル 2 階「万里」)
	12:30-14:00	歓迎交流会(ホテル 1 階「クリスタルホール」)
		夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル
第 3 日		**12 月 3 日(火)**
<C グループ>	08:00	ホテル発
東京	08:50-14:00	東京学芸大学附属国際中等教育学校訪問(生徒と昼食交流)
	14:45-16:00	ふれあい下水道館見学
	17:30	中華人民共和国在日本国大使館教育部訪問
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル
<D グループ>	08:10	ホテル発
東京	09:00-13:10	荒川区立尾久宮前小学校訪問(給食体験)
	13:35-16:30	荒川区立尾久八幡中学校訪問
	17:30	中華人民共和国在日本国大使館教育部訪問
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル
第 4 日		**12 月 4 日(水)**
<C グループ>	08:20	ホテル発
東京	09:00-12:00	筑波大学附属桐が丘特別支援学校訪問
		昼食
	13:30-16:45	聖徳学園中学・高等学校訪問
	17:45	ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル
<D グループ>	07:45	ホテル発
東京	08:30-15:20	星美学園小学校訪問(児童と昼食交流)
	16:00	ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル
第 5 日		**12 月 5 日(木)**
<C グループ>	08:15	ホテル発
東京	09:00-13:30	足立区立興本扇学園訪問(給食交流)
	14:30-16:00	国立科学博物館見学
	16:30	ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル
<D グループ>	08:30	ホテル発
東京	09:20-13:30	東京学芸大学附属大泉小学校訪問(給食交流)
	14:30-16:00	国立科学博物館見学
	16:30	ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル

第 6 日		**12 月 6 日(金)**
＜C グループ＞ 東京	08:20 09:00-12:40 13:50-15:20 15:45 16:00-17:00	ホテル発 大田区立大森第六中学校訪問(給食交流) 日本科学未来館見学 ホテル着 情報共有会(ホテル 3 階「ブバリア」「はなぶさ」) 夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル
＜D グループ＞ 東京	08:20 09:00-12:00 13:50-15:20 15:45 16:00-17:00	ホテル発 江東区立八名川小学校訪問 昼食 日本科学未来館見学 ホテル着 情報共有会(ホテル 3 階「ブバリア」「はなぶさ」) 夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル
第 7 日		**12 月 7 日(土)**
東京	09:30-10:30 10:45-11:30	報告会(ホテル 2 階「薫風」) 閉会式(ホテル 2 階「薫風」) 昼食(各自) 夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:カジュアル
第 8 日		**12 月 8 日(日)**
東京 富士河口湖	09:00 17:00	ホテル発(チェックアウト) 箱根、河口湖視察 ホテル着(チェックイン)、夕食
		宿泊先:ホテル湖龍、明日の服装:カジュアル
第 9 日		**12 月 9 日(月)**
富士河口湖 東京	08:30 17:30	ホテル発(チェックアウト) 箱根、河口湖視察 ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル
第 10 日		**12 月 10 日(火)**
東京	05:30 06:30 08:30 11:30	ホテル発(チェックアウト)、移動(バス) 羽田空港着 羽田空港発(CA184) 北京首都国際空港着

◆付録3.　参加者リスト

(1)Aグループ25名　　◎総団長:A-1　張士佐 (ZHANG Shizuo)　　★団長:A-21　閻玲 (YAN Ling)
（主に高等学校教員）　　○秘書長:A-25　王鉄輝 (WANG Tiehui)　　☆副団長:A-9　谷立福 (GU Lifu)

No.	姓名			性別	所在単位 / 所属機関		职务 / 職務	
	中文	日文	拼音 / ローマ字表記		中文	日文	中文	日文
◎A-1	张士佐	張士佐	ZHANG Shizuo	男	北京市人民政府 教育督导室督导一处	北京市人民政府 教育督導室督導一処	处长	処長
A-2	强丽红	強麗紅	QIANG Lihong	女	北京市第十一中学	北京市第十一中学	教学主任	教学主任
A-3	李学忠	李学忠	LI Xuezhong	男	北京市第二十五中学	北京市第二十五中学	教师	教師
A-4	王笃年	王篤年	WANG Dunian	男	北京市十一学校	北京市十一学校	教师	教師
A-5	张翠敏	張翠敏	ZHANG Cuimin	女	吉林省实验中学	吉林省実験中学	教师	教師
A-6	梁向国	梁向国	LIANG Xiangguo	男	吉林毓文中学	吉林毓文中学	主任	主任
A-7	梁　薇	梁　薇	LIANG Wei	女	东北师范大学附属中学	東北師範大学附属中学	高级教师	高級教師
A-8	杨玉林	楊玉林	YANG Yulin	男	吉林市第一中学校	吉林市第一中学校	教师	教師
☆A-9	谷立福	谷立福	GU Lifu	男	四平市实验中学	四平市実験中学	副校长	副校長
A-10	熊凤岐	熊鳳岐	XIONG Fengqi	男	松原市实验高级中学	松原市実験高級中学	教师	教師
A-11	郑洪江	鄭洪江	ZHENG Hongjiang	男	长春市第二实验中学	長春市第二実験中学	教师	教師
A-12	吴连群	呉連群	WU Lianqun	男	长春市十一高中	長春市十一高中	校长助理	校長補佐
A-13	邵红月	邵紅月	SHAO Hongyue	女	长春市第二中学	長春市第二中学	教师	教師
A-14	杨艳华	楊艶華	YANG Yanhua	女	长春市实验中学	長春実験中学	主任	主任
A-15	赵俊光	趙俊光	ZHAO Junguang	男	贵州大学附属中学	貴州大学附属中学	副校长	副校長
A-16	王晓祥	王暁祥	WANG Xiaoxiang	男	贵州师范大学附属中学	貴州師範大学附属中学	副校长	副校長
A-17	梁光斐	梁光斐	LIANG Guangfei	男	贵阳市第一中学	貴陽市第一中学	信息科研处主任	情報科学研究処主任
A-18	傅定芳	傅定芳	FU Dingfang	女	贵阳市第六中学	貴陽市第六中学	校长	校長
A-19	刘皖平	劉皖平	LIU Wanping	男	贵阳市第九中学	貴陽市第九中学	副校长	副校長
A-20	刘　原	劉　原	LIU Yuan	女	贵阳市第二中学	貴陽市第二中学	教师	教師
★A-21	阎　玲	閻　玲	YAN Ling	女	贵阳市第十四中学	貴陽市第十四中学	校长	校長
A-22	李　莉	李　莉	LI Li	女	贵阳市第十中学	貴陽市第十中学	教师	教師
A-23	石艳梅	石艶梅	SHI Yanmei	女	贵阳市第三实验中学	貴陽市第三実験中学	校长	校長
A-24	晏　云	晏　雲	YAN Yun	男	贵阳市清华中学	貴陽市清華中学	主任	主任
○A-25	王铁辉	王鉄輝	WANG Tiehui	男	教育部国际司	教育部国際司	项目官员	プロジェクト委員

◆付録3.　参加者リスト

(2)Bグループ25名
（主に中学校教員）

◎総団長:A-1　張士佐（ZHANG Shizuo）　★団長:B-5　孫艶（SUN Yan）
○秘書長:B-25　権学紅（QUAN Xuehong）　☆副団長:B-16　沈連柱（SHEN Lianzhu）

No.	姓名			性別	所在単位 / 所属機関		职务 / 職務	
	中文	日文	拼音 / ローマ字表記		中文	日文	中文	日文
B-1	刘文军	劉文軍	LIU Wenjun	男	北京市第一六六中学	北京市第一六六中学	副校长	副校長
B-2	杨红霞	楊紅霞	YANG Hongxia	女	北京市第二0六中学	北京市第二〇六中学	校长	校長
B-3	朱　兰	朱　蘭	ZHU Lan	女	北京市十一学校	北京市十一学校	年级主任	学年主任
B-4	王艳玲	王艶玲	WANG Yanling	女	北京市温泉第二中学	北京市温泉第二中学	教研组长	教育研究グループ長
★B-5	孙　艳	孫　艶	SUN Yan	女	吉林省教育厅	吉林省教育庁	调研员	調査研究員
B-6	屈　静	屈　静	QU Jing	女	长春外国语学校	長春外国語学校	年级主任	学年主任
B-7	王桂香	王桂香	WANG Guixiang	女	桦甸市特殊教育学校	樺甸市特殊教育学校	校长	校長
B-8	刘春玲	劉春玲	LIU Chunling	女	长春吉大附中实验学校	長春吉林大学附属中学実験学校	教师	教師
B-9	刘永波	劉永波	LIU Yongbo	女	吉林省第二实验学校	吉林省第二実験学校	教师	教師
B-10	王国雷	王国雷	WANG Guolei	男	长春市第一外国语中学	長春市第一外国語中学	教务处主任	教務処主任
B-11	赵　宇	趙　宇	ZHAO Yu	男	长春市第六十八中学	長春市第六十八中学	副校长	副校長
B-12	田　秋	田　秋	TIAN Qiu	女	长春市朝阳区教育局	長春市朝陽区教育局	副局长	副局長
B-13	赵秉华	趙秉華	ZHAO Binghua	女	长春市朝阳区慧达小学	長春市朝陽区慧達小学	校长	校長
B-14	冯美娥	馮美娥	FENG Meie	女	长春市第四十五中学	長春市第四十五中学	副校长	副校長
B-15	叶学仕	葉学仕	YE Xueshi	男	贵州省教育厅	貴州省教育庁	主任科员	主任課員
☆B-16	沈连柱	沈連柱	SHEN Lianzhu	男	北京师范大学贵阳附属中学	北京師範大学貴陽附属中学	校长	校長
B-17	何听涛	何聴涛	HE Tingtao	男	贵阳市第十九中学	貴陽市第十九中学	教师	教師
B-18	成　杰	成　傑	CHENG Jie	男	贵阳市第十八中学	貴陽市第十八中学	办公室副主任	事務室副主任
B-19	许　军	許　軍	XU Jun	男	贵阳市第五中学	貴陽市第五中学	副校长	副校長
B-20	邓雪峰	鄧雪峰	DENG Xuefeng	男	贵阳市第十七中学	貴陽市第十七中学	办公室主任	事務室主任
B-21	王志刚	王志剛	WANG Zhigang	男	贵阳市第二实验中学	貴陽市第二実験中学	副主任	副主任
B-22	吴卓玲	呉卓玲	WU Zhuoling	女	贵阳新世界国际学校	貴陽新世界国際学校	教师	教師
B-23	宋　红	宋　紅	SONG Hong	女	贵阳中天中学	貴陽中天中学	教学处主任	教学処主任
B-24	胡文涛	胡文涛	HU Wentao	男	贵阳市白云兴农中学	貴陽市白雲興農中学	执行校长	執行校長
○B-25	权学红	権学紅	QUAN Xuehong	男	教育部国际司	教育部国際司	项目官员	プロジェクト委員

◆付録3.　参加者リスト

(3)Cグループ25名
（主に中学校教員）

◎総団長:C-1　金剣（JIN Jian）
○秘書長:C-2　鄭晗（ZHENG Han）
★団長:C-3　楊衡（YANG Heng）
☆副団長:C-4　宋師亮（SONG Shiliang）

No.	姓名			性別	所在単位 / 所属機関		职务 / 職務	
	中文	日文	拼音 / ローマ字表記		中文	日文	中文	日文
◎C-1	金　剑	金　剣	JIN Jian	男	江苏省教育厅	江蘇省教育庁	副调研员	副調査研究員
○C-2	郑　晗	鄭　晗	ZHENG Han	女	教育部国际司	教育部国際司	主任科员	主任課員
★C-3	杨　衡	楊　衡	YANG Heng	男	浙江省教育厅	浙江省教育庁	主任科员	主任課員
☆C-4	宋师亮	宋師亮	SONG Shiliang	男	教育部基础一司	教育部基礎一司	主任科员	主任課員
C-5	陈建全	陳建全	CHEN Jianquan	男	无锡市侨谊实验中学	無錫市僑誼実験中学	教师	教師
C-6	徐禄春	徐禄春	XU Luchun	男	无锡市金星中学	無錫市金星中学	校长	校長
C-7	黄　波	黄　波	HUANG Bo	男	无锡市清名桥中学	無錫市清名橋中学	校长	校長
C-8	金军华	金軍華	JIN Junhua	男	江苏省无锡市梅里中学	江蘇省無錫市梅里中学	校长	校長
C-9	王　英	王　英	WANG Ying	女	江苏省无锡市新区第一实验学校	江蘇省無錫市新区第一実験学校	教师	教師
C-10	徐少伟	徐少偉	XU Shaowei	男	江苏省无锡市新城中学	江蘇省無錫市新城中学	校长	校長
C-11	周莲花	周蓮花	ZHOU Lianhua	女	江苏省无锡市硕放中学	江蘇省無錫市碩放中学	教师	教師
C-12	张　婴	張　嬰	ZHANG Ying	女	南京外国语学校	南京外国語学校	教师	教師
C-13	刘炳俊	劉炳俊	LIU Bingjun	男	江苏省南京市聋人学校	江蘇省南京市聾人学校	办公室主任	事務室主任
C-14	周　岚	周　嵐	ZHOU Lan	女	杭州市交通职业高级中学	杭州市交通職業高級中学	主任科员	主任課員
C-15	吴　顺	呉　順	WU Shun	男	杭州市开元商贸职业学校	杭州市開元商貿職業学校	副主任	副主任
C-16	高光辉	高光輝	GAO Guanghui	男	浙江省杭州第二中学	浙江省杭州第二中学	年级主任	学年主任
C-17	张跃武	張躍武	ZHANG Yuewu	男	浙江省杭州高级中学	浙江省杭州高級中学	副主任	副主任
C-18	彭肖黎	彭肖黎	PENG Xiaoli	女	浙江大学附属中学	浙江大学附属中学	教师	教師
C-19	张勇军	張勇軍	ZHANG Yongjun	男	浙江省宁波市慈湖中学	浙江省寧波市慈湖中学	主任	主任
C-20	徐力钧	徐力鈞	XU Lijun	男	浙江省宁波市李惠利中学	浙江省寧波市李惠利中学	副主任	副主任
C-21	陶迪儿	陶廸児	TAO Dier	女	宁波市第四中学	寧波市第四中学	教研组长	教育研究グループ長
C-22	李建明	李建明	LI Jianming	男	宁波中学	寧波中学	副校长	副校長
C-23	岑启学	岑启学	CEN Qixue	男	浙江省宁波市第二中学	浙江省寧波市第二中学	教师	教師
C-24	韩晓原	韓暁原	HAN Xiaoyuan	男	中央民族大学附属中学	中央民族大学附属中学	学生处主任	学生処主任
C-25	韩　山	韓　山	HAN Shan	男	中央民族大学附属中学	中央民族大学附属中学	校办副主任	学校副主任

◆付録3.　参加者リスト

(4)Dグループ24名
（主に小学校教員）

◎総団長:C-1　金剣 (JIN Jian)　　★団長:D-1　劉国慶 (LIU Guoqing)
○秘書長:C-2　鄭晗 (ZHENG Han)　　☆副団長:D-2　呉天妹 (WU Tianmei)

No.	姓名			性別	所在单位 / 所属機関		职务 / 職務	
	中文	日文	拼音 / ローマ字表記		中文	日文	中文	日文
★D-1	刘国庆	劉国慶	Liu Guoqing	男	北京市教育委员会人事处	北京市教育委員会人事処	副处长	副処長
☆D-2	吴天妹	呉天妹	WU Tianmei	女	教育部基础二司	教育部基礎二司	副主任科员	副主任課員
D-3	谢日光	謝日光	XIE Riguang	男	教育部财务司	教育部財務司	主任科员	主任課員
D-4	王　涛	王　涛	WANG Tao	男	北京市月坛中学	北京市月壇中学	教学副校长	教学副校長
D-5	贾　佳	賈　佳	JIA Jia	女	北京市月坛中学德育处	北京市月壇中学德育処	主任	主任
D-7	严伯春	厳伯春	YAN Bochun	男	南京市力学小学	南京市力学小学	教师	教師
D-8	范颖琼	範穎瓊	FAN Yingqiong	女	南京市下关区天妃宫小学	南京市下関区天妃宮小学	书记	書記
D-9	王　涓	王　涓	WANG Juan	女	南京市琅琊路小学	南京市琅琊路小学	教师	教師
D-10	谈燕燕	談燕燕	TAN Yanyan	女	南京市拉萨路小学	南京市拉薩路小学	教师	教師
D-11	殷传勤	殷伝勤	YIN ChuanQin	女	扬州市教育局教研室	揚州市教育局教研室	教研员	教育研究員
D-12	蒋　琴	蒋　琴	JIANG Qin	女	江苏省高邮实验小学	江蘇省高郵実験小学	教师	教師
D-13	龚顺斌	龔順斌	GONG Shunbin	男	江苏省扬州市江都区大桥中心小学	江蘇省揚州市江都区大橋中心小学	校长	校長
D-14	王宇明	王宇明	WANG Yuming	男	扬州市育才小学	揚州市育才小学	校长	校長
D-15	杨　薇	楊　薇	YANG Wei	女	扬州市梅岭小学	揚州市梅嶺小学	教师	教師
D-16	杨　春	楊　春	YANG Chun	男	仪征市实验小学	儀徴市実験小学	副校长	副校長
D-17	颜晓雅	顔暁雅	YAN Xiaoya	女	杭州市大关中学	杭州市大関中学	校长	校長
D-18	郑德雄	鄭徳雄	ZHENG Dexiong	男	杭州市启航中学	杭州市启航中学	校长	校長
D-19	李和秀	李和秀	LI Hexiu	女	杭州市明德小学	杭州市明徳小学	校长	校長
D-20	陈道远	陳道遠	CHEN Daoyuan	男	杭州市和睦小学	杭州市和睦小学	校长	校長
D-21	叶晓峰	葉暁峰	YE Xiaofeng	女	杭州市惠兴中学	杭州市惠興中学	副校长	副校長
D-22	苏林冲	蘇林沖	SU Linchong	男	杭州市胜利小学	杭州市勝利小学	教师	教師
D-23	陆建芬	陸建芬	LU Jianfen	女	宁波市聋哑学校	寧波市聾唖学校	校办主任	学校主任
D-24	周均华	周均華	ZHOU Junhua	男	浙江省金华市南苑中学	浙江省金華市南苑中学	校长	校長
D-25	张红强	張紅強	ZHANG Hongqiang	男	浙江省金华市金东区多湖小学	浙江省金華市金東区多湖小学	校长	校長

◆付録 4. 関係機関リスト

国際連合大学（UNU）
〒150-8925 東京都渋谷区神宮前 5-53-70
TEL: 03-5467-1212
URL: http://jp.unu.edu/

文部科学省（MEXT）
大臣官房国際課
〒100-8959 東京都千代田区霞ヶ関 3-2-2
TEL: 03-5253-4111
URL: http://www.mext.go.jp

中華人民共和国教育部
国際協力交流局アジア・アフリカ課
〒100-816 中国北京市西単大木仓胡同 35 号
TEL: +86-10-6609-6650
URL: http://www.moe.edu.cn/

中華人民共和国駐日本国大使館
〒106-0046 東京都港区元麻布 3-4-33
TEL: 03-3403-3388
URL: http://www.china-embassy.or.jp /jpn/

中華人民共和国駐日本国大使館教育処
〒135-0023 東京都江東区平野 2-2-9
TEL: 03-3643-0305
URL: http://www.china-embassy.or.jp/jpn/

中華人民共和国駐大阪総領事館
〒550-0004 大阪府大阪市西区靭本町 3-9-2
TEL: 06-6445-9481
URL: http://osaka.china-consulate.org/jpn/

在中華人民共和国日本国大使館
〒100-600 中国北京市亮馬橋東街 1 号
TEL: +86-10-8531-9800
URL: http://www.cn.emb-japan.go.jp/index_j.htm

外務省
大臣官房外務報道官・広報文化組織国際文化協力室
〒100-8919 東京都千代田区霞ヶ関 2-2-1
TEL: 03-3580-3311
URL: http://www.mofa.go.jp/mofaj/index.html

★実施団体

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）
〒162-8484 東京都新宿区袋町 6 日本出版会館
TEL: 03-3269-4498 FAX: 03-3269-4510
Email: exchange@accu.or.jp
URL: http://www.accu.or.jp

田村 哲夫
理事長

二ノ宮 正和
事務局長代理 総務部長

佐々木 万里子
人物交流部長

康 武司
模擬国連推進部長

冨本 ひろみ
人物交流部係員

米島 百合子
人物交流部主任

外山 紀子
人物交流部係員

杉原 由美子
教育協力部係員

◆付録 5.　文部科学省講義資料

日本の初等中等教育

文部科学省初等中等教育局
栗山　和大

講演の構成

Ⅰ．日本の基本的な初等中等教育制度

Ⅱ．日本の現状認識と教育政策の方向性

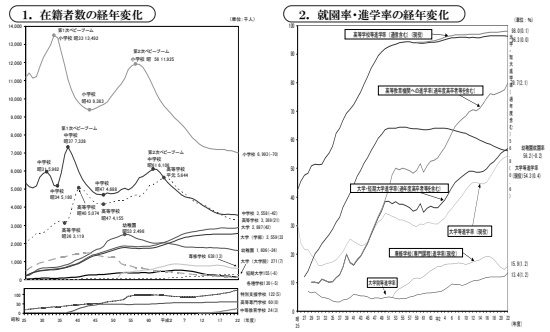
Ⅰ．日本の基本的な初等中等教育制度

学校数、在籍者数、本務教員数

学校種	学校数（校数）	在籍者数（人数）	本務教員数（人数）
幼 稚 園	13，171	1，604，217	110,840
小 学 校	21，460	6，764，638	418，685
中 学 校	10，699	3，552，684	253，739
高等学校	5，022	3，355，509	237，221
中等教育学校	49	28，644	2，192
特別支援学校	1,059	129，994	76，382
合　計	**51，465**	**15，435，686**	**1，099，059**

（出典：文部科学省「平成24年度学校基本調査（速報値）」より）

在籍者数、就園率・就学率の経年変化



義務教育制度の概要

憲　法

第26条　すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。

すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ。義務教育は、これを無償とする。

教育基本法

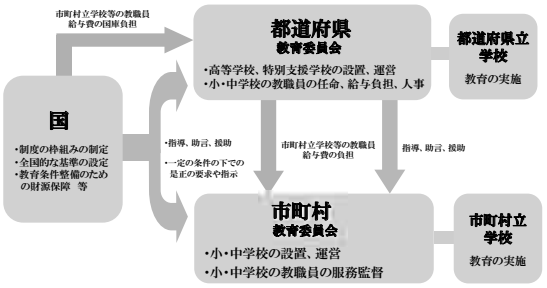
第5条　国民は、その保護する子に、別に法律で定めるところにより、普通教育を受けさせる義務を負う。

2　義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする。

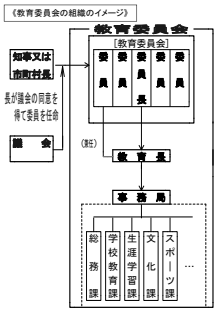
3　国及び地方公共団体は、義務教育の機会を保障し、その水準を確保するため、適切な役割分担及び相互の協力の下、その実施に責任を負う。

4　国又は地方公共団体の設置する学校における義務教育については、授業料を徴収しない。

教育行政制度の概要（国・都道府県・市町村の役割）



教育委員会制度の概要



1. 教育委員会制度の仕組み

- ○ 教育委員会は、首長から独立した行政委員会として全ての都道府県及び市町村等に設置。
- ○ 教育委員会は、教育行政における重要事項や基本方針を決定し、それに基づいて教育長が具体の事務を執行。
- ○ 教育委員は、非常勤で、原則5人。任期は4年で、再任可
- ○ 教育長は、常勤で、教育委員のうちから教育委員会が任命。

2. 教育委員会制度の意義

① 政治的中立性の確保
教育は、その内容が中立公正であることが極めて重要、個人的な価値判断や特定の党派的影響力から中立性を確保することが必要。

② 継続性・安定性の確保
特に義務教育について、学習期間を通じて一貫した方針の下、安定的に行われることが必要。

③ 地域住民の意向の反映
教育は、地域住民にとって関心の高い行政分野であり、専門家のみが担うのではなく、広く地域住民の参加を踏まえて行われることが必要。

教育基本法（平成18年12月成立）の概要

教育の目的・理念

（1）教育の目的・理念を明示

①教育の目的として「人格の完成」、「国家・社会の形成者として心身ともに健康な国民の育成」を規定

②この教育の目的を実現するために今日重要と考えられる事柄を「教育の目標」として規定

＜教育の目標の例＞
- 幅広い知識と教養、豊かな情操と道徳心、健やかな身体
- 能力の伸長、自主・自律の精神、職業との関連を重視
- 正義と責任、自他の敬愛と協力、男女の平等、公共の精神
- 生命や自然の尊重、環境の保全
- 伝統と文化の尊重、我が国と郷土を愛し、他国を尊重、国際社会の平和と発展に寄与

（2）「生涯学習の理念」「教育の機会均等」

学習指導要領①

○ 教育基本法の改正等を踏まえ、平成20年に、幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領を、平成21年に、高等学校学習指導 要領、特別支援学校学習指導要領を改訂。

○ 小学校では23年度、中学校では24年度から全面実施、高校では25年度入学生から年次進行で実施。

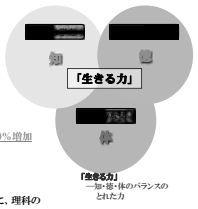
学習指導要領の改訂のポイント

1. 学習指導要領改訂の基本的な考え方

①教育基本法改正等で明確になった教育の理念を踏まえ、「生きる力」を育成

②知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視

③道徳教育や体育などの充実により、豊かな心や健やかな体を育成



2. 授業時数の増加（小・中学校）

○国語、社会、算数・数学、理科、体育・保健体育、外国語の授業時数を約10%増加

○週当たりのコマ数を小学校低学年で週2コマ、小学校中・高学年、中学校各学年で週1コマ増加

3. 必履修科目、教育課程編成等の配慮事項等（高等学校）

○学習の基盤となる国語、数学、外国語に共通必履修科目を設定するとともに、理科の科目履修の柔軟性を向上

○義務教育段階の学習内容の確実な定着を図るための学習機会を設けることを促進

学習指導要領② ―教育内容の主な改善事項

《新学習指導要領における教育内容の主な改善事項》

① 言語活動の充実
言語活動は、知的活動（論理や思考）、コミュニケーション、感性・情緒の基盤。子どもたちの思考力・判断力・表現力等を育むため、国語をはじめ各教科等において、知識・技能を活用してレポートの作成や論述を行うなど言語の力を高める学習を実施。

② 理数教育の充実
国際的に通用するカリキュラムにするとともに、新しい科学的知見を取り入れるため、学習内容を充実。算数・数学では、大切な内容を繰り返して学習することや、学習の中で学んだことを実生活で生かすような学習、理科では、観察や実験を充実する。

③ 伝統や文化に関する教育の充実
国際社会で活躍する人材の育成を図るため、我が国や郷土の伝統や文化について理解を深め、その上さを継承・発展させるための教育を充実する。

④ 道徳教育の充実
道徳の時間を要として、学校の教育活動全体を通じて子どもたちの道徳性を養う。

⑤ 体験活動の充実
子どもたちの社会性や豊かな人間性を育むため、小学校で自然の中での集団宿泊活動、中学校で職場体験活動などを充実。

⑥ 外国語教育の充実
小学校5、6年生における「外国語活動」の導入、中・高等学校における指導法徳の充実や「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能をバランスよく育成することにより、小・中・高等学校を通じて外国語教育を充実する。

⑦ 健やかな体の育成
子どもたちが生涯にわたって健康を保持増進するとともに、豊かなスポーツライフを実現する基礎を培うため、健康で安全な生活を営む実践力を育成し、運動の楽しさや喜びを味わうことができるよう体育・保健体育を充実する。

教員養成・免許制度の概要

【免許状主義】

教員は、教育職員免許法により授与される各相当の免許状を有する者でなければならない。

【教員養成・採用・研修等の各段階を通じた教員の資質向上】

養成
- 大学における養成が原則
- 教職課程の認定を受けた学科等において、教科に関する科目、教職に関する科目などを修得することにより、採用当初から学級や教科を担任し、教科指導、生徒指導等を実践するために必要な最小限の資質能力を養成

採用
- 都道府県・指定都市教育委員会等において採用選考試験を実施
- 多面的な人物評価の一層の推進
  - ・面接試験・実技試験の重視
  - ・様々な社会体験等の評価

研修
- 都道府県教育委員会等における研修
  - ・初任者研修　・10年経験者研修　等
- 国（教員研修センター）における研修
  - ・各地域において中心的な役割を担う教職員に対する学校運営研修
  - ・喫緊の重要課題研修　等

適切な人事管理
- 指導が不適切な教員に対する人事管理システムの適切な運用
- 教員評価システム　● 優秀教員表彰

免許更新制
- 教員が定期的に最新の知識技能を身につけることで教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることが目的
- 免許状に10年の有効期間を定める

Ⅱ．日本の現状認識と教育政策の方向性

13

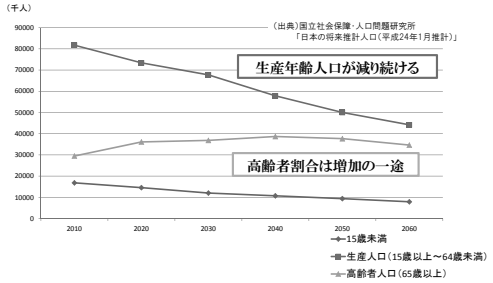
日本の現状に対する認識

1. 少子化・高齢化の進展
2. 子供の貧困率の上昇
3. 我が国の国際的な存在感の低下

14

1. 少子化・高齢化の進展

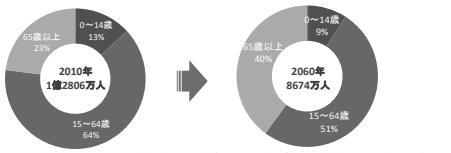
少子化の急激な進行により、生産年齢人口が大きく減少



15

生産年齢人口と非生産年齢人口の比率の変化

2010年には**2.8人で1人**を支えているが、2060年には**1.3人で1人**を支えることになる



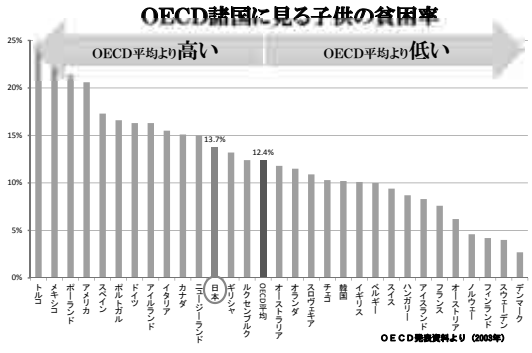
【出典】国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）」

2010年　8173万人 ÷ 2948万人 ≒ 2.8人

2060年　15～64歳人口 4418万人 ÷ 65歳以上人口 3464万人 ≒ 1.3人

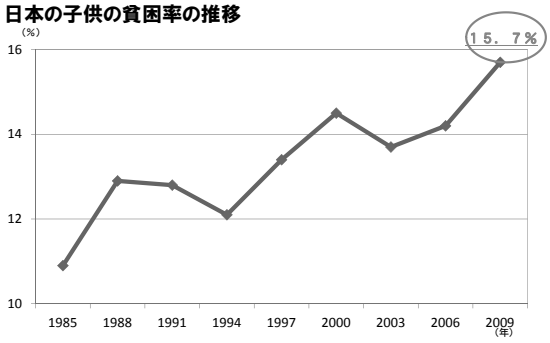
16

2. 子供の貧困率の上昇



17

日本の子供の貧困率の推移

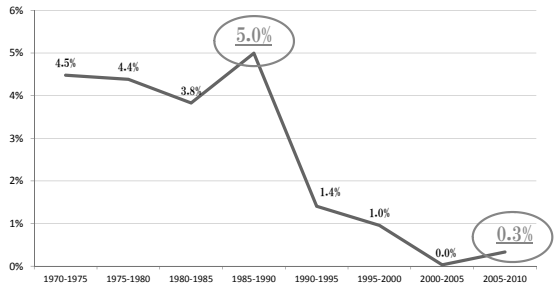


厚生労働省「平成24年グラフで見る世帯の状況（平成22年国民生活基礎調査の結果から）」
注：1）1994年の数値は、兵庫県を除いたものである。
2）貧困率は、ＯＥＣＤの作成基準に基づいて算出している。

18

3．我が国の国際的な存在感の低下

実質GDP成長率は20年間で5.0%から大きく低下



（出典）内閣府「国民経済計算確報」（1998、2009、2011年度）

新興国が経済成長する一方、日本の存在感が相対的に低下

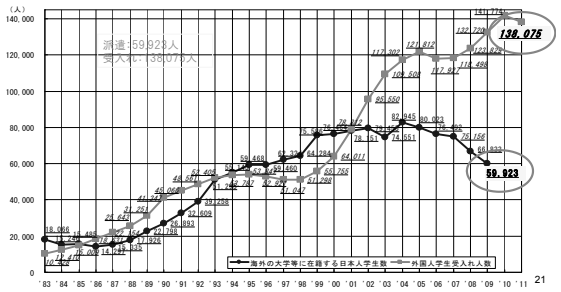
GDPの伸びと高等教育進学率（1990→2009）

	＜GDP伸長＞	＜進学率＞
• 韓国	3.1倍	37%→71%
• 中国	12.5倍	3%→17% （29万人→262万人）
• タイ	3.1倍	16%→46%
• オーストラリア	3.1倍	35%→94%
• 日本	1.6倍	36%→56%（短期大学含む）

（出典）文部科学省『人材のイノベーションによる日本再生に向けて』

日本人の海外留学者数

外国人留学生は頭打ち、日本人学生の内向き志向



「超高齢社会」と「グローバル社会」が
同時に到来

今こそ「教育再生」が必要

○生産年齢人口の減少にあった人材育成
➡ 個人の付加価値を高める
○海外でチャンスをつかめる人材育成
➡ グローバルマインド・スキルの育成

「これから求められる力」

○ クリエイティブにものを考える力
○ 自立的に考え、活動する力
○ 優しさや思いやりなどの感性

現状認識を踏まえた教育政策

「これから求められる力」を育むための環境づくり

政策1． グローバル人材育成
政策2． 教育基盤の充実
政策3． 高校教育改革
政策4． いじめ・体罰の根絶

政策1. グローバル人材育成

25

【課　題】

○教育において、到来しつつあるグローバル社会への対応が十分でない

○小学校から大学・大学院まで視野に入れたパッケージとしての施策が講じられていない

○日本人学生の顕著な内向き志向

【改革の方向性】

○小学校英語の抜本的拡充（実施学年の早期化、指導時間増、教科化、専任教員配置等）の検討

○語学力のみならず、幅広い教養、問題解決力等、国際的素養を身に付けたグローバル・リーダーを育成する高校（スーパーグローバルハイスクール）を支援

○英語教員に対する研修や海外派遣の充実、少人数での英語指導体制の整備

○企業や個人等との協力による留学費用の支援のための新たな仕組みを創設し、日本人学生・生徒の海外留学に対する支援を抜本的に強化

今後の英語教育の在り方の検討

今後の初等中等教育段階における英語教育の基本的な方向性についての論点

■中中高を通じた系統的な英語教育について

■小学校における英語教育について

○開始時期について

○授業時数について

○教科化について

○評価について

○指導体制の整備について

・学級担任の役割について

・ALT等の外部人材の活用について

・教員の指導力の向上について（教員養成、研修等）

○教材の整備について

今後、これまでの外国語活動の取組や、先進的な取組（低・中学年から英語教育を実施等）を行っている小学校における成果や課題の検証を行うとともに、有識者による検討を経て、小中高を通じた系統的な英語教育の強化に向けた方向性や、小学校における英語教育の在り方について決定する予定。

27

スーパーグローバルハイスクールの創設

【ポイント】

○高等学校等において、語学力とともに、幅広い教養、問題解決力等の国際的素養を身に付けたグローバル・リーダーを育成。

○・国内外の大学や企業、国際機関等と連携、
・外国語を使う機会の飛躍的増加、
・国内外にわたる課題を発見・解決したり、グローバルなビジネスで活躍したりできる人材の育成
に取り組む高等学校

○平成26年度に全国100校を指定（予定）

28

政策2. 教育基盤の充実

29

【課　題】

○　世界トップレベルの学力・規範意識の育成

【改革の方向性】

○教職員等指導体制の整備
→・少人数学級、チームティーチング、習熟度別指導の推進
・小学校の英語・理科、道徳教育、いじめ問題、特別支援教育などの教育課題への対応

○メリハリのある教員給与
→・指導的役割を担う校長の管理職手当改善、部活動手当の増額

○教員の資質向上
→・指導教諭の配置による校内の研修体制の充実を中心とした初任者研修の抜本的な改革
・各教育委員会による「教師塾」の設置促進
・社会人経験者の登用を推進

○学校の組織運営の改善
→・全校での主幹教諭の計画的配置を推進

○厳格な人事管理
→・病気休職者の復職前の勤務訓練の充実、指定医による診断を活用した復職審査の厳格化
・指導に課題がある教員に対する早期指導、支援等の取組を促進

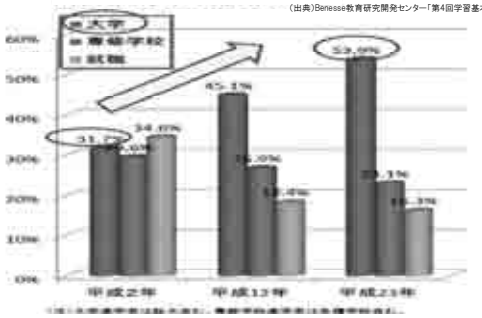
政策3. 高校教育改革

31

高校卒業者の進路の推移

大学進学率は過去20年間で32%から54%へ上昇

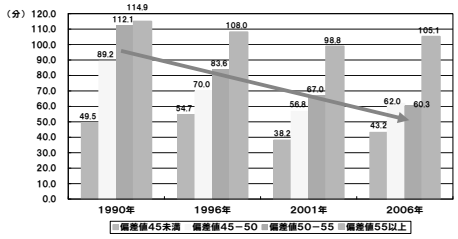
（出典）Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査」



32

高校生の学校外における平日の学習時間の推移

ボリュームゾーンである中間層の勉強時間が大きく減少している。



※）学習時間には、学習塾や予備校、家庭教師との学習時間を含む

【調査概要】高校2年生（普通科）4464人を対象に、全国4地域（東京・東北・四国・九州地方の都市部と郡部）で実施。
（出典）Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査」

33

【課　題】

○大学進学率は過去20年間で32%から54%へ上昇する一方、高校生の学習時間は大きく低下

○少子化を背景として、大学入試によって高校生が勉強するというモデルが現状では崩壊

【改革の方向性】

○生徒の多様性を踏まえ、地方公共団体及び学校において、例えば、次のような特色化を進めるとともに、国が適切な支援を行うことにより、教育を充実する。
- グローバル・リーダーとなるための国際的素養と総合力を育成する学校
- 科学技術人材としての素養の育成を目指し、先進的な理数系教育を行う学校
- 産業構造の変化等に対応した専門的な知識・技能を育成する学校
- 学び直しへの支援、考える力の育成、学習意欲の喚起を図る学校
- 進路への自覚を深めさせるため、多様な科目選択や就業体験等を行う学校

○国は、基礎的・共通的な学習の達成度を客観的に把握し、各学校における指導改善や生徒の学習改善に活かすための新たな試験の仕組みを創設。

○新たな試験は、高等学校教育の質の確保・向上を目的として、高等学校の教育課程における基礎的・共通的な教科・科目について、生徒の多様な状況に応じ、高等学校在学中に複数回受験できる仕組みとすることを検討。

○新たな試験の試験内容は、基礎的・共通的な教科・科目の学習達成度について、知識・技能だけでなく、その活用力、思考力・判断力・表現力等を含めた幅広い学力を把握・検証できるものとする。

※高校教育改革とともに、大学入学者選抜を、能力・意欲・適性を多面的・総合的に評価・判定するものに転換するとともに、高等学校教育と大学教育の連携を強力に進める必要。

34

公立高等学校の授業料不徴収及び高等学校等就学支援金制度の概要

平成22年4月より、公立高校の授業料を無償化し、私立高等学校等に通う生徒に対する就学支援金制度を創設

（平成25年度予算額：3,950億円）

制度概要

○公立の高等学校については授業料を不徴収とし、地方公共団体に対して授業料収入相当額を国費により負担。

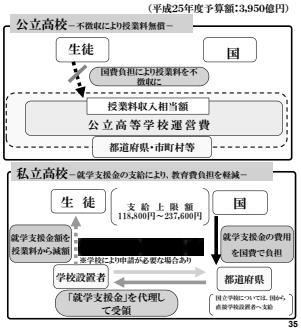
○私立の高等学校生徒については、高等学校等就学支援金として授業料について一定額（年額118,800円）を助成（学校設置者が代理受領）することにより、教育費負担の軽減を図る。

○私立の高等学校に通う低所得世帯の生徒については、所得に応じて、助成金額を1，5～2倍した額を上限として助成する。

年収250万円未満程度※　237,600円（2倍）

年収250～350万円未満程度※　178,200円（1.5倍）

※両親と子ども2人の世帯の場合を想定



35

高校無償化制度の見直しについて

教育費負担の軽減を図り、実質的な教育の機会均等を実現するため、高校無償化制度を総合的に見直す

見直しの方向性

①低所得者への支援
②公私間格差・自治体間格差の是正
このため、現行制度に所得制限を設けて、高等学校等に係る修学支援の充実を図る

現状の課題	見直しの具体策
無償化前から授業料が全額免除されていた低所得者は恩恵がなかった 低所得者にとって授業料以外の教育費（教科書代など）も大きな負担	低所得者支援のため、公立・私立ともに対象とした奨学のための給付金制度を創設
私学進学者の負担は依然として重く、都道府県によって支援の状況が大きく異なる	公私間格差を縮小し、国による私立に対する支援を拡充

36

政策4. いじめ・体罰の根絶

37

【課　題】

○「いじめ防止対策推進法（平成25年6月成立）」の理念の早期実現

【改革の方向性】

① いじめの問題への対応
- ・いじめ防止対策推進法
  - →・国や学校等における「いじめ防止基本方針」策定義務
  - ・学校におけるいじめ防止対策のための組織設置義務　など

② 体罰禁止の徹底
- ・懲戒と体罰の区別など

③ 運動部活動における体罰根絶
- ・運動部活動での指導のガイドライン

④ 道徳の教科化
- ・教材の抜本的充実、新たな枠組みによる教科化

日本におけるESDの推進について

中国教職員招へいプログラム

文部科学省国際統括官付 （日本ユネスコ国内委員会事務局）

文部科学省
MEXT
MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

Ⅰ 持続可能な開発のための教育（ESD)について
Ⅱ 我が国のユネスコスクール
Ⅲ ESDへの取組
Ⅳ ESDに関するユネスコ世界会議

文部科学省
MEXT
MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

Ⅰ 持続可能な開発のための教育（ESD)について

Sustainable Development（持続可能な開発）とは･･･

「将来の世代が自らのニーズを充足する能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすこと」

※ 国連「環境と開発に関する世界委員会（ブルントラント委員会）」報告書『我ら共通の未来（Our Common Future）』(1987年）における定義

持続可能な開発のための教育（ESD）

とは･･･

「持続可能な社会の担い手を育む教育」

1．万人のための教育(Education for All)

世界教育フォーラム（ダカール,2000年）で合意された6つの目標

1）就学前保育・教育の拡大
2）全ての子ども達が無償で質の高い義務教育へのアクセスを持ち、修学を完了
3）全ての青年及び成人の学習ニーズが、適切な学習プログラム及び生活技能プログラムへの公平なアクセスを通じて実現
4）識字率の50%改善
5）教育における男女の平等を達成
6）教育の全ての局面における質の改善

2．ミレニアム開発目標(Millenium Development Goals)

2000年9月ミレニアム宣言において設定

目標1：極度の貧困と飢餓の撲滅
目標2：初等教育の完全普及の達成
目標3：ジェンダー平等推進と女性の地位向上
目標4：乳幼児死亡率の削減
目標5：妊産婦の健康の改善
目標6：HIV/エイズ、マラリア、その他の疾病の蔓延の防止
目標7：環境の持続可能性確保
目標8：開発のためのグローバルなパートナーシップの推進

3．「学習：秘められた宝」

（ユネスコ「21世紀教育国際委員会」,1998年）

学習の四本柱

1）知ることを学ぶ
2）為すことを学ぶ
3）共に生きることを学ぶ
4）人間として生きることを学ぶ

4. 国連持続可能な開発のための教育の10年
（United Nations Decade of Education for Sustainable Development）

- **2002年 ヨハネスブルクサミットで我が国が提案**
- **2002年 国連決議（第57回総会）**
  - **2005～2014年の10年**
  - **ユネスコを主導機関に指名**
- **2005年 DESD国際実施計画をユネスコにて策定**

全体目標：<u>持続可能な開発の原則、価値観、実践を、教育と学習のあらゆる側面に組み込んでいくこと</u>

- **2009年 ESD世界会議（ボン）**
  - **ボン宣言の採択**
- **2014年 持続可能な開発のための教育（ESD）に関する ユネスコ世界会議 （愛知県・名古屋市／岡山市）**

5. ESDに関する我が国の取組

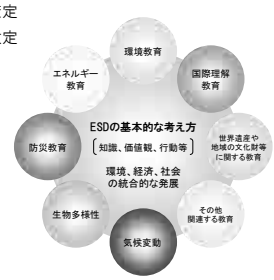
- 2005年 内閣官房に関係省庁連絡会を設置
- 2006年 DESD国内実施計画を策定
- 2011年 DESD国内実施計画を改定

<u>基本的考え方（国内実施計画）</u>

ESDは、持続可能な社会づくりの担い手となるよう個々人を育成する教育。

特に、

- 人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと。
- 個々人が他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性の中で生きており、「関わり」、「つながり」を尊重できる個人を育むこと。



6. ESDに関する文部科学省の取組

■ 教育振興基本計画（平成20年7月1日閣議決定）

第3章 今後5年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策

（1）基本的考え方

②「絆」の接続：一貫した理念に基づく生涯学習社会の実現
また、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）においては、地球的視野で考え、様々な課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組み、持続可能な社会づくりの担い手となるよう一人一人を育成する教育（「持続発展教育／Education for Sustainable Development（ESD）」）が提唱されており、2005年から2014年までの10年間は、「国連持続発展教育の10年」と位置付けられている。地球的規模での持続可能な社会の構築は、我が国の教育の在り方にとっても重要な理念の一つである。

（3）基本的方向ごとの施策

④いつでもどこでも学べる環境をつくる

【施策】
◇ 持続可能な社会の構築に向けた教育に関する取組の推進
一人一人が地球上の資源・エネルギーの有限性や環境破壊、貧困問題等を自らの問題として認識し、将来にわたって安心して生活できる持続可能な社会の実現に向けて取り組むための教育（ESDの重要性について、広く普発活動を行うとともに、関係府省の連携を強化し、このような教育を担う人材の育成や教育プログラムの作成・普及に取り組む。特に、ESDを主導するユネスコの世界的な学校ネットワークであるユネスコ・スクール加盟校の増加を目指し、支援する。

■ 第2期教育振興基本計画（平成25年6月14日閣議決定）

第1部我が国における今後の教育の全体像

Ⅲ四つの基本的方向性

（1）社会を生き抜く力の養成～多様で変化の激しい社会での個人の自立と協働～
（今後の学習の在り方）
○持続可能な社会の構築という見地からは、「関わり」「つながり」を尊重できる個人を育成する「持続可能な開発のための教育（ESD）」の推進が求められており、これは「キー・コンピテンシー」の養成にもつながるものである。

第2部今後5年間に実施すべき教育上の方策

Ⅰ四つの基本的方向性に基づく方策

1. 社会を生き抜く力の養成
（4）生涯の各段階を通じて推進する取組
基本施策11現代的・社会的な課題に対応した学習等の推進
【基本的考え方】
○現代的、社会的な課題に対して地球的な視野で考え、自らの問題として捉え、身近なところから取り組み、持続可能な社会づくりの担い手となるよう一人一人を育成する教育（持続可能な開発のための教育：ESD）を推進する。
【主な取組】
11－1現代的・社会的な課題等に対応した学習の推進
ユネスコスクールの質量両面における充実等を通じ地球規模での持続可能な社会の構築に向けた教育（持続可能な開発のための教育：ESD）を推進する。

■ 学習指導要領

学習指導要領の改訂（2008年3月公示）
新学習指導要領 （2008年3月、2009年3月）

持続可能な社会の構築の観点を盛り込み
- ◆ 小学校学習指導要領の総則や理科、社会、
- ◆ 中学校学習指導要領の理科、公民、地理、
- ◆ 高校学習指導要領の地理歴史、公民など

■ 日本ユネスコ国内委員会

- 2003年 「国連持続可能な開発のための教育の10年」に関してユネスコが策定する国際実施計画への提言
- 2007年 「持続可能な開発のための教育の10年」の更なる推進に向けたユネスコへの提言
- **→ 同年第34回ユネスコ総会でESD推進のための決議へ**
- 2008年 持続発展教育（ESD）の普及促進のためのユネスコスクール活用について（提言）
- 2012年 ユネスコスクールガイドラインについて

■ ESDオフィシャルサポーター

2014年に開催する「持続可能な開発のための教育（ESD）」に関するユネスコ世界会議」に向けて、広く一般にESDを普及させることを目的として著名人を中心に組織。

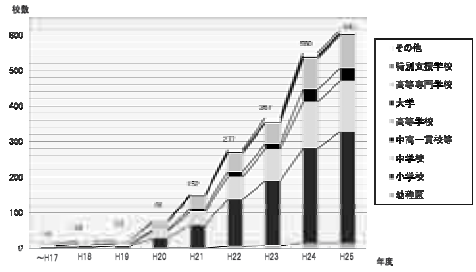
Ⅱ　我が国のユネスコスクール

ユネスコスクール　＝　ESD推進の拠点
ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校

①参加資格

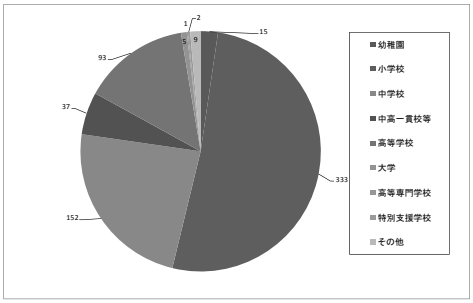
- 就学前教育・小学校・中学校・高等学校・技術学校・職業学校、教員養成学校、特別支援学校等（国公私立を問わず）
- ユネスコの理念に沿った取組を継続的に実施していることが必要

②ユネスコスクール加盟校数の推移

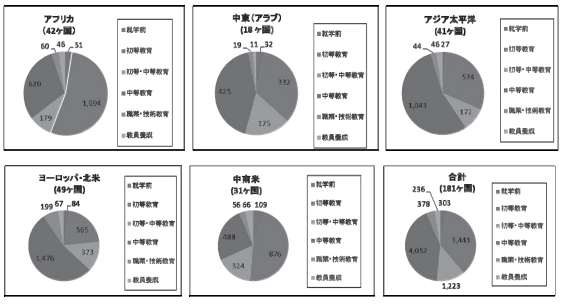


平成25年9月現在

③ユネスコスクールの学校別内訳（平成25年9月現在）



④世界のユネスコスクール地域・学校段階別加盟校数
（平成25年6月現在）



出典：ユネスコ

⑤ASPUnivNet（ユネスコスクール支援大学間ネットワーク）

→ 17大学　ユネスコスクールに助言・支援（日本の特色ある取組）

2008年創設

岡山大学：平成25、26年度ASPUnivNet事務局

⑥ユネスコスクールへの支援

ユネスコスクール ウェブサイトの設置

ユネスコスクール加盟校増加やネットワーク強化、ESDの理解増進を図ることを目的に、ウェブサイトを設置（2009年3月～）

■コンテンツ■

- ESDやユネスコスクールに関する基本情報の発信
- ユネスコスクール間の情報交換等の場の提供
- 優良事例や教材等の紹介
- ユネスコスクール全国大会などのイベント紹介（資料ダウンロード、動画配信）　等

ユネスコスクールウェブサイト
http://www.unesco-school.jp/

⑦ユネスコスクールガイドライン
（平成24年8月20日　日本ユネスコ国内委員会）

ユネスコスクールとして大切なこと

- ユネスコスクールの活動には、次のようなことが大切ですので、各学校におかれては、これらの点を念頭において活動いただくことを期待しております。
- 国内外のユネスコスクール相互間のネットワークを介して、互いに交流相手の良さを認め合い、学び合うこと。
- 地域の社会教育機関、NPO等との連携などを通じて、開かれたネットワークを築くよう努めること。
- 校内外における各種研修の充実・活用を図るなど、ユネスコスクールの活動を通じて広く学校外にも働きかけ、我々人類社会が持続的に発展するよう心がけること。
- 学校経営方針等にユネスコスクールの活動に取り組むことを明確に示し、学校全体で組織的かつ継続的にユネスコスクールの活動に取り組みやすくすること。
- ユネスコスクールの活動を自らの学校評価の項目に盛り込み、活動の質の向上に努力すること。
- 必要に応じ、ASPUnivNet[1]加盟大学をはじめとする高等教育機関の支援や協力を得ながら、ユネスコスクールの活動の充実に努めること。

[1] ユネスコスクールのパートナーとして、ユネスコスクールの活動を支援する大学のネットワーク。

持続発展教育（ESD）推進拠点として大切なこと

ユネスコスクールが持続発展教育（ESD）推進拠点として発展していくには、次のようなことが大切ですので、各学校におかれては、これらの点を念頭において活動いただくことを期待しております。

- 持続発展教育（ESD）を通じて育てたい資質や能力を明確にし、自分で、あるいは協働して、問題を見出し解決を図っていく学習の過程を重視した教育課程を編成するよう努めること。
- 総合的な学習の時間を中心とした教科横断的な指導計画を立てるなど、指導内容を適切に定め、さらに、指導方法の工夫改善に努めること。
- 持続発展教育（ESD）の推進拠点として、研究・実践に取り組み、　その成果を積極的に発信することを通じて、持続発展教育（ESD）　の理念の普及に努めること。

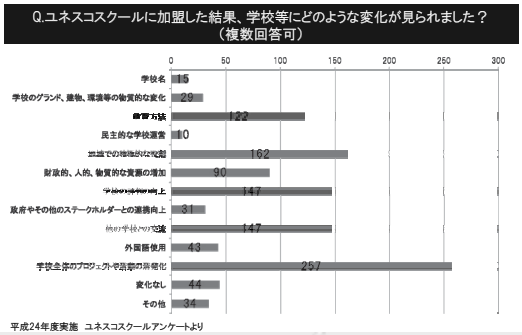
持続発展教育（ESD）とは、持続可能な社会づくりの担い手を育む教育であり、その中には、国際理解、環境、多文化共生、人権、平和、開発、防災などテーマ・内容が含まれます。従って、持続発展教育（ESD）で取り上げるテーマ・内容は必ずしも新しいものではありません。むしろ、それらを持続発展教育（ESD）という新しい視点から捉え直すことにより、個別分野の取組に、持続可能な社会の構築という共通の目的を与え、具体的な活動の展開に明確な方向付けをするものです。

また、それぞれの取組を お互いに結び付けることにより、既存の取組の一層の充実発展を図ることを可能にします。

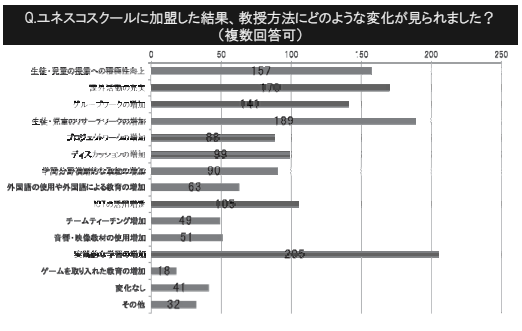
持続発展教育（ESD）の実施においては、「人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと」や、「他人、社会、自然環境との関係性を認識し、関わり、つながりを尊重できる個人を育むこと」の観点が必要です。

持続発展教育（ESD）の理念は、現行の教育振興基本計画（2008年7月策定）に盛り込まれていますし、学習指導要領（2008年、2009年公示）で示されている「生きる力」という理念にも通ずるものです。

⑧ユネスコスクールアンケート

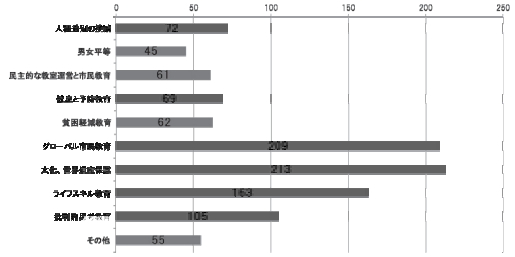


平成24年度実施　ユネスコスクールアンケートより



平成24年度実施　ユネスコスクールアンケートより

Q.今後のユネスコスクールの活動について、特に重視するべきと考える分野を選択してください。（複数回答可）



平成24年度実施　ユネスコスクールアンケートより

⑨ユネスコスクール間の交流

■ ユネスコスクール全国大会
日　程：平成25年12月1日（日）
開催地：東京都多摩市
テーマ：ESDのさらなる発展を目指して
－2014年ユネスコスクール世界大会を見据え

■ ユネスコスクール地域交流会in広島
日　程：平成25年12月7日（土）
開催地：広島県広島市

Ⅲ ESDへの取組

1.日本/ユネスコパートナーシップ事業

日本ユネスコ国内委員会では、知的交流を通じた国際連合教育科学文化機関（以下「ユネスコ」という）に関する活動の更なる振興に取り組むこととしている。
ユネスコの理念及び目的の実現に向けて、日本ユネスコ国内委員会が必要と考える事業を国内のユネスコ活動に関係のある機関及び民間団体等へ委託し、広く国民のユネスコ活動への参加の促進、更にはユネスコ活動の普及と理解の促進を図る。今年度は、持続可能な開発のための教育（ESD）の普及・促進のため2014年に行われる「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ会議」を見据えた活動の実施をテーマにし、審査委員会を経て委託事業者を選定した。

○2013年度主要な日本／ユネスコパートナーシップ事業
•ASPUnivNet運営管理事業（国立大学法人岡山大学）
•ユネスコスクール地域交流交流会in広島（公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター）
•第5回ユネスコスクール全国大会（NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム）
•ESDの10年・地球市民会議2013（「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム）
・ESDに関するユネスコ世界会議「ユース・コンファレンス」に向けた国内の若者によるプレ・コンファレンス「ESD日本ユース・コンファレンス」（公益財団法人五井平和財団）

2. 日韓教職員交流

- 背景
  2000年　日本政府による韓国初等中等教育教員の招へいを開始。
  2005年　韓国政府による日本の教職員招へいを開始。
  過去13年間で約2000名の教員が相互訪問。
  2008年度より、ESDをテーマ
  ○平成24年度　派遣プログラム　53名
  招へいプログラム　144名
- 目的
  ・両国の学校及び地域社会における持続可能な開発のための教育（ESD）と国際理解教育（EIU）の好事例を探る。
  ・教育経験を交換する機会を提供し、日韓両国の教育の質を高める。
  ・日韓教職員のネットワーク構築・強化に寄与する。

3. ESD日米教員交流

- 背景
  日米両国政府（文部科学省と米国国務省）の共同提案により、2009年度開始
  ESDを共通のテーマに、日米教員間で相互交流、意見交換、共同研究
  参加者自身が取り組み、共同で大きなアウトプットを求められる参加型プログラム

  ○平成25年度　派遣プログラム　24名
  招へいプログラム　24名
- 目的
  ・両国の教員交流推進により日米両国の相互理解と友好を促進する
  ・ESDをテーマに、地域の実例を知るとともに、意見交換、共同研究による日米の教育交流をはかる

4. SEAMEO（東南アジア教育大臣機構）-Japan ESD Award

- 2012年「SEAMEO-Japan ESD Award」を創設
- 東南アジア地域でESDに係るGP校を表彰、地域での交流を図る。
- 文部科学省とSEAMEOが共催。パートナーとしてユネスコ・バンコク事務所、SEAMEO各センターが参加
- 対　　象：SEAMEO加盟国内の小・中・高等学校
- 2012年第一回受賞校：防災・減災ESD

第1位　クンジャンゴン郡立第一高等学校（ミャンマー・ヤンゴン市）
事業名：クンジャンゴン郡立第一高等学校防災計画・活動
（副賞として日本スタディーツアーを行い、日本のユネスコスクールと交流）
第2位　イリラナン小学校（フィリピン・西ネグロス）
事業名：イリラナン防災教育プログラム及び学校及びコミュニティの防災準備・設備
第3位　ジェジェラン州立イスラム小学校（MINジェジェラン）（インドネシア・ジョクジャカルタ市）
事業名：災害は我々の敵ではない―MINジェジェランにおける防災活動実施に向けた学校コミュニティの動員
特別賞　ワット・スムボアトン学校（タイ・スパンブリ州）
事業名：地域の技術に基づいて自然と共存する人生の幸福

Ⅳ 持続可能な開発のための教育(ESD)に関するユネスコ世界会議

（１）愛知県・名古屋市で開催される閣僚級会合
及び全体の取りまとめ会合
2014（平成26）年11月10日（月）から12日（水）
11月13日（木）国内の関係者によるフォローアップ会合開催

（２）岡山市で開催される各種ステークホルダーの
主たる会合
①ユネスコスクール世界大会
2014（平成26）年11月6日（木）～8日（土）

②ユース・コンファレンス
2014（平成26）年11月7日（金）

③持続可能な開発のための教育に関する拠点の会議
2014（平成26）年11月4日（火）～7日（金）

■ ユネスコスクール世界大会の概要

「ユネスコスクール全国大会」、「Student(高校生)フォーラム」及び「教員フォーラム」の3つのフォーラムで構成される。
（主催：ユネスコ、文部科学省、日本ユネスコ国内委員会）

【Student(高校生)フォーラム】
日 程　2014年11月6日(木)～7日(金)
参加者　1チーム5名(教員1名、Student(高校生：15～18歳)4名)
海外から33チーム165名(教員33名、高校生132名)、日本から9チーム　45名(教員　9名、高校生　36名)
合　計　42チーム　210名(教員42名、高校生168名)

成　果　＊ 参加者(高校生)が各国のユネスコスクールにおいて行われてきた国連持続可能な開発のための教育(ESD)の実践を発表、共有する。
＊ 各国の課題を踏まえ、共通の未来を創るために協働して取り組むことを確認し、宣言文をまとめる。
＊ その宣言は、ユネスコスクール全国大会のメッセージに添付し、愛知県名古屋市で開催される「国連持続可能な開発のための教育(ESD)に関するユネスコ世界会議」において、発表する。

【教員フォーラム】
日 程　2014年11月7日(金)
参加者　上記Student(高校生)フォーラムに参加するチームの教員42名

【全国大会】
日 程　2014年11月8日(土)
参加者　日本のユネスコスクールの教員、都道府県・市区町村教育委員会、ユネスコスクール協力者(企業、NGO／NPO、PTA、大学生、専門家など)、国外ユネスコスクール(教員フォーラム参加教員等)、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク(ASP Univnet)

ご静聴ありがとうございます

●

文部科学省
MEXT
MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

◆付録 6. 過去のプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
第 1 回:2002 年 12 月 1 日～14 日	東京都、和歌山県、岡山県、広島県、高知県、大阪府、京都府	97 名
第 2 回:2003 年 11 月 26 日～12 月 9 日	東京都、熊本県、愛知県、島根県、徳島県、大阪府、京都府、奈良県	100 名
第 3 回:2004 年 11 月 18 日～12 月 1 日	東京都、宮城県、長崎県、宮崎県、沖縄県、大阪府、京都府、奈良県	99 名
第 4 回:2005 年 10 月 18 日～31 日	東京都、長野県、福井県、和歌山県、宮崎県、大阪府	101 名
第 5 回:2006 年10 月 18 日～31 日	東京都、千葉県八街市、埼玉県、岐阜県、高知県、山口県柳井市、大阪府、奈良県	135 名
第 6 回:2007 年 10 月 16 日～29 日	東京都、千葉県八街市、岡山県総社市、富山県南砺市、三重県、岐阜県、大阪府、奈良県	135 名
第 7 回:2008 年 10 月 14 日～27 日	東京都、宮城県気仙沼市、福島県、京都府与謝野町、香川県、福岡県北九州市、大阪府、京都府	133 名
第 8 回:2009 年10 月 13 日～26 日	東京都、岡山県総社市、熊本県植木町、沖縄県那覇市、千葉県成田市、埼玉県さいたま市、大阪府、京都府	142 名
第 9 回:2010 年 10 月 12 日～25 日	東京都、秋田県大仙市、滋賀県近江八幡市、宮城県気仙沼市、長崎県壱岐市、長崎県、大阪府、京都府	130 名
第 10 回:2011 年 10 月 12 日～23 日	東京都、山口県美祢市、熊本県荒尾市、東京都多摩市、岡山県総社市、徳島県、大阪府、京都府	134 名
第 11 回: **第 1 班:2013 年 11 月 13 日～24 日** **第 2 班:2013 年 12 月 1 日～10 日**	**第1班: 東京都、大阪府** **第 2 班: 東京都**	**第 1 班: 50 名** **第 2 班: 49 名**
第 12 回:2013 年 10 月 20 日～28 日	東京都、熊本県荒尾市、岡山県総社市、長崎県長崎市、和歌山県、大阪府	59 名

●国際連合大学 2012-2013 年国際教育交流事業●
中国教職員招へいプログラム
実施報告書

2014 年 3 月
編集・発行

国際連合大学(UNU)
〒150-8925
東京都渋谷区神宮前 5-53-70
電話　(03) 5467-1212
URL　http://jp.unu.edu/

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)
〒162-8484
東京都新宿区袋町 6 番地　日本出版会館
電話　(03) 3269-4498
URL　http://www.accu.or.jp

Printed in Japan by Waco Inc.[150]
©2014 Asia-Pacific Cultural Center for UNESCO (ACCU)